國文學史

新制版

4a
810
A213

42633
教科書文庫
4
810
51-1938
20000
67664

資料室

文部省檢定濟
師範學校・中學校國語漢文科
高等女學校國語科
昭和十三年三月二日

文學博士 高木武 著

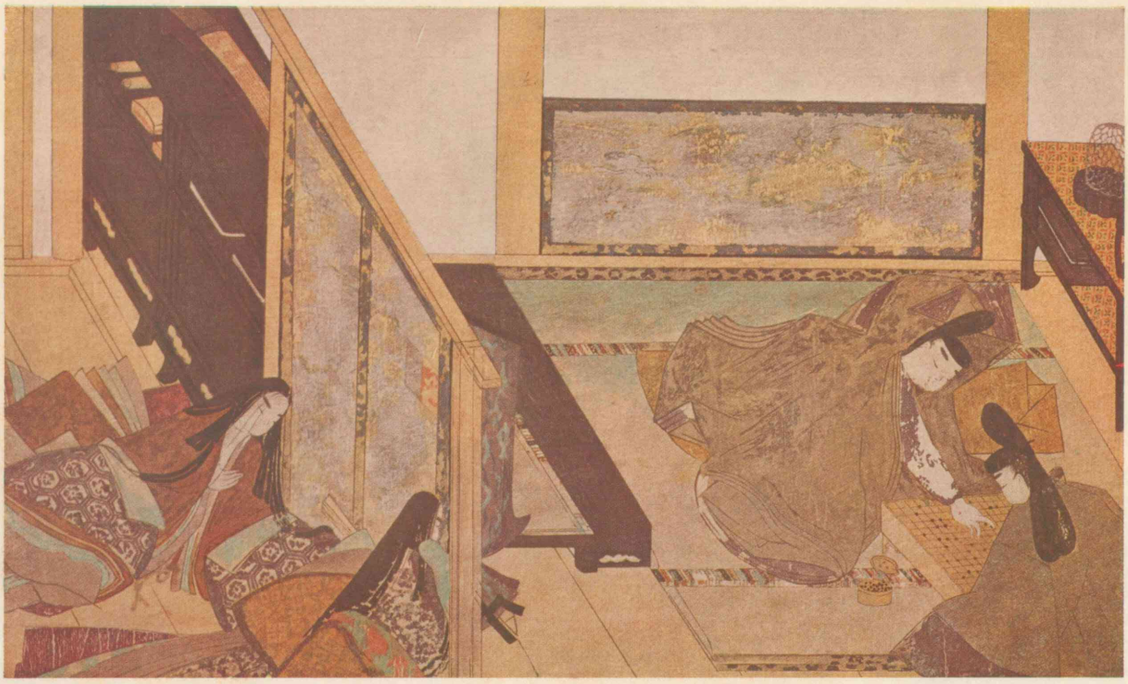
國文學史

東京 冨山房藏版

新制版

広島大学
教
67664
図書

4a
810
BB13



源氏物語繪卷　傳藤原隆能筆

凡例

一、本書は、昭和十二年三月改正された教授要目に準據し師範學校・中學校・高等女學校高等科用國文學史教科書として著した。

二、本書は、まづ各時代の概觀を敍して、時代思潮の特色を明らかにすると同時に、その推移を示し、次に各作品を歌謠・物語・日記・紀行・隨筆等に分類して、それ等の形式・內容等を記述し、更にその後世に與へた影響に就いても吟味した。

三、本書は、我が國民性の特質と國民文化の由來とを知らしめることに最も意を用ひ、我が國體の本義や日本精神の本質等をも闡明することに努めた。

四、本書は、文例を豐富にして、これを鑑賞せしめることにより、本文の

記述の足らない點を補はしめるやうに計つたが、なほ欄外をも十分に活用して、各時代のあらゆる分野の作品を可及的に記述するやうにした。

五、本書は、一枚刷の他に本文中にも多くの寫眞版を挿入し、最も權威ある古寫本・古刊本乃至作者の自筆稿本等の面影を示し、本文の理解に資した。

昭和十二年八月

著者しるす

國文學史 新制版

目次

序說……一
第一章　大和時代
一概觀……三
二神話と傳說……六
三祝詞と宣命……一四
四歌謠……二〇
五漢文學……二七
第二章　平安時代

一 概觀……二九
二 漢文學……三二
三 歌謠……三三
四 物語と日記・隨筆……四五
五 歴史物語と説話文學……五六

第三章 鎌倉室町時代

一 概觀……六一
二 歌謠……六三
三 戰記物語……七二
四 歴史物語と説話文學……七七
五 擬古物語と御伽草子……八二
六 日記・紀行と隨筆……八三
七 謠曲・狂言と舞の本……八八

八 漢文學と吉利支丹文學……九五

第四章 江戸時代

一 概觀……九八
二 浮世草子と黄表紙・讀本類……一〇〇
三 淨瑠璃と脚本……一一〇
四 和歌・狂歌と謠物……一一六
五 俳諧と川柳……一二一
六 隨筆と紀行……一三〇
七 漢文學と國學……一三二

第五章 明治大正時代

一 概觀……一三九
二 小説……一四〇

三　戲曲……一五八
四　短歌と俳句……一六一
五　詩……一六九
六　評論……一七三

第六章　現代

國文學史

新制版

序說

文學の本質

文學とは、思想・感情を言語によつて表現したまつた文字をいふ。人の動を與へる美的感興を得るとの共に足らし、精神上の滿かづて

有史以前、太古草昧の時代に水草を逐うて生活してゐた原始人の間にも、單純ながら喜怒哀樂の感情による精神生活はあつたであらうから、完成された言語はないまでも、感情を端的にあらはす幼稚な言語があつたことは、容易に想像されるところである。そしてこの幼稚な言語が、幾分でも美的な詠歎となつてあらはれた時、ここに歌謠が萌芽し、文學の世界が展開されたといへよう。しかし文字のない時代の文學は、たゞ口から口に傳へられるだけであるから、全く固定性がなかつたが、やがて人智が進

國文學史の使命

み、文字が發明されると、文學は始めて固定し、その弘布の範圍が横に無限に擴大すると同時に縱にも無窮に伸長し、かくして繪畫・彫刻・音樂・舞踊等の諸藝術に比して著しく永續性と普及性とに富み、人文發展の要素として特に偉大な權威をもつものとなつたのである。

文學史は太古から現代に至るまでの文學の變遷・發達の跡を究めるもので、卽ち個々の文學作品を知ることにより、その時代を通じて流れてゐる思潮を汲み更に進んでは文化の由來や本質を明らかにしようとするものである。故に我々の祖先の精神生活を知り、日本精神の神髓を明らかにして、將來一層輝かしい日本文化を築き、日本國民としての生活を充實向上せしめてゆかうとするには、國文學史を研めることが頗る肝要なことであるといはなければならない。

時代の範圍

第一章　大和時代

一　概觀

人皇第一代神武天皇が皇居を畝傍山の麓橿原（かしはら）の地に奠（さだ）め給うてから、第五十代桓武天皇が山城國長岡に遷都されるまで凡そ一千五百年の間、歷代の皇居は概ね大和國にあつたので、この時代を大和時代といつてゐる。しかし大和時代にあらはれた文學は、必ずしも大和時代に製作された文學ではない。その以前の時代に於て製作された文學にして、いまだ文字のなかつたため口づから傳へてゐたものを、この時代になつて始めて記錄したものも少くない。故に大和時代の文學といつても、その時代はずつと溯つて、神代の文學をも包括することとなるわけである。

大和國の自然

「眞秀ろば」は最もすぐれた地域をいふ。「たゝなつく」は重疊してゐるの意。

時代の特色と文學の傾向

大和國は上代の帝都の地として、まことにふさはしい國であつた。日本武尊は「大和は國の眞秀ろば、たゝなつく青垣山、隱れる大和し美し」とお歌ひになつたが、この御歌の通り、東には春日・高圓から三輪・泊瀨の山々、南には多武・高取から吉野の群山、西には金剛・葛城から生駒の連嶺が、遠く近く青垣をなしてこの國を圍んでゐる。そして中央の平野は坦々として廣く、明るい日の光は隅々まであまねく照りとほり、地味豐かに、氣候は極めて溫和である。自然の美を心から愛し、どこまでも快濶で、明るさを好んだ我が上代人は、この理想鄕に、皇室を中心として、氏族制度による鞏固な團結をなしつゝ平和な樂しい生活を營んでゐたのであつた。

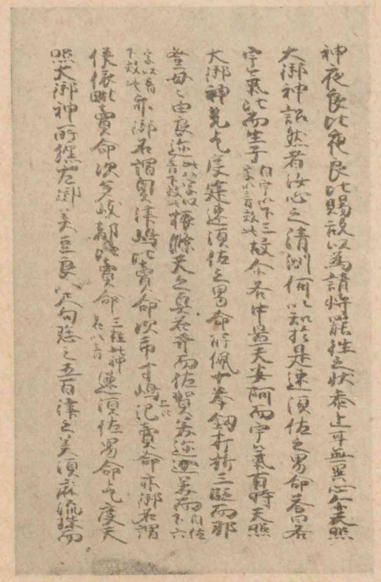
百濟から漢文學が傳へられたのは應神天皇の朝で、それ以前は我が國には文字はなかつた。何事も口づから言ひつぎ語り傳へるばかりであつた。しかしこの間にあつても、昂揚した感情を旋律的にあらはした歌謠、國民的の思想や信仰等によつて生み出された神話・傳說、或は祝詞の如きものが既に發生してゐた。殆ど外國文學の影響を受けることのなかつたこれ等の原始文學は、我が國民の純粹の性情を赤裸々にあらはして、それが卽興的であればあるほど、本來の國民精神を窺ひ得る點に於て尊い價値を有してゐるのである。この傳誦されて來た文學は、漢文學が傳來してから漢字によつて記錄されたのであるが、その文獻の現存してゐるものも「古事記」「日本書紀」をはじめ可なりある。漢文學の傳來よりやゝおくれて、欽明天皇の朝には佛敎がもたらされた。次いで大陸との交通が正式に開かれるに及んで、我が文運の進展は急に著しくなり、國民の自覺心は大いに喚起され、かくして「咲く花のにほふが如き」奈良朝の盛代を現出するに至つた。

古事記と日本書紀

「古事記」には天地開闢から推古天皇の御代に至るまでの事蹟が記されてゐる。

二　神話と傳說

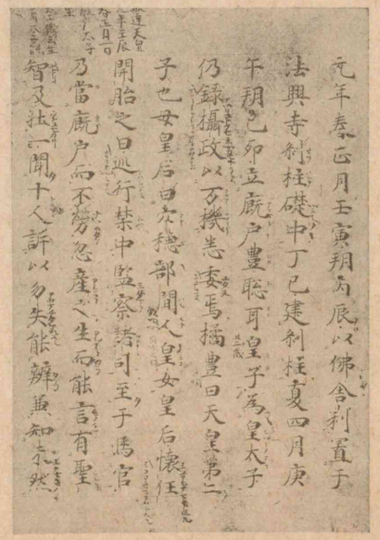
傳誦時代の文學である神話・傳說は、これを「古事記」「日本書紀」及び「風土記」の中に見出すことが出來る。



古事記（眞福寺本）

「古事記」三卷は、前に天武天皇が稗田阿禮をして、皇室の御系譜や皇位繼承の次第、また皇室をはじめ諸氏族が傳承した神話・傳說等を誦み習はしめ給うたが、いまだ成書とはなつてゐなかつたのを、奈良朝に入つて和銅四年、元明天皇が太安萬侶に命じてそれ等の事柄をそのまゝ筆錄せしめられ翌五年成つて獻つたものであるまた「日本書紀」三十卷は「古事記」よりやゝおくれて元正天皇の養老四年に天武天皇の皇子舍人親王・太安萬侶等多くの學者が勅命によつて撰修したもので、「古事記」と共に、現存する最古の文獻として尊ばれてゐる。たゞ「古事記」が古語・古意を可及的に保存しようとして、國文を主とし、漢文の構造を併用した折衷體の記述法をとつてゐるのに對し、「日本書紀」は支那の史籍に倣ひ、歌謠の外は殆ど純粹の漢文で書かれてゐるところに二書の相違がある。なほ「日本書紀」はその書名を見ても明らかであるやうに、支那に對して我が國

「日本書紀」には天地開闢から持統天皇の御代に至るまでの事蹟が記されてゐる。



日本書紀（東洋文庫本）

記紀の神話

の尊嚴なる所以を知らしめようとして編纂された官撰史であるから、傳說的要素よりも史傳的要素の方が多く、文章は莊重瑰麗を極めてゐるが、文學的價値に於ては「古事記」に劣つてゐる。

神話は神を對象とする說話で、國民的の思想・信仰に立脚し、その國の原始時代に發生した文化形相の一つであるが、これは單なる空想的な幻想ではなく、むしろ原始時代の人々の實際生活に卽した創造物と見るべきものである。その中には、もとより想像的要素も多分に含まれてゐるけれども、それはその國民の思想・信仰に立脚してゐるのであるから、彼等の內面生活はそこに鮮かに反映してゐるわけである。隨つて「古事記」及び「日本書紀」に記された我が國の神話には、我が肇國の事情や精神が提示され、國民生活の現實や理想が確實に物語られてゐるのである。卽ち伊弉諾尊・伊弉冊尊がまづ大八洲國及び山川草木等を生み給う

記紀の傳說

た後、天照大御神・月讀尊・素戔嗚尊の三柱の貴い御子を生み給うた神話には、我が國土が皇祖神と御兄弟であり、我が國家と皇室とは離れることの出來ない關係にあることが示され、天照大御神が皇孫瓊瓊杵尊を天降し給うた神話には、我が國が萬世一系の天皇によつて永遠に統治せられるべき次第が示されてゐる。また大國主命が國土を潔く皇孫に獻ぜられた神話には、大義名分の道理をよく辨へた國民精神を見ることが出來る。その他、祖先崇拜の美風も、活動的・發展的な生活態度も、溫和寬仁にして淸淨潔白を愛する性情も、すべて神話の中に見られるのであつて、祖先の精神生活をまざ〳〵と傳へて、餘すところがない。

神話は神を對象とする說話であるが、傳說は人生を對象とする說話で、歷史時代に入つてから後に發生したものである。しかし傳說のうち時代の早いものは殆ど神話と區別はなく、たゞそ

れが豐富な人生的要素と、非常に強い傳播性とをもつてゐることや、必ず英雄または土地に附屬してゐることなどによつて、纔かに神話と區別されるに過ぎない。「古事記」「日本書紀」では神武天皇の卽位遊ばされてから以後の記事が卽ちそれであつて、現人神であらせられる天皇を中心として物語られてゐる傳說には、建設的・進取的な興國の氣分が、はち切れるほどに漲つてゐる。長髓彥御討伐に當つて、金色の靈鵄が神武天皇の御弓弭にとまつた物語、田道間守が垂仁天皇の勅を受けて常世國に赴き、非時の香菓を持ち歸つた物語、日本武尊が薨後、白鳥となつて天翔り給うた物語など、いづれも明るい內容をもつた傳說ならぬはない。

「あそび」は歌舞音樂をいふ。

ここに天照大御神、あやしとおもほして、天石屋戶を細めに開きて、內より告りたまへるは、「吾が隱りますによりて、天原おのづから闇く、また葦原の中つ國も皆闇からんとおもふを、何とかも天宇受賣はあそびし、また八百萬の神もろ〳〵咲ふぞ。」とのりたまひき。

（於是天照大御神、以爲恠、細開天石屋戶而、內告者、因吾隱坐而以爲天原自闇、亦葦原中國皆闇矣、何由以天宇受賣者爲樂、亦八百萬神諸咲。）

（古事記神代卷）

「とものを」は部屬の長の意。

「さきく」は無事にの意。

故、天照大神すなはち天津彥彥火瓊瓊杵尊に八坂瓊曲玉及び八咫鏡・草薙劍、三種の寶物を賜ふ。また中臣の上祖天兒屋命、忌部の上祖太玉命、猿女の上祖天鈿女命、鏡作の上祖石凝姥命、玉作の上祖玉屋命、すべて五部の神たちをもつて、そへ侍らしむ。よりて皇孫に勅してのたまはく、「葦原の千五百秋の瑞穗國は、これ吾が子孫の王たるべき地なり。宜しく爾皇孫就いて治せ。行矣、寶祚の隆えまさんこと、まさに天壤と窮りなかるべし。」

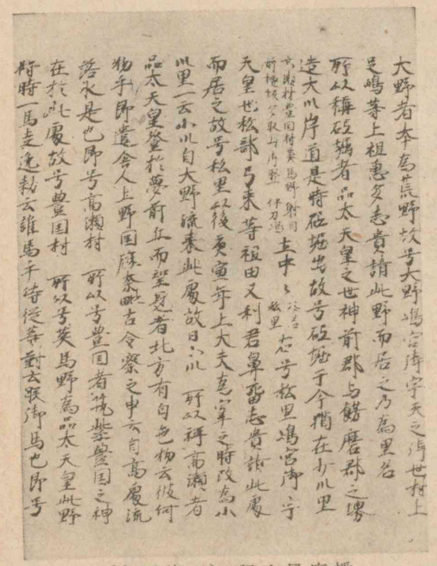
（故、天照大神乃賜天津彥彥火瓊瓊杵尊八坂瓊曲玉及八咫鏡草薙劍、三種寶物、又以中臣上祖天兒屋命、忌部上祖太玉命、猿女上祖天鈿女命、鏡作上祖石凝姥命、玉作上祖玉屋命、凡五部神、使配侍焉。因勅皇孫曰、葦原

千五百秋之瑞穗國、是吾子孫可王之地也。宜爾皇孫就而治焉。行矣、寶祚之隆當與天壤無窮者矣。

（日本書紀神代卷）

「古事記」「日本書紀」の外に、上代の傳說を結集した文獻として現存する「風土記」は、和銅六年、卽ち「古事記」が撰進された翌年に、元明天皇が畿內・七道諸國に詔して、その國々の地誌を編ましめられ、諸國で成るに隨つて獻つたもので、今は僅かに出雲・常陸・播磨・肥前・豐後の五箇國のもののみが存し、別に山城・大和・攝津以下三十餘箇國の各逸文が遺つてゐる。いはば當時の鄕土誌で、その所收の傳說は、悉く民

風土記



播磨風土記（三條西本）

間で行はれてゐた斷片的なものであり、それが國々に分つて記されてゐるところに記紀に見える傳說とはおのづから別趣の興味がある。說話の內容は大部分地名起原の說明をなしてをり、すべて牧歌的な鄕土の匂を豐かに漂はせてゐると共に、これにも國家的・民族的色彩の鮮かなものや、活動的・發展的な氣概のあらはれてゐるものが少くない。文體は概ね漢文であるが、中には「出雲風土記」の如く國文脈を多分に含んでゐるものもある。

「郡家」は郡司の役所。

高麻山は郡家の正北一十里二百步、高さ一百丈、周五里。北の方に樫・椿等の類あり、東・南・西三方みな野なり。古老の傳へにいふ、神須佐能袁命の御子、靑幡佐草彥命、この山の上に麻蒔きそめたまひき。故、高麻山といふ。卽ちこの山峰に坐すは、その御魂なり。

（高麻山、郡家正北一十里二百步、高一百丈、周五里。北方有樫・椿等類、東・南・西三方並野。古老傳云、神須佐能袁命御子、靑幡佐草彥命、是山上麻蒔初。

祝詞

農業・蚕業・月次祭・鹿島・諏訪・神嘗・大祓

故、云高麻山。卽此山峰坐、其御魂也。

（出雲風土記大原郡）

三　祝詞と宣命

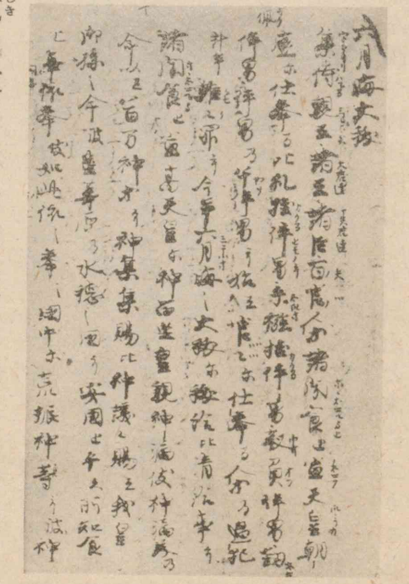
我が國は、言靈の幸はふ國」といはれ、また、「言靈のたすくる國」ともいはれた。これは言葉に神祕的な靈力が宿つてゐて、その作用により、めでたい言葉を唱へれば吉事を招くことが出來、不吉な言葉を唱へれば凶事を招くことが出來るといふ上代人の信仰から發したもので、我が國は言葉のよい靈の作用が特に著しい國であるとの意味に外ならない。かくの如き言葉の神祕力に對する上代人の信仰は敬神崇祖の精神から次第に祭祀が發達して來るにつれて、遂に一つの文學を生んだ。それが卽ち祝詞である。祝詞は神に白す言葉であるが、言靈信仰に發してゐるものであるから、その内容は、或は神德をほめ或は幣帛をたゝへるなど、

大祓

「延喜式」は朝廷年中の儀式、百官臨時の作法等を記したもの。「台記」は類長の日記。別記は「台記」中に別に儀式に關することを記錄したもの。

神意を悅ばしめる稱辭に滿たされてゐる。そして現實生活から罪穢及び災を祓ひ、國家の繁榮と民族の幸福とを願ふのが、その思想の主流をなしてをり、特に農事に關するものの多いのは我が國が農業をもつて立國の大本として來たことを語つてゐるものである。

祝詞の現存するものは、平安時代の初期、醍醐天皇の延長五年に藤原忠平等が撰進した「延喜式」に收められた二十六篇と、同時代の末期に藤原頼長が手記した「台記」の別記に載せられた一篇とがあるのみで、それもすべてが上代のものではなく、中には平安時代



延喜式祝詞篇（九條本）

に入つて制作されたものもある。その作者はもとより明らかでないけれども、當時世襲的に朝廷の祭祀に奉仕してゐた中臣・齋部の二氏が主として製作に當つたものであるらしい。これを組織の上から見ると、大體に於て、祭祀の由來等を語る敍事的の部分と、祈願の旨を述べる抒情的の部分とに分れ、修辭には、祝詞の本質上、上代人のなし得る最大限の技巧が凝らされ、對語や對句を盛んに用ひてあるのみならず、語句を反復重疊して、雄渾莊重な格調を添へ、森嚴崇高の氣を横溢せしめてゐる。

「いつ」は尊嚴の意。

「いほり」はぼんやりとして明らかでないこと。

かく宣らば、天つ神は天の磐門を押披きて、天の八重雲を、いつの千別きに千別きて聞しめさん。國つ神は高山の末、短山の末に上りまして高山のいほり、短山のいほりをかき別けて聞しめさん。かく聞しめしてば、皇御孫之命の朝廷を始めて、天の下四方の國には、罪といふ罪はあらじと、科戸の風の天の八重雲を吹き放つことの如く、朝の御霧夕の御霧を、朝風・夕風の吹き掃ふことの如く、大津邊に居る大船を、舳へ解き放ち、艫解き放ちて、大海原に押放つことの如く、彼方の繁木が本を燒鎌の敏鎌もちて打掃ふことの如く、遺る罪はあらじと祓へ給ひ清め給ふことを、高山の末、短山の末より、さくなだりに落ちたぎつ速川の瀨にます瀨織津姫といふ神、大海原に持ち出でなん。

「大津邊」は立派な港。

「燒鎌」は火で燒いて鍛へた鎌。

「さくなだり」は水が山から非常な勢で流れ落ちるさまをいふ。

（如此久乃良波、天津神波天磐門乎押披氐、天之八重雲乎、伊頭乃千別爾千別氐所聞食武。國津神波高山之末、短山之末爾上坐氐、高山之伊穗理、短山之伊穗理乎撥別氐所聞食武。如此所聞食氐波、皇御孫之命乃朝廷乎始氐、天下四方國爾波、罪止云布罪波不在止、科戸之風乃天之八重雲乎吹放事之如久、朝之御霧、夕之御霧乎、朝風・夕風乃吹掃事之如久、大津邊爾居大船乎、舳解放艫解放氐、大海原爾押放事之如久、彼方之繁木本乎、燒鎌乃敏鎌以氐打掃事之如久、遺罪波不在止祓給比清給事乎、高山之末、短山之末與里、佐久那太理爾落多支都速川能瀨坐須瀨織津比咩止云神、大海原爾持出奈武。）

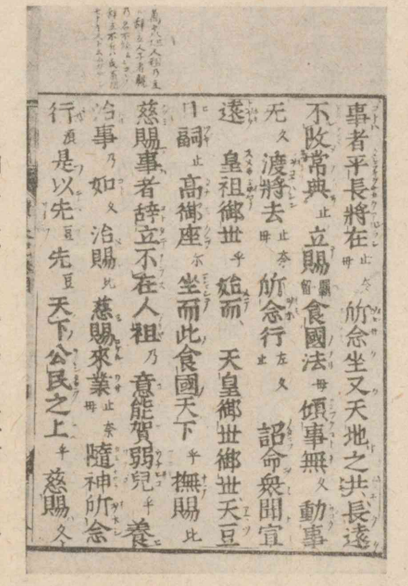
大祓は毎年六月と十二月との各晦に朱雀門で行はれた。

（大祓の一節）

宣命

「續日本紀」は文武天皇の御代から桓武天皇の御代に至るまでの事蹟を記した官撰史。

祝詞は神に白す言葉であるが、宣命は天皇が臣民に宣り給ふ御言葉である。しかし天皇が臣民に宣り給ふ御言葉でも、漢文で書かれたものはこれを詔勅といひ、國語で書かれたもののみを宣命といふのであつて、「續日本紀」に收められた文武天皇卽位の宣命以下六十二篇が現存してゐる。この宣命は、皇室または國家に重大事ある場合、我が國家の統治者としての御意志を臣民に宣布されるものであるから、文辭の莊重なこと、形式の整齊してゐることは祝詞と變りないが、その內容に至つては、祝詞よりも遙かに理智的な分子が多く、複雜でも


事者平長將在止矣 朕念坐又天地之共長遠
不敗常典止立賜 食國法 傾事無又動事
无久渡將去止奉 朕念行左久 詔命衆聞宣
遠 皇祖御世乎始而、天皇御世御世天豆
日嗣止高御座不坐而此食國天下乎撫賜比
慈賜事者辭立不在人祖乃意能賀弱兒乎養
治事乃如又治賜比慈賜來業止奈母隨神所念
行須是以先豆先豆天下公民之上乎慈賜久

續日本紀所收宣命（刊本）

あるそしてその中に畏くも臣民を大御寶とみそなはし、赤子といつくしみ給ふ大御心の程を窺ひ奉ることが出來るのである。なほ宣命には佛教や儒教等の外來思想が少からずとり入れられてゐるが、これは時勢に伴なふ當然の結果であらう。

遠皇祖の御世を始めて、天皇が御世々々、天つ日嗣と高御座にましてこの食國天の下を、撫で賜ひ、慈み賜ふことは、辭立つにあらず、人の祖のおのが弱兒を養ひ治すことの如く、治め賜ひ、慈み賜ひ來る業となも、神ながらおもほしめす。ここをもて、まづ〳〵天の下の公民の上を慈み賜はくと詔りたまふ天皇が大命を、衆聞しめさへと詔る。

遠皇祖御世乎始而、天皇御世御世、天豆日嗣止高御座爾坐而、此食國天下乎、撫賜比、慈賜事者、辭立不在、人祖乃意能賀弱兒乎養治事乃如久、治賜比、慈賜來業止奈母、隨神所念行須。是以、先豆先豆天下公民之上乎慈賜久止詔天皇大命乎、衆聞食止詔。

（元明天皇卽位の宣命の一節）

「辭立つ」は常と變つたことをする意。「弱兒」はをさな子をいふ。「治す」は育てること。

宣命や祝詞の如き表記法を宣命書といふ。

記紀の歌謡

四　歌謡

傳誦時代の歌謡も、やはりこれを「古事記」及び「日本書紀」の中に見ることが出來る。この二書の外にも「風土記」等に少しは見られるけれども、記紀に收められたものは、二書重複したものを除いてもなほ二百首の多きに上り、當時の代表的な歌謡はほゞこれに盡きてゐるといつてよい。一體、傳誦時代の歌謡は民族の共通的な生活感情を赤裸々に表現したもので、個性の文學ではなく民衆の文學であつた。また文字に書いて眼で讀む後世の歌と異なり、昂揚し切迫した感情を口づから吟誦した歌であるだけに、內容は光明的で、調は輕快に、題材は主として現實生活から取られて、敍景・詠物の作は極めて乏しい。卽ち戰勝の愉悅、酒宴の快味等が天眞爛漫に詠はれてゐるものが、當時の歌の大部分を占めてゐるのである。かくの如く單純な詠歎がそのまゝ歌になつたものであるから形式の一定してゐないのはもとより當然のことであるけれども、短音の句と長音の句とを交錯せしめて律格を形づくつてをり、素朴ながら疊語・對句・譬喩・枕詞等も用ひてあつて、後に發達すべき歌謡の形式・修辭の萌芽が、ここに認められる。

天皇が忍坂の大室屋に於て饗を土蜘蛛八十建に賜ひ、久米部等をしてたしめられた時の御製。

忍坂の　大室屋に　人多に　來入り居り　人多に　入り居りとも
みつ〳〵し　久米の子が　頭槌　石槌持ち　擊ちてし止まん　み
つみつし　久米の子らが　頭槌　石槌持ち　今擊たば良らし
（神武天皇―古事記）

掌酒活日が崇神天皇に神酒を獻つた時の歌。

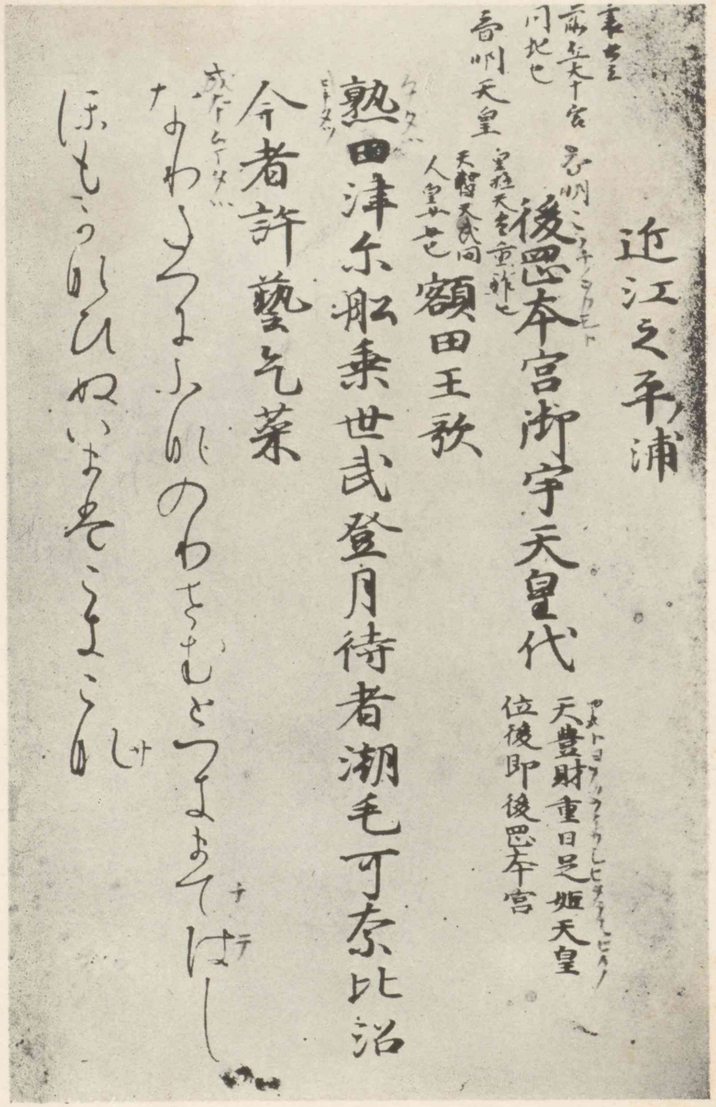
この御酒は　我が御酒ならず　大和なす　大物主の　釀みし御酒
幾久　幾久
（掌酒活日―日本書紀）

記紀の歌謡の美は、いはば土から掘り出されたまゝの粗玉の

萬葉集

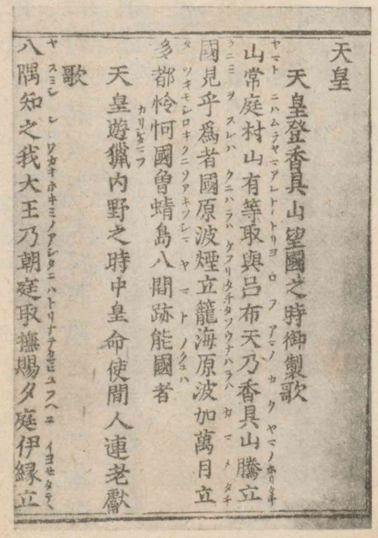
長歌は普通、五音七音を單位とし、これを幾つか重ねて、最後を五音で結ぶもの。旋頭歌は五七七五七七音の六音から成るもの。

美である。ところが、「萬葉集」の歌謠の美になると、それは既に磨きのかゝつた寶玉の美である。たゞに表現が洗煉されてゐるばかりでなく、内容に於ても記紀の歌に比して遙かに充實し、實に上代歌謠の極致を示してゐる。そしてこの「萬葉集」の時代は、あたかも口で歌つて耳で聞く歌から、文字に書いて眼で讀む歌が派生し、次第に個性のあらはれが顯著となり、遂に歌が一般民衆から離れ、一部上流知識階級の占有物となつてゆく過渡期に當つてゐたのであつた。「萬葉集」の撰者及び成立の時代に就いては明らかでないが、恐らく幾人かの手により、數次にわたつて編纂し繼がれて成つたものであらう。收められた歌謠は、仁德天皇の御代の作から淳仁天皇の御代の作に至るまで、長歌・短歌・旋頭歌合はせて四千五百餘首、これが二十卷のうちに收められてゐる。その詩形は大抵五音と七音とを基調とするものに整齊され、五七五



七七の五句三十一音から成る短歌が最も多く、その表記法は漢字の音訓を借りる外、機智を弄して戯訓を用ひるなど、巧妙を極めてゐる。そして作者は、上は天皇から下は防人・役民・農民・乞食者に至るまで、あらゆる階級の人々を網羅してゐるので、その歌風にも後世の歌集に見る如き型にはまつたところがない。また觀照や表現の態度もすべて自由であり自然であつて、何物にも歪められない朴直な「まこと」の精神が漲り、眞情の惻々として人に迫るものがある。特に皇室に對する忠誠の念、國を愛する心は「萬葉集」全卷に力強く迸り出てゐるが、敬神崇祖・家名尊重

戯訓はたとへば「三五月」「山上復有山」の如きもの。「萬葉集」の表記法の如く、漢字の音を借りて國語をあらはす時、この漢字を萬葉假名といふ。



天皇

天皇登香具山望國之時御製歌

山常庭村山有等取與呂布天乃香具山騰立國見乎爲者國原波煙立籠海原波加萬月立多都怜何國曾蜻島八間跡能國者

天皇遊獵內野之時中皇命使間人連老獻歌

八隅知之我大王乃朝庭取撫賜夕庭伊縁立

萬葉集（刊本）

といふやうな精神も到る所に見出されるなほ記紀の歌謠に既にその萌芽を見た對句や枕詞等の用法は、ここに至つて完成の域に達し聲調は驚くばかりに流麗となつてゐる。

勿論、名ある歌人も多く輩出したが、就中、柿本人麻呂と山部赤人とは歌聖と謳はれ、前者は抒情詩人として長歌に秀で、雄渾莊重な格調をもつて、痛切な情感を歌ひ、後者は敍景詩人として短歌に長じ、平明暢達な歌風をもつて、清爽な自然の趣致を詠じてゐる。また景情融和の妙を得た敍景歌にすぐれた高市黒人、淡々として流麗な歌を作つた大伴旅人、現實に執着して社會の事相を歌つた山上憶良、好んで材を傳説に取つた高橋蟲麻呂、人麻呂や憶良の風を摸して別に一家を成した大伴家持、女流の額田王、大伴坂上郎女等も、それ〴〵傑出した歌人であつた。

吉野の宮に幸しし時、柿本朝臣人麻呂の作れる歌

やすみしし　わが大君　神ながら　神さびせすと　芳野川　たぎつ河内に　高殿を　高しりまして　上り立ち　國見をせせば　たたなはる　青垣山　山祇の　奉る御調と　春べは　花かざし持ち　秋立てば　黄葉かざせり　逝き副ふ　川の神も　大御食に　仕へ奉ると　上つ瀨に　鵜川を立て　下つ瀨に　小網さし渡す　山川も　よりて奉れる　神の御代かも

「逝き副ふ川」は宮殿の前を流れる川の意で、吉野川をいふ。

反歌

山川もよりて奉れる神ながらたぎつ河内に船出するかも

幸于吉野宮之時、柿本朝臣人麻呂作歌

（安見知之　吾大王　神長柄　神佐備世須登　芳野川　多藝津河内爾　高殿乎　高知座而　上立　國見乎爲勢婆　疊有　青垣山　山神乃　奉御調等　春部者　花挿頭持　秋立者　黄葉頭刺理　逝副川之神母　大御食爾　仕奉等　上瀨爾　鵜川乎立　下瀨爾　小網刺渡　山川母　依氐奉流　神乃御代鴨）

「安禮の崎」は遠江國。「漕ぎたむ」は漕ぎめぐるの意。

蟲麻呂の歌は旋頭歌である。「埼玉」は今の埼玉縣埼玉郡。「翼きる」は翼で水を切るの意。

反歌

（山川毛因而奉流神長柄多藝津河内爾船出爲加母）

若の浦に潮滿ちくれば潟をなみ葦邊をさして鶴鳴きわたる

（山部赤人）

いづくにか船泊すらん安禮の崎漕ぎたみ行きし棚なし小舟

（高市黑人）

生ける者遂にも死ぬるものにあればこの世なる間は樂しくをあらな

（大伴旅人）

をのこやも空しかるべき萬代に語りつぐべき名は立てずして

（山上憶良）

埼玉の小埼の沼に鴨ぞ翼きる己が尾に零りおける霜をはらふとに

（高橋蟲麻呂）

あらし

劍刀いよよ研ぐべし古へゆ清けく負ひて來にしその名ぞ

（大伴家持）

額田王の御歌は齊明天皇の七年、新羅征伐に供奉された時、伊豫國にて作られたもの。「さゝらえ壯子」は月の異名。「見らくしよしも」は見るに好もしくあるの意。

最古の漢文學

熟田津に船乘りせんと月待てば潮もかなひぬ今は漕ぎ出でな

（額田王）

山の端のさゝらえ壯子天の原門渡る光見らくしよしも

（大伴坂上郎女）

五　漢文學

應神天皇の朝に百濟から阿直岐と王仁とが相次いで來朝し、皇子菟道稚郎子はこの二人を師として漢文學を學ばれたが、これが實に我が國に漢文學の傳來した最初であつた。その後、欽明天皇の朝になつて更に佛教がもたらされるとこれに伴なつて漢文學も次第に普及するに至つた。しかし當時の我が國民の手に成つた漢文學は悉く佚して、その傳來後數百年を經た推古天皇の朝の金石文や、聖德太子が御肇作になつた憲法十七條など

懷風藻

「懷風藻」は孝謙天皇の天平勝寶三年の撰であるが、撰者は詳かでない。

題は「侍宴」「三才」は天地人をいふ。

が、現存する最古の漢文學である。

降つて大化の改新以後になつては、貴族階級の間に漢詩の流行を來し、天智天皇の御子大友皇子、卽ち後の弘文天皇、天武天皇の御子大津皇子をはじめ、多くの詩人が輩出したが、次いで奈良朝に入ると、我が國に於ける最初の漢詩集「懷風藻」が出た。「懷風藻」には、大友・大津兩皇子の御作はもとより、藤原宇合・石上乙麻呂等多くの詩人の作が收められ、「萬葉集」と同時代のものであるから、「萬葉集」の歌人にしてこの集の詩人である者も少くない。隨つて漢詩に於ける取材の樣式や題詠の風などが、和歌の詠出上に及ぼした影響の深さに就いては、思半ばに過ぎるものがあらう。

皇明日月光り　帝德天地に載つ　三才並びに泰昌　萬國臣義を表す

（皇明光二日月一　帝德載二天地一　三才並泰昌　萬國表二臣義一）大友皇子

時代の範圍と文化の中心

平安京の自然

第二章　平安時代

一　概觀

1454 延歷十三年

桓武天皇の山城遷都以後、源頼朝が鎌倉に幕府を開くまで凡そ四百年間を平安時代といつてゐる。この時代は王朝の盛時で、平安京を中心として新に榮えた文化の花は、極盛の機運に際會し絢爛豪華の美觀を呈したが、その盛運をもたらし、その恩澤に浴したものは、たゞ藤原氏を代表とする貴族階級のみで、一般民衆は殆ど時潮の浸染圈外に置かれてゐた。

1196

青垣山に圍まれてゐるとはいふものの、平野の坦々と遠く開けた大和國に比すれば、平安京の地勢は遙かに變化に富んでゐる。優美な曲線を描く東山三十六峰の背後には、比叡が眉に迫つ

時代の特色と文學の傾向

て聳え立ち、これに對して、北に連なる鞍馬・貴船、西を劃る愛宕・嵐山の翠巒は、その間を縫つて流れる賀茂・高野・大堰の諸川と共に、桓武天皇の御言葉の通り、山河襟帶、自然に城をなしてをり、春の霞、秋の時雨の景趣はいふまでもなく、花にも、月にも、雪にも、それぞれ繪の如き、また詩の如き趣を見せる。

昌平に馴れて、意志と理智とを缺き、感情のみに培うて軟化した當時の貴族は、かくの如き山紫水明の平安京裏に籠居して、ひたすら風月詩歌を友とし、管絃遊宴に耽つて、情趣にあこがれ、純然たる耽美主義者となりおほせた。隨つて威儀正しい公事や、由緒深い行事、乃至佛事・供養等の如きも、舞樂・遊宴の機會に利用され、文學もまた殆ど遊戯化されて、詩合・歌合等が盛んに行はれたが、それは延いて、衣食住をはじめあらゆる生活樣式の洗煉を促し、それ等の上におのづから複雜な制約と高雅な典型とを釀成

略體文字は既に記紀にも見えてゐるが、「萬葉集」にも、これが次第に發達して、片假名（漢字の畫を省いて作つたもの）と平假名（漢字の草體をやはらげて作つたもの）とに分化したのは、平安時代の初期であつたらしい。

したのであつた。また華やかな宮廷生活が、權勢發祥の基點となつてゐた當時にあつては、女子が非常に尊重されたところから、才媛が輩出して、たま〳〵作られた假名を利用し、競うて文筆に從ひ、この時代の名作は多く彼女等の手に成つたので、その勢力は男子に及び、男子の思想も文章も、女子のそれと異なるところがないやうな有樣となつた。かくして平安時代の文學はすべて情趣を本位とし、「もののあはれ」の精神を基調としてゐるのであつて、その自然や人生に對する觀照態度は優美典雅を極め、洗煉に洗煉を重ねられてゐるものである。なほ漢文學も前時代から引續いて流行したが、儒教の勢力はいまだ微弱であつたのに反し、佛教は、新に支那から傳來した天台・眞言の二宗が盛んに行はれ、この現實や國家を超越した教も、包容同化の國民性によつて次第に日本化され、現實的・國家的なものとなつて來た。

詩文集

「文選」は梁の昭明太子が漢魏六朝間の詩文を集めたもの、「白氏文集」は白居易の詩文集、「蒙求」は李瀚が經史中から事實相類するものを採つて編したもの。

二　漢文學

平安時代の初期には、奈良時代に隆盛の機運に向つてゐた漢文學がいよ〳〵極盛期に入り、支那の詩文集「文選」「白氏文集」「蒙求」等が愛讀され、その刺激を受けて、漢詩・漢文に堪能な作者が輩出した。隨つて詩文集も續々と出たが、その代表的なものは、嵯峨天皇の勅を受けて小野岑守が撰進した「凌雲集」、藤原冬嗣等が撰進した「文華秀麗集」、また淳和天皇の勅を受けて良岑安世等が撰進した「經國集」等で、一家の集には僧空海の「性靈集」、菅原道眞の「菅家文草」「菅家後集」等がある。特に「菅家後集」は、道眞が晩年、筑紫の配所にあつて悲痛な境涯を詠じた詩を收め、哀感の切々と人の心を打つものが多い。この外にも小野篁・都良香・大江朝綱等は、當時のすぐれた詩人であつた。なほこの時代の中期以後に出來た詩文集には藤原明衡の撰した「本朝文粹」、紀齊名の撰といはれる「扶桑集」等があり、傑出した詩人には大江匡衡・慶滋保胤等があつた。

題は「自詠」「彼蒼」は青空。

家を離れて三四月　落涙百千行　萬事皆夢の如し　時々彼蒼を仰ぐ

（離家三四月　落涙百千行　萬事皆如夢　時々仰彼蒼）（菅家後集）

「日本書紀」の後を承けて、桓武天皇の延曆十六年には「續日本紀」が官撰されたが、その後、引續いて、「日本後紀」「文德實錄」「三代實錄」等の漢文で書かれた官撰史が出で、かくして文武天皇から光孝天皇に至るまでの國史が、この時代に完備した。これ等を總稱して六國史といつてゐる。

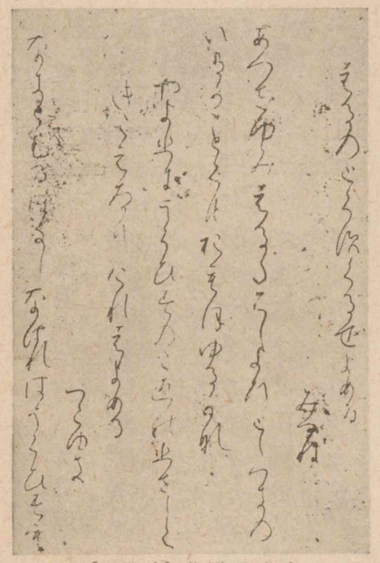
官撰史

三　歌　謠

漢文學の流行に壓せられて、平安時代の初期には和歌は一時

古今和歌集

不振に陷つてゐたが、間もなく反動の機運が熟し、清和天皇の頃から歌壇は再び勢を盛り返し、遂に醍醐天皇の朝に至つて盛運の頂點に達すると共に、「古今集」の勅撰を見た。「古今集」は漢詩の勅撰集に倣ひ、醍醐天皇が紀友則・紀貫之・凡河内躬恒・壬生忠岑の四人に勅して撰せしめられ、延喜五年に成つたもので、「萬葉集」以後當時に至るまでの和歌、並びに「萬葉集」に入つてゐない古歌一千一百餘首が、二十卷のうちに收められてゐる。まさに勅撰和歌集の嚆矢であつて、これより以後長く和歌撰集の模範となり、その歌風も和歌の決定的風體となつたものである。今、これ



古今和歌集（高野切）

七五調と三句切は即ち五七調の一度切れるものを五七調とは三句切になつてゐないものをいふ。但し「萬葉集」の歌にも七五調のもあり、「古今集」の歌にも五七調のものはない。

を「萬葉集」と比較してみると、この集は殆ど短歌のみの撰集であつて、長歌・旋頭歌等は雜體の部に纔かに名殘をとゞめてゐるに過ぎない。また歌の格調も、「萬葉集」のやうな勁健な五七調は既に衰へて、暢達な七五調が多くなり、掛詞や緣語等を盛んに驅使して、「もののあはれ」を基調とする優美巧緻にして纖細微妙な歌風をなしてはゐるものの、あまりに技巧を弄し過ぎて、感興に乏しく、內容が空虛となつたといふやうな弊に陷つてゐるものも少くない。なほ時代思潮と漢文學との影響した結果、その題材には花鳥風月の如き純美なもののみを求めた上、着想はすべて主我的であつたから、型にはまつて、變化に乏しい憾みを生じ、「萬葉集」に見るやうな昂揚した精神などは、些かも感ずることが出來ないのである。

「古今集」に收められた比較的古い時代の歌の作者で有名なの

は、紀貫之がその序に「近き世にその名聞えたる人」として擧げた、いはゆる六歌仙、卽ち僧正遍昭・在原業平・文屋康秀・喜撰法師・小野小町・大友黑主の六人で、就中、業平は奔放自在な情熱を率直に歌つて、當時第一の巨匠の名が高く、これに次ぐ小町と遍昭とは、前者は纖柔な情緒をもつて、後者は輕妙な着想をもつて、いづれもすぐれてゐる。次に撰者の中では、何といつても貫之が第一人者で、この集の風調を代表し、撰集の際も中心になつてこれに當つたものらしく、その歌は最も技巧を極めたもので、聲調の美に於ては及ぶものはないが、あまりに整ひ過ぎて、却つて印象が稀薄になり、隨つて興趣もまた乏しくなつてゐる。これに對し、躬恆は才氣縱橫、卽興歌に秀で、技巧はもとより貫之に及ばないけれども、歌に生彩のある點では貫之を凌ぐものがある。また友則の歌には典雅な風韻があり、忠岑の歌には滴るばかりの情趣が感ぜられる。なほ小町以後の女流歌人の中では伊勢が最もすぐれてゐた。

月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身一つはもとの身にして
（在原業平）

色見えでうつろふものは世の中の人の心の花にぞありける
（小野小町）

里は荒れて人は舊りにし宿なれや庭も籬も秋の野らなる
（僧正遍昭）

川風の涼しくもあるか打寄する浪と共にや秋は立つらん
（紀貫之）

憂きことを思ひ連ねて雁がねの鳴きこそ渡れ秋の夜な〳〵
（凡河內躬恆）

君ならで誰にか見せん梅の花色をも香をも知る人ぞ知る
（紀友則）

白雪の降りて積れる山里は住む人さへや思ひ消ゆらん
（壬生忠岑）

皐月來ば鳴きも舊りなんほとゝぎすまだしきほどの聲を聞かばや
（伊勢）

後撰和歌集と拾遺和歌集

「古今集」「後撰集」「拾遺集」を合はせて三代集といふ。

「古今集」の撰定によつて端緒が開かれてから、和歌の勅撰集が續出するやうになつたが、「古今集」に次いで撰せられたのは「後撰集」で、村上天皇の天暦五年に成り、更にそれに引續き一條天皇の朝に至つては「拾遺集」が撰せられた。しかしその歌風は、二集共に「古今集」の型をそのまゝ踏襲し、いはば「古今集」の延長で、清新の氣は殆どこれを求めることが出來ない。當時の歌壇の代表的の作者には、「後撰集」時代に源順・大中臣能宣・清原元輔等があり、「拾遺集」時代に藤原公任・曾禰好忠・能因法師・和泉式部・赤染衛門等があつたが、特に女流の和泉式部は熱烈奔放な感情を歌に盛りこみ、殉情詩人の面目を躍如たらしめてゐる。但しこれ等の歌人の作は、前代尊重の保守的傾向により、この二集の中にはあまり收められてゐないで、むしろ「後拾遺集」以後の撰集に多く收められてゐるのである。

順・能宣・公任・好忠の歌は「拾遺集」から、能因・和泉式部の歌は「後拾遺集」から採つた。

老いぬれば同じ言こそせられけれ君は千代ませ君は千代ませ
（源順）

曉の寢覺の千鳥誰がためか佐保の川原にをちかへり鳴く
（大中臣能宣）

春來てぞ人も訪ひける山里は花こそ宿のあるじなりけれ
（藤原公任）

招くとて立ちもとまらぬ秋ゆゑにあはれ片寄る花薄かな
（曾禰好忠）

心あらん人に見せばや津の國の難波わたりの春のけしきを
（能因法師）

三代集以後の勅撰和歌集

春霞立つやおそきと山川の岩間をくゞる音聞ゆなり

（和泉式部）

三代集以後、この時代の末期までには、更に「後拾遺集」「金葉集」「詞花集」「千載集」の四勅撰和歌集が出た。そして「後拾遺集」の時代に於て既に幽寂な敍景の歌が多くなり、歌風更新の機運が漸く萌して來てゐたが、「金葉」「詞花」の二集の時代卽ち源經信、その子俊賴等が歌壇に活躍した時代を經て「千載集」の時代に至ると、いよ〳〵更新實現の域に入り、藤原俊成が出て、新舊の和歌の長短を取捨し、內容・形式共に幽玄正雅にして淸新味ある一體を完成した。この俊成の主張した和歌の風體は幽玄體といはれ、これは從來の優美典雅な情趣に、意志の要素をとり入れて、それを沈靜せしめ、燻しをかけたもので、深い情趣と餘情・餘韻とをもつものである。この主張のため、當時の歌の內容は著しく深みを增した。「千載集」

經信の歌は「金葉集」から、俊成の歌は「千載集」から、西行の歌は「山家集」から採つた。

歌合と歌論

時代のすぐれた歌人には、また自然を友として東西に吟行した西行法師があり、その家集である「山家集」には、自然の中に浸りきつたこの天成の詩人の心境が、高雅な氣品を湛へてあらはれてゐる。

夕されば門田の稻葉おとづれて蘆のまろやに秋風ぞ吹く

（源經信）

住みわびて身を隱すべき山里にあまり隈なき夜半の月かな

（藤原俊成）

さびしさは秋見し空にかはりけり枯野を照らす有明の月

（西行法師）

和歌が大いに流行するにつれて、歌合が發達し、歌論が勃興して來たことも、この時代の著しい現象である。歌合はその起原は詳かでないが、夙く文德天皇の頃から行はれたらしく、宇多・醍醐

神樂歌と催馬樂

兩天皇の朝には最も頻繁に行はれた。そしてこの歌合の發達は支那の詩論の刺激と相俟つて、自然に歌論の勃興を促し、これに關する著書も藤原公任の「新撰髓腦」をはじめおびたゞしく出で、歌道の進運に貢獻した。しかしその一面に於ては、和歌の本義を忘れて、徒に枝葉に走り、牽强附會の說をなす如き弊に陷るものも少くなかつた。またそれに附隨して歌道に門閥の生じたことも見遁せないことである。

平安時代には、眼で讀む歌と、口で吟誦する歌とは既に完全に分離してしまつてゐた。そして眼で讀む歌卽ち和歌が文學として發達してゆく一方、口で吟誦する歌卽ち謠物は曲譜を伴なつて別途の發達を遂げた。神樂歌及び催馬樂はその代表的なもので、いづれも奈良朝の頃から行はれてゐたものではあるが、平安時代に入つて始めて現存するものの如き完成した體をなした

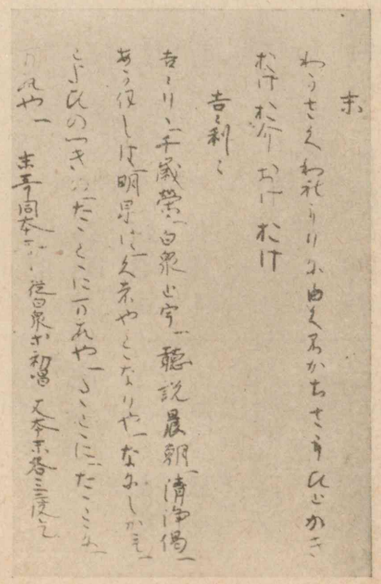
のである。神樂歌はその名が示す如く神前にて奏する謠物であり、催馬樂は古い時代の民謠が上流の謠物となつたもので、その形式は二者共に雜多で、一定してゐないが、前者には眞率莊重にして優雅和暢な趣があり後者には人情味が濃厚にして民衆的・抒情的な分子が多い。

この歌は「拾遺集」にも見えてゐる。

「ヲケ」は拍子詞である。

銀の目拔の太刀をさげはきて奈良の都を練るは誰が子ぞ　（神樂歌）

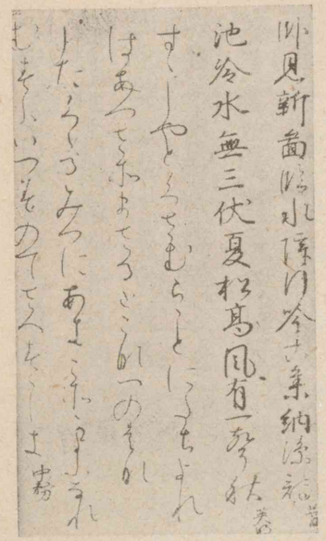
飛鳥井に飛鳥井に宿りはすべしヲケ蔭もよし蔭もよし御水も寒し御秣もよし　（催馬樂）



神樂歌（信義本）

朗詠と今様

更にこの時代の中期頃から流行し始めた謠物は朗詠と今様とである。朗詠は漢詩文の佳句、或は古來の名歌に曲節を附して朗吟したもので、それを集めた書に、藤原公任の撰した「和漢朗詠集」と、藤原基俊の撰した「新撰朗詠集」とがある。また今様は當世風の謠物の義で、大體、七五の四句から成つてゐるが、長短さまざまの句を交へた長篇もあり、形式は必ずしも一定してゐない。そしてその内容は和讃といふ佛徳を讃する謠物の系統を引いて、佛教に關することを歌つたものが多いけれども、當時の民衆の生活をまざまざと傳へた民謠風のものも相當の數に上つてをり、その自由な表現樣式が、和歌



和漢朗詠集（傳藤原行成筆）

などには見られない生き〳〵とした感じを與へる。今樣を集めたものには、後白河法皇の御撰にかゝる「梁塵祕抄」がある。

燭を背けて共に憐む深夜の月　花を踏んで同じく惜しむ少年の春
（背燭共憐深夜月　踏花同惜少年春）　（白居易―和漢朗詠集）

佛は常にいませども　現ならぬぞあはれなる　人の音せぬ曉に
ほのかに夢に見え給ふ　（梁塵祕抄）

誘給べ隣殿　大津の西の浦へ雜魚すきに　この江に海老なしあの
江へいませ　海老まじりの雜魚やあると　（同　上）

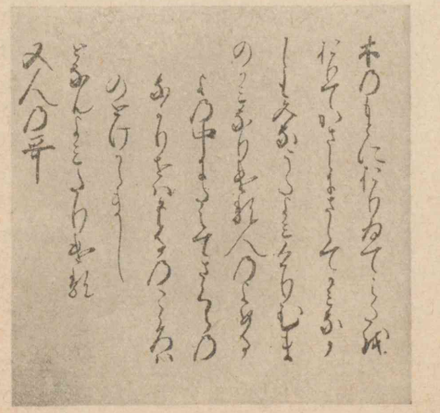
四　物語と日記・隨筆

簡便な假名の使用が弘まつて來るにつれて漢文學は漸く衰運に向ひ、これに代つて國文で綴つた物語・日記・隨筆等が流行し始め、かくして散文が文學の中樞を形づくる時代を現出するに

伊勢物語と大和物語

至つた。そのうち、まづ物語を見るに初期に於ける物語には二つの系統があつて、一は和歌の流行に育まれて生れた歌物語であり、他は支那の神仙思想などを基礎として綴られた傳奇物語である。

現存する歌物語のうち最も古く且代表的なものは「伊勢物語」で、在原業平の歌を中心とする百二十餘の短篇を集めてある。その作者は不明であるが、殆ど各篇が「昔男ありけり。」といふ語をもつて書き起され、業平らしい風流貴公子の逸話が、簡古にして餘情に富む筆致で寫されてゐる。またこの物語の流を汲んで、和歌に關する古今の説話を集めたものに「大和物語」がある。



伊勢物語（守屋本）

「大和物語」の作者も不明である。

「さらぬ別れ」は逃れ難い別れ、即ち死別をいふ。

「人の子」は親をもつ子、即ち自分をいふ。

竹取物語と宇津保・落窪の各物語

昔、男ありけり。身は賤しながら、母なん宮なりける。その母、長岡といふ所に住み給ひけり。子は京に宮仕へしければ、まうづとしけれど、しばしばえまうでず。ひとつ子にさへありければ、いとかなしうし給ひけり。さるに師走ばかりに、とみの事とて御文あり。驚きて見れば歌あり。

老いぬればさらぬ別れのありといへばいよ〳〵見まくほしき君かな

かの子、いたううち泣きてよめる

世の中にさらぬ別れのなくもがな千代もと祈る人の子のため

（伊勢物語）

傳奇物語の最古のものは「竹取物語」であつて、「伊勢物語」と共にこの時代の物語の先驅をなしてゐる。これまた作者は知ることが出來ないが、「伊勢物語」が短篇を集めたものであるのに對し、首尾一貫した長篇になつてをり、外來の神仙思想の影響を受けて

「宇津保物語」「落窪物語」の作者も不明である。

「まじりて」は分け入つて。

「本」は幹をいふ。

ゐる點が多い。その主人公は、竹取の翁が竹の中から見出した姫、實は月界の仙女で、この仙女が或年の八月十五日、滿月の夜に遂に昇天するまでの經緯を、當時の人情・風俗を織りまぜて興趣深く脚色してある。文章は素朴な上に優雅な趣もあり、情景・心理の描寫にも、見るべきところが少くない。なほこの物語の系統を引くものに「宇津保物語」「落窪物語」があるが、「竹取」よりは後に出たものだけに、いづれも「竹取」に比して一層世態・人情に觸れた點が多く、内容の複雑味、描寫の精細味も一段と加はつてゐる。

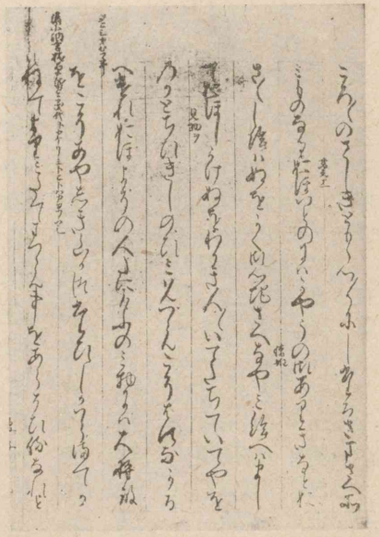
今は昔、竹取の翁といふ者ありけり。野山にまじりて、竹を取りつゝ、萬づの事につかひけり。名をば讃岐造麻呂となんいひける。その竹の中に、本光る竹なん一筋ありけり。あやしがりて寄りて見るに、筒の中光りたり。それを見れば、三寸ばかりなる人、いと美しうてゐたり。

（竹取物語）

源氏物語

紫式部は一條天皇の中宮彰子に仕へた。

「竹取」「伊勢」に始まつた平安時代の物語は、「宇津保」「落窪」等を經て「源氏物語」に至つて、その發達の極點に達した。歌物語と傳奇物語との二つの系統が、ここに渾然と融合されたといつてもよいであらう。實に「源氏物語」は、ただにこの時代の文學の王座を占めるばかりでなく、古今を通じて國文學の最大傑作として世に推重され、その名は遠く海外にまで響いてゐるのである。作者は藤原爲時の女紫式部で、五十四帖といふ厖大な長篇をなし、前篇は光源氏を、後篇は光源氏の子薫大將を主人公として、爛熟した平安盛世の貴族生活の諸相を、優雅な自然の趣致と取合は



源氏物語（池田本）

せて優婉に描寫し、それを美化し醇化して、その中におのづから作者の人生觀・社會觀乃至時代的理想を寓してゐる。また結構に於ても照應の妙を極め、事相が複雜してゐるにもかゝはらず、整然として一絲亂れるところなく、局面のさま〳〵に展開してゆくにつれ、筆力は思ふまゝに伸びて、その間少しも斧鑿の痕を殘してゐないことは、まさに驚異に値するものがある。

木高き紅葉の蔭に四十人の垣代、いひ知らず吹きたてたる物の音どもにあひたる松風、まことの深山おろしと聞えて吹き迷ひ、いろ〳〵に散りかふ木の葉の中より青海波の輝き出でたるさまいと恐しきまで見ゆ。挿頭の紅葉いたう散り過ぎて、顏のにほひにけおされたるこゝちすれば、御前なる菊を折りて、左大將挿しかへ給ふ。日暮れかゝるほどに、けしきばかりうちしぐれて、空の氣色さへ見知り顏なるに、さるいみじき姿に菊のいろ〳〵うつろひえならぬを挿頭して、今日

紅葉賀の當日、帝が朱雀院に行幸遊ばされた時の模樣を寫した條である。

「垣代」は樂人。

「青海波」は唐樂の一。ことでは光源氏が舞つてゐるのである。

「見知り顏」は風流をよく辨へてゐる樣子。

はまたなき手を盡したる入綾のほど、そゞろ寒くこの世のこととも覺えず。もの見知るまじき下人などの、木の下岩隱れ、山の木の葉に埋もれたるさへ、少しものの心知るは、涙落しけり。（源氏物語紅葉賀の卷）

「源氏物語」を極點として、物語は衰退の機運に向つた。「源氏」以後に出た「狹衣物語」「濱松中納言物語」「とりかへばや物語」「堤中納言物語」等の諸物語は、いづれも「源氏」の模倣に終つてそれ以上に殆ど一歩も出てゐない。

物語と並行し、これと互に相影響しあつて發達した國文の日記・隨筆の中にも、またすぐれたものが多い。假名で書かれた國文の日記は「土佐日記」に始まる。「土佐日記」は、紀貫之が朱雀天皇の承平四年、土佐守の任滿ちて、同年十二月二十一日、國守の館を立ち、翌年二月十六日、歸洛するまでの日々の舟旅の模樣、及び久々で都の土を踏み、家に歸り着いた時の感懷等を記した旅日記で冒

「入綾」は引込際にまた引返して舞ふ舞である。

「そゞろ寒く」は寒けのするほどに感深くの意。

源氏以後の物語

「狹衣物語」は紫式部の女大貳三位の作といはれるが、その他の物語は皆作者不明。

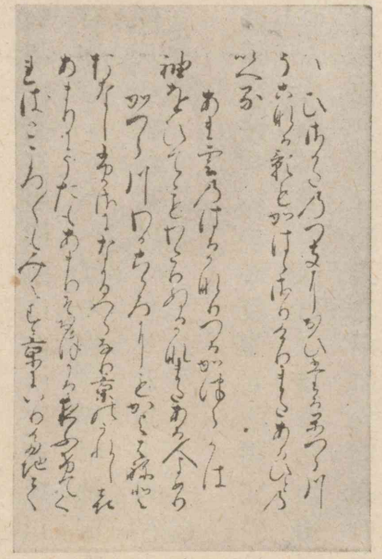
土佐日記

日記の中には、紀行文の如き體裁のものもあり、また感想記・見聞記乃至自敘傳の如きものもあつて、內容的には隨筆と區別の出來ないものが多い。

頭に「男もすといふ日記といふものを、女もして試みんとてするなり。」とあるのでわかる通り、當時、男子はいまだ漢文のみで記し、假名を卑しんで、これを用ひることがなかつたから、故意に女子の作であるかの如く書きなしてある。文章は簡潔平明で、輕妙洒脱な味はひを多く含んでゐる。

二月一日。朝の間雨降る。午時ばかりにやみぬれば、和泉の灘といふ所より出でて漕ぎ行く。海の上昨日の如くに風浪見えず。黒崎の松原を經て行く。所の名は黒く、松の色は青く、磯の浪は雪の如くに、貝の色は蘇芳に、五色に今一色ぞ足らぬ。この間に今日は箱の浦といふ所より綱

「蘇芳」は黒みがかつた紅色。



土佐日記（三條西本）

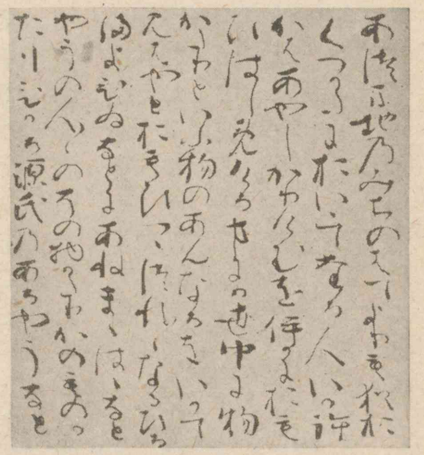
手引きて行く。かく行く間に、或人の詠める歌、

玉櫛笥箱の浦浪立たぬ日は海を鏡と誰か見ざらん

（土佐日記）

「土佐日記」が出て後、日記文學は文學の一分野を占め、幾多の後繼作品を出したが、「土佐日記」に次いであらはれたのは、右大將道綱の母の筆に成る「蜻蛉日記」で、その夫藤原兼家との家庭生活を主として記してゐる。その後、藤原氏全盛時代に入つては「和泉式部日記」「紫式部日記」等があらはれ、次いで「更級日記」「讃岐典侍日記」等、すぐれた女流の日記が續々とあらはれた。これ等はそれ〴〵異なつた興趣に滿ちて

土佐日記以後の日記



更級日記（藤原定家筆）

枕草子

清少納言は一條天皇の皇后定子に仕へた。

ゐるが、「和泉式部日記」には陶醉的な感情生活が描き出されて、眞情が流露してをり、「紫式部日記」には宮廷生活が側面から寫し出されて、隨所に作者の見識がひらめいてゐる。また「更級日記」は菅原孝標の女の作で、父が上總介の任はてて歸洛する時、伴なはれて東路の旅に上つた時の心情から筆を起し、都に上つて後、幻滅の悲哀を嘗める有樣がつゝましく記され、「讃岐典侍日記」は藤原顯綱の女の作で、堀河天皇・鳥羽天皇の二朝に仕へた頃のことが綿密に敍されてゐる。

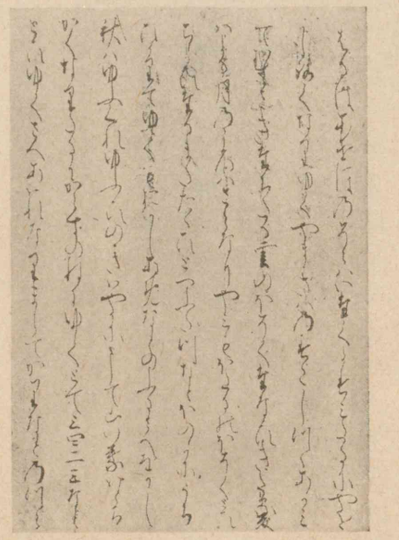
「源氏物語」と並んで、平安時代文學の雙璧といはれるものは隨筆「枕草子」である。作者は清原元輔の女清少納言で、宮廷に奉仕中の事實の追憶、折にふれての見聞・感想、また自然の景致などを三百段ばかりに分つて敍述しその觀察は鋭敏にして着眼は警拔を極め、機智は到るところにひらめき、諷刺は人の肺腑を刺すものがある。更に文章に至つては少しも法格に拘泥せず、長短の語句を巧に錯綜せしめ、或は極端な省筆法を用ひてゐるなど、勝氣にして才氣に滿ちた作者の人物をよく反映してゐる。

七月七日は七夕、九月九日は重陽である。

「うつしの香」は菊の着綿にうつつた菊の香。

正月一日・三月三日は、いとうらゝかなる。五月五日は、曇りくらしたる。七月七日は、曇り、夕つ方は晴れたる空に、月いとあかく、星のすがた見えたる。九月九日は、曉方より雨すこし降りて、菊の露もこちたくそぼち、おほひたる綿などもいたく濡れ、うつしの香ももてはやされたる。つとめてはやみにたれど、なほ曇りて、やゝもすればふり落ちぬべく見えたるもをかし。

（枕草子）

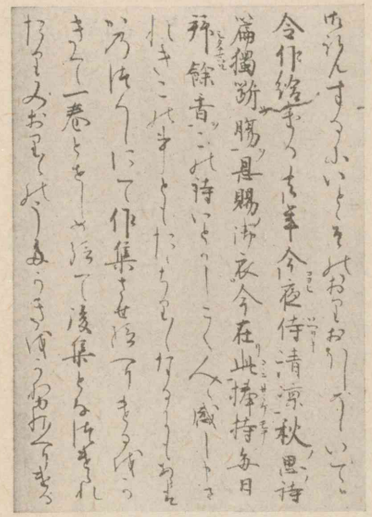


枕草子（前田本）

榮華物語と大鏡・今鏡

五　歴史物語と説話文學

豪華な藤原氏の全盛時代が去ると、爛漫たる藝術の花もおのづから凋落した。そしてこの落莫たる文學界に發生したのは、華やかな前代を回想する文學、即ち歴史物語で、「榮華物語」「大鏡」「今鏡」等がそれであつた。榮華物語」は「この世をば我が世とぞ思ふ」と歌つた藤原道長の榮華の一生を中心として、編年體に記述したもので、四十帖から成り、作者は從來、赤染衛門といはれて來たが、直ちに斷定することは出來ない。「榮華物語」が編年體をとつてゐるのに對



大鏡（千葉本）

して「大鏡」は紀傳體をとり、文德天皇から後一條天皇に至るまでの帝紀、冬嗣から道長に至るまでの列傳を分ち記し、百歳を遙かに越えた老翁等の昔話といふ形式になつてゐる。その文章は剛健で、巧に事實の核心を捉へ、終始文勢に弛緩がない上に、批判的態度の可なり辛辣なものがある。作者はやはり不明であるが六國史の後を承けた假名文の國史として、まさに白眉と稱すべきものであらう。また「今鏡」は「大鏡」に次ぐ歴史物語で、形式・内容共に「大鏡」の模倣であり後一條天皇の朝から高倉天皇の朝までの事蹟を記してゐる。

「今鏡」の作者も不明である。

道長の法成寺造營の條である。

かゝる御勢に添へて、入道せさせ給ひて後は、いとど勝らせ給へりと見えさせ給ふにも、なほなべてならざりける御有樣かなと、近う見奉る人は尊み、遠う見奉る人は遙かに拜みまゐらす。今はこの御堂のあたりの木草ともならんと思へる人のみ多かり。そなたざまに赴けば

海の浪もやはらかに立ちて、この御堂の物を持て運ばせ、河も水澄みて、快く浮べ持て參ると見ゆ。なほなべてこの世のこととは見えさせ給はず。

（榮華物語疑の卷）

かゝれば、この御世の樂しきこと限りなし。その故は、昔は殿ばら・宮ばらの馬飼・牛飼、何の御靈會・祭の料とて、錢・紙・米など乞ひのゝしりて、野山の草をだにやは刈らせし。仕丁御物もち出できて、人の物とり奪ふことの絶えにけり。また里の刀禰、村の行事出できて、火祭や何やと、わづらはしくせめしこと、今は聞えず。かばかり安穩泰平なる時にはあひなんやと思ふは、翁らが賤しき宿りも帶紐をとき、門をだにさゝで、安らかにのび臥したれば、年も若え、命も延びたるぞかし。

（大鏡太政大臣道長）

「御靈會」は謀反人の怨靈を祀つた御靈宮の祭。「祭」は諸社の祭の意。「里の刀禰、村の行事」は里や村の長をいふ。「火祭」は鎭火祭。

今昔物語

歷史物語が發生したのと同じ風潮の影響を受けて流行し始めたものに、なほ「今昔物語」の如き說話文學がある。これはこの時代の初期嵯峨天皇の弘仁年間に大和の藥師寺の僧景戒が奈良朝の佛教說話を集めて漢文で記した「日本靈異記」の系統を引くもので、この時代の末から鎌倉時代にかけて大いに行はれた。「今昔物語」はもと三十一卷から成る我が國最大の說話集であるが、そのうち三卷が缺け、現存してゐる卷數は二十八である。實に一千に餘る說話が、天竺・震旦・本朝の三部に分つて類輯されてをり、各說話はすべて「今は昔」といふ語によつて始められてゐる。そして「日本靈異記」の流を汲んでゐるだけに、やはり佛教說話が大部分を占めてゐるが、本朝世俗の說話中には、當時の庶民生活が簡勁素朴な和漢混淆の新體によつて、まのあたり見るやうに寫し出され、

「日本靈異記」は詳しくは「日本國現報善惡靈異記」といふ。

釋迦如來人身宿給語第一

今昔釋迦如來未ノ佛ニ不成給サリケル時、釋迦菩薩ト申テ、兜率天ノ内院ト云所ニ住給ケル而ニ、閻浮提ニ下生シナム思シ召シ時ニ、五衰ノ現シ給フ。其五衰ト云ハ、一ニハ天人ノ眼瞬ノ事无シ、眼瞬ロノ二ニハ天人ノ頭ノ上ノ花萎ム事无シ、三ニハ天人ノ衣ニ塵居ル事无シ、塵居ル受ツ四ニハ天人ノ汗アル事无シ、脇下ヨリ汗出ヌ。五ニハ天人ハ我カ本ノ座ヲ不替サル、本座ヲ咩來テ、當ル所ニ居ル。其ノ時諸ノ天人菩薩此相ノ現シ給フヲ見悔

今昔物語（東京帝國大學舊藏本）

平安時代末期の思想・人情・風俗等を知る上に絶好の資料を提供してゐる。編者は宇治大納言源隆國といはれてゐるけれども、疑はしい。

今ハ昔、比叡ノ山ノ東塔ニ大鐘アリケリ。高サ八尺マハリナリ。然ル間、永祚元年己丑八月ノ十三日、大風吹キテ、所々ノ堂舍・寶塔・門々・戸々ヲ吹キ倒シケルニ、コノ大鐘ヲ吹キマロバシテ、南ノ谷ニ吹キ落シテケリ。最初ノ房ノ棟・板敷ヲウチ切リテ、谷ザマニマロビテ、次々ノ房ドモ同ジクウチ拔キツヽ、七ツノ房ヲウチ倒シテ、南ノ谷底ニ落チ入リニケリ。夜半バカリノコトナレバ、コノ房ドモニ人皆寢入リタルホドナリ。ソレニ人一人損ゼザリケリ。ソノ頃ノ希有ノコトニナンイヒノヽシリケリ。山ノ三寶ノ加護ニアラズバ、ソノ房々ノ人生クベキニアラズトイヒテゾ、貴ビ禮(キヤ)ビケルトナン語リ傳ヘタルトヤ。

（今昔物語卷十九）

第三章　鎌倉室町時代

一　概　觀

時代の範圍と特色

源頼朝が鎌倉に幕府を開いてから吉野朝時代・室町幕府時代を經て安土・桃山時代に至るまで前後約四百年間を鎌倉室町時代とする。この時代は武士が擡頭して政權を握つた時代で、貴族政治の積弊は一掃され、武士道を基調とする簡易質實にして尚武的な氣風が養成された。しかしこの時代の後期に入つては戰亂相次ぎ、後醍醐天皇の建武中興の御偉業は、一たび成つたけれども、それも束の間でやがて政權は足利氏の手に歸した。かくして義滿・義政等の榮華の世となり、暫く平穩無事な日が續くと思ふうち、應仁の大亂が起り、かくしてこれより安土桃山時代に至

文學の傾向

るまで、天下は全く戰亂の中に沒したのである。

かゝる時代にあつて、文學界を維持して新文學を樹立したのは、僧侶をはじめ中堅階級の人々であつた。故にこの時代の新興文學には概ね國民的・宗教的色彩が濃厚で、平安時代の文學に見るやうな情趣本位の遊戯的分子は殆どなく、切實な男性的集團意識、傳統擁護の精神、綜合折衷の趨向、欣求淨土の思想等が著しく、創作態度の上にも衒學的・談理的・教訓的の傾向が目立つて來た。かくの如き内容の變化につれて、その文體も文學史上一期を劃し、平安時代の後期から發達した剛健莊重な和漢混淆體が完成されたまた宋から新に禪宗が傳へられたのみならず、淨土宗・淨土眞宗・法華宗等の新宗派も競ひ起り、たま〳〵戰亂に煩はされた人心の根柢に觸れて、その人生觀を非常に深刻ならしめたのである。特に禪宗の教義は武士道精神と合致するところが多いので、武士の間に禪宗が盛んに行はれ、清寂簡素にして風韻に富む禪味は、單純・素朴な國民性と結びつき、靜寂枯淡な寂味・澁味・雅味の風趣を宿す「幽玄」といふ精神を釀成し、この時代のあらゆる藝術の上に非常な影響を及ぼした。かくして鎌倉室町時代は新舊兩文化の交替期といふべく、江戸時代の文化はここにその源を發したのであるが、また從來知識階級に獨占されてゐた藝術が、次第に民衆に接近してゆく傾向もこの時代から生じて來た。なほ儒教の勢力も次第に向上し、更に安土桃山時代にはヨーロッパから吉利支丹宗門が傳へられるなど、思想界は漸く活氣を呈して來たのであつた。

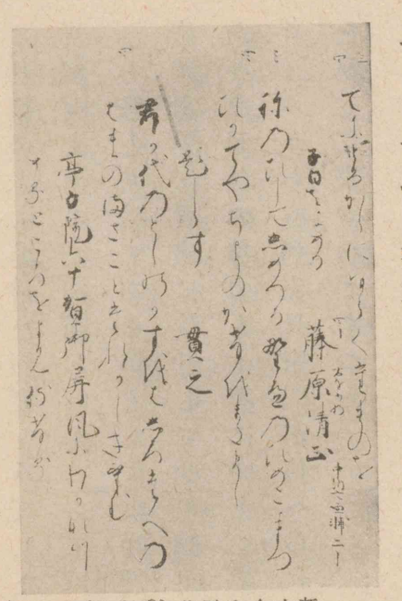
新古今和歌集

二　歌　謠

「千載集」の歌風を大成したものは「新古今集」である。「新古今集」は

「古今集」「後撰集」「拾遺集」「後拾遺集」「金葉集」「詞花集」「千載集」「新古今集」を總稱して八代集といふ。

後鳥羽上皇が源通具・藤原有家・同定家・同家隆・同雅經の五人をして撰せしめられ元久二年に成つたもので、その表現が「千載集」に比して一段と洗煉されたのみならず、内容もまた大いに充實した。即ち或は警拔な倒置法を用ひて清新味をもたらし、或は結句を體言止にして聲調を流麗にするなど修辭上の技巧の限りがなされてゐると共に、内容は佛教思想の影響を受けて深邃な想念に富み、情景融合の妙趣を具へたものが多いのである。作者では、撰者の定家と家隆とが擢んでてゐたが、特に定家はこの時代の歌人中第一人者の名が高く、俊成の



新古今和歌集（烏丸本）

定家は俊成の子。その唱へた和歌の體を有心體といふ。

式子内親王は後白河天皇の皇女であらせられる。

唱へた幽玄體を更に一歩進めて、情趣に徹した歌を詠み、彫琢の妙を極めてゐる。家隆はこれに對し、自然な姿を率直に歌つて、淡淡たる味はひを出してゐるが、なほこの二人の外にも敍景歌にすぐれた藤原良經、閑寂な趣を好んで詠んだ寂蓮法師、女流の式子内親王・宮内卿・俊成の女等は代表的な歌人であつたそしてこれ等の歌人の上に立たせられた後鳥羽上皇もまたすぐれた御歌才であらせられた。

見わたせば山もと霞む水無瀬川夕べは秋となに思ひけん
（後鳥羽上皇）

霜まよふ空にしをれし雁がねの歸るつばさに春雨ぞ降る
（藤原定家）

谷川のうち出づる波も聲たてつ鶯さそへ春の山風
（藤原家隆）

見るまゝに冬は來にけり鴨のゐる入江の汀うすごほりつゝ

（式子内親王）

宮廷歌人が專ら古今調の歌を作つてゐる時、獨り鎌倉にあつて萬葉調の歌を詠み、異彩を放つたのは三代將軍源實朝である。その家集である「金槐集」に收められた歌には、眞率な感情が雄渾な格調によつて詠ひ出されてをり、高古の趣を具へてゐる。

時により過ぐれば民のなげきなり八大龍王雨やめ給へ

（源實朝）

金槐集

「新古今集」以後引續いて次々に出た勅撰和歌集の數は十三代に達し、これに「古今」から「新古今」までの八代集を合はせると二十一代となるが、後花園天皇の勅によつて成つた、その二十一代目の「新續古今集」を最後として勅撰和歌集は絶えた。しかし和歌の發達は「新古今集」時代をもつて一段落を告げた形で、歌壇は定家

その後の勅撰和歌集と新葉和歌集

の子孫が分れた二條・京極・冷泉三家の門閥の爭に終始し、吉野朝時代に和歌の四天王と呼ばれた頓阿・兼好・淨辨・慶雲の歌の如きも、決して舊套を脱したものではなく、清新味は見られない。たゞ後醍醐天皇の皇子宗良親王の御撰にかゝる「新葉集」は、吉野朝の君臣が艱難の中に身を置いて、世を慨き、國を憂へる信念を發揚した歌を收めたもので、眞情の人に迫るものがある。

都だにさびしかりしを雲はれぬ吉野の奥のさみだれの頃

（後醍醐天皇）

君のため世のため何か惜しからん捨ててかひある命なりせば

（宗良親王）

「新古今集」以後の勅撰和歌集は「新勅撰」「續後撰」「續古今」「續拾遺」「新後撰」「玉葉」「續千載」「續後拾遺」「風雅」「新千載」「新拾遺」「新後拾遺」「新續古今」の十三和歌集である。

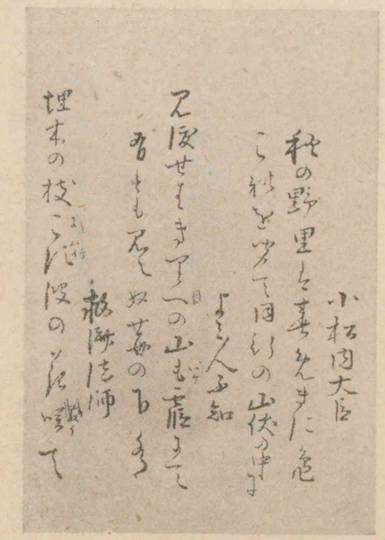
鎌倉時代には「夫木抄」（藤原長清撰）の如き私撰集も出た。

連歌

和歌が種々の形式上の束縛を受けて沈滯しきつてゐる時、清新な内容をもつて起り、大いにもてはやされたものは連歌である。連歌は三十一文字の和歌を上下に分けて二人で唱和するも

「菟玖波集」は正平十一年の撰、「新撰菟玖波集」は明應四年の撰である。

ので、夙く大和時代から行はれてゐたが鎌倉時代に入ると五十韻・百韻と續けるやうになり、室町時代に入つては二條良基の如き名手が出て、その師である救濟と共に「菟玖波集」を撰し、また連歌の新しい法式を定め、次いで宗祇があらはれて「新撰菟玖波集」を撰するに及び連歌は和歌から獨立した立派な一つの文學として大成した。一體、王朝時代の連歌は一時の文學的遊戯に過ぎず、專ら機智諧謔を旨としてゐたもので、嚴密な意味ではいまだ文學とはいへなかつたものであるがここに至つて連歌は却つて和歌を壓倒し、歌壇の中心勢力となつたのであつた。



菟玖波集（學習院本）

「雪ながら云云」は後鳥羽天皇の御製を基としたもの。肖柏・宗長は共に宗祇の高足である。

この新興の連歌のもつ興趣は、各句が獨立した詩想をあらはすと同時に、前後二句との間に情景上の微妙な關聯を保ち、更に全體的にも變化の妙を極めてゐるところにあるといふべきであらう。

雪ながら山もとかすむ夕べかな　宗祇
行く水遠く梅にほふ里　肖柏
河風に一むら柳春見えて　宗長
舟さす音もしるきあけがた　宗祇
月やなほ霧わたる夜に殘るらん　肖柏
霜おく野原秋は暮れけり　宗長
鳴く蟲の心ともなく草枯れて　宗祇
垣根をとへばあらはなる道　柏

（下略）（水無瀬三吟百韻）

宗祇等によつて革新された連歌は、かくの如く盛んであつた

けれども、その法式が次第に煩瑣を加へて來るにつれて詩想も漸く類型的となつては、自然、衰退に向ふより外はなかつた。そしてかゝる機運に乘じて、機智・滑稽を旨とする古風の連歌の復活を企てたのは山崎宗鑑と荒木田守武とであつた。この二人は室町時代の末期に出で、法式によつて束縛された連歌を解放し、これに飄逸洒落な想を盛つて卑俗と見えて脫俗した一種の風格を帶ばしめた。これを俳諧連歌といふ。俳諧とは滑稽の義に外ならない。その集には、宗鑑の撰した「犬筑波集」がありまた守武の獨吟を千句連ねた「獨吟千句」がある。

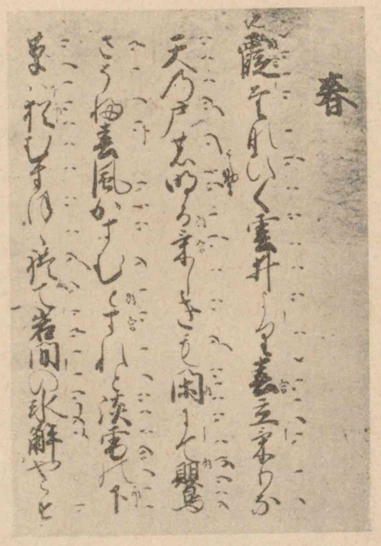
とび梅やかろ〳〵しくも神の春
われも〳〵のからすうぐひす
のどかなる風ふくろふに山見えて
目もとすさまじ月のこるかげ

（獨吟千句）

宴曲

題は「春」

鎌倉時代の中葉から室町時代にかけて流行した謠物に宴曲がある。宴曲は宴席の間に謠はれたもので、主として七五調をなし、題材は自然・人事の百般にわたつてゐるが、故事・成語を補綴し、表面的の修飾にのみ走つて、內容は殆ど空疎でありたゞ前代の朗詠や今樣から室町以後の謠曲や小歌に移つてゆく過渡期の謠物として注意されるに過ぎない。



宴曲集（西本願寺本）

霞たなびく雲居より　春立ちけりな天の戸の　明くる氣色ものどかにて　鶯さそふ春の風　かすむとすれど淡雪の　下草はなほ結ぼほれて　岩間の氷解けやらず（下略）

（宴曲集）

小歌

狂言の中の小歌を狂言小歌といふ。

「木幡」も「伏見」も京都の南方に當つてゐた。

保元物語・平治物語・平家物語（源平盛衰記）

室町時代の謠物には小歌があつた。小歌は句法・長短は一様でないが、すべて小詩形をなし、當時の民衆の心持が輕妙な調子で歌ひ出されてゐて、江戸時代の俗謠の趣と共通するところが多い。その集には「閑吟集」があるが、なほ同時代に成つた狂言の中にも散見してゐる。

木幡山路に行き暮れて　月を伏見の草枕　（閑吟集）

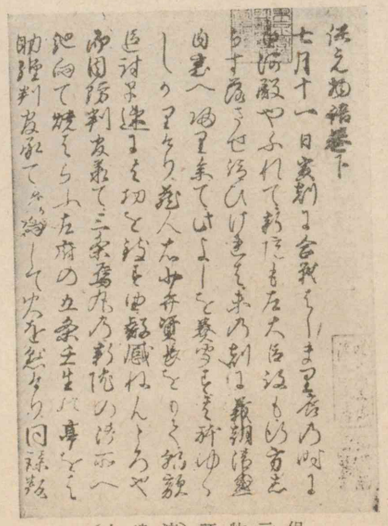
また湊へ舟が入るやらう　唐艫の音がころりからりと　（同上）

三　戰記物語

平安時代の末に保元・平治の兩亂が起つてから、引續いて源平の合戰があつたが、これ等の戰亂を主題として描いた文學に「保元物語」「平治物語」「平家物語」「源平盛衰記」等の戰記物語がある。しかし戰亂を主題としてゐるとはいつても、その中に高雅な風流譚

「平家物語」は盲法師が琵琶に合はせて語つたが、これを平家琵琶または平曲といふ。

や和漢の傳說・故事なども取合はされてをり、史實に空想を加へ、聲調のよく調うた和漢混淆體をもつて、盛衰興亡する人生の相を戲曲的に活寫してゐるのであつて、一般に文學の衰退した鎌倉時代に、獨り燦爛たる光彩を放つた。隨つて國民の間に廣く愛讀され、或は琵琶に合はせて語られなどした結果、物語の組織・內容がさま〳〵に增補改竄され、おびたゞしい異本を派出するに至つたが、その作者はいづれも明らかでない。そのうち「保元物語」と「平治物語」とは共に三卷から成り、それ〴〵保元の亂・平治の亂を題材とした姉妹篇で、結構も筆致もよく似てをり、比較的質實簡素に



保元物語（渡邊本）

して古雅な趣を具へてゐるが、「平家物語」は普通十二巻から成り、源平両氏の榮枯を題材として、極めて華やかであると同時に哀韻にも富み、波瀾曲折も多く、行文もまた流麗を極めて、一大敍事詩をなしてゐる。なほ「源平盛衰記」四十八巻は「平家物語」を増補した一種の異本と見るべきもので、「平家物語」に比すれば詩味に乏しく、やゝ冗漫の嫌がある。

昨日は東關の麓に轡を並べて十萬餘騎、今日は西海の波の上に纜を解いて七千餘人、雲海沈々として、青天既に暮れなんとす。孤島に夕霧隔てて、月海上に泛べり。極浦の波を分け、潮に引かれて行く船は、半天の雲に溯る。日數經れば、都は山川ほどを隔てて、雲居のよそにぞなりにける。はるばるきぬと思へども、たゞ盡きせぬものは涙なり。波の上に白き鳥のむれゐるを見給ひては、あれならん、在原の某の隅田川にてことひけん、名もむつまじき都鳥かなとあはれなり。壽永二年七月二十五日に平家都を落ちはてぬ。

（平家物語巻七）

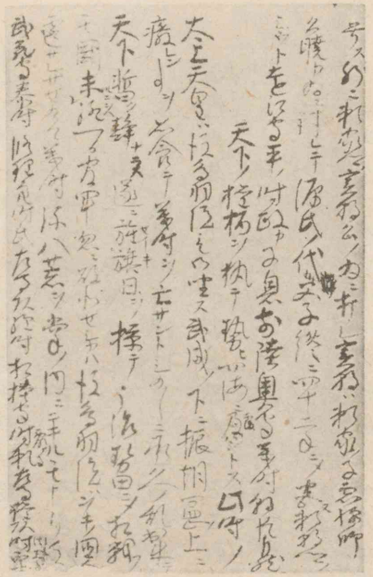
「東關の麓に云々」は富士川の戦を指すのであらう。

「在原の某」は在原業平。その隅田川にて詠んだ歌は「名にしおはばいざこと問はん都鳥わが思ふ人はありやなしやと」これは流布本平家物語である。

高野本平家物語

一トシテ莫催衰不傷意昨日東山ノ南麓ニ並轡ヲ
今日西海ノ浪ノ上ニ解纜雲海沈々トシテ晴天將暗
鳴霧隔テ月浮リ海上ニ分極浦浪引塩行船半
天雲ニサカノボル修理大夫經盛ノ嫡子皇后宮亮經
正行幸ニ供奉スト云フ注ニカウソノ給ニケル
御幸ニ成ル来ル都ヲ思ヒ上ル猶ナガラ又浪ノ上アリ
平家ハ日數フレハ都ヲハ山河ノ程ニ隔テ雲居ノヨソニソ
成ニケル遥ニ来スト思ヒシ只尽セヌ物ハ涙ナリ浪ノ上ニ白キ

室町時代に作られた戰記物語としては「太平記」を擧げることが出來る。作者は小島法師といはれる。吉野朝時代に起つた大動亂の始末を巨細に記して、四十卷といふ厖然たる大卷をなし、文章は遒勁華麗で、人の胸を打ち、熱涙を絞らせるやうな迫力に富み、終始緊張してゐる。そして全卷を一貫する精神は皇室尊崇の精神であつて、勤皇の大義を奬め、幾多の勤皇の士の忠烈な行動を敍して、これに讃頌の辭を捧げてゐる。隨つて倫理的の道念は「太平記」の中に漲り、この點に於て、この書は他の戰記物語には見られない大きな特色を具へてゐるの



太平記（神田本）

「將軍」は足利尊氏。

「養由」は支那周代の弓術家。「紀信」は漢の高祖の臣で、高祖の身代りとなつて戰死した。

である。

正成これを最後の合戰と思ひければ、嫡子正行が今年十一歳にて供したりけるを思ふやうありとて櫻井の宿より河内へ返し遣はすとて、庭訓を殘しけるは、「獅子、子を產んで三日を經る時、數千丈の石壁よりこれを擲ぐ。その子、獅子の機分あれば、教へざるに中よりはね返りて、死することを得ずといへり。況んや汝已に十歳に餘りぬ。一言耳にとゞまらば、我が教誡に違ふことなかれ。今度の合戰、天下の安否と思ふ間、今生にて汝が顏を見んこと、これを限りと思ふなり。正成已に討死すと聞きなば、天下は必ず將軍の代になりぬと心得べし。然りと雖も、一旦の身命を助からんために、多年の忠烈を失ひて、降人に出づることあるべからず。一族・若黨の一人も死に殘つてあらんほどは、金剛山のほとりに引籠つて、敵寄せ來らば、命を養由が矢さきにかけて、義を紀信が忠に比すべし。これぞ汝が第一の孝行ならんずる。」と泣く泣く申し含めて、各東西へ別れにけり。

（太平記卷十六）

義經記と曾我物語

水鏡と增鏡

純粹の戰記物語ではないが、その變形と見るべきものに「義經記」と「曾我物語」とがある。いづれも室町時代に作られたもので、前者は源義經の數奇を極めた一生を寫し、後者は曾我兄弟の復讐の經緯を描いてゐる。いづれも國民精神に最もよく觸れた說話であるが、それだけにまた通俗的な色彩が濃く、江戸時代の小說風の趣を多分に含んでゐるものである。

四　歷史物語と說話文學

平安時代にあらはれた假名文の國史「大鏡」「今鏡」の系統を引いて、鎌倉時代には「水鏡」が出た。「水鏡」は「今鏡」の後に續くものではなく、「大鏡」の前に接するもので、神武天皇から仁明天皇に至るまでの事蹟が記されてゐる。續いて室町時代に出た「增鏡」は後鳥羽天皇の御降誕から後醍醐天皇の隱岐より御還幸になるまでの事

十七日は元弘二年三月十七日。後醍醐天皇の隠岐御遷幸の御事を敍し奉つた條である。

蹟を記したもので、承久・元弘の兩亂が內容の中心となつてをり、文章は流麗な擬古文を用ひ、かゝる亂世の中にあつても、天皇の絕えず民を思ひ給うた大御心の深さを敍し奉つた條の如きは、一讀して感涙に咽せぶものがある。作者はいづれも明らかでない。

十七日、美作國におはしまし着きぬ。御こゝろち惱ましくて、この國に二三日やすらはせ給ふほど、かりそめの御宿りなればもの深からで、さぶらふ限りのもののふども、おのづからけぢかく見奉るを、あはれにめでたしと思ひきこゆ。君も思しつゞくることありて、

あはれとはなれも見るらんわが民をおもふこゝろは今もかはらず

（增鏡久米の皿山）

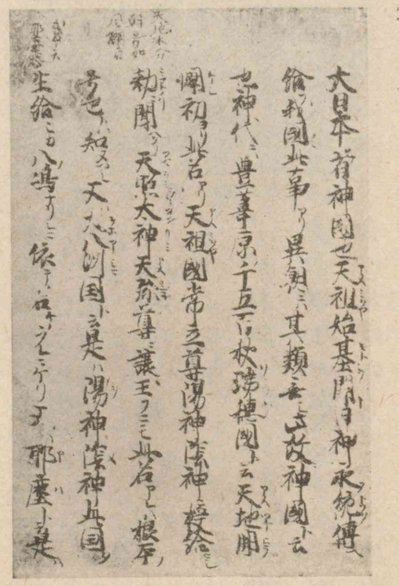
また史論書としては「神皇正統記」があらはれた。これは吉野朝の重臣北畠親房が文字通り兵馬倥偬の間にあつて執筆したもの

神皇正統記

史論書の嚆矢は、鎌倉時代に慈鎭和尚が神武天皇から順德天皇の御代に至るまでの事蹟を記した「愚管抄」である。

ので、深邃該博な知識と朗暢にして巧まない筆致とをもつて堂堂と皇統の正しく繼承されるべきいはれを說き、我が國體の本質を明らかにし、大義名分を正して、全卷に筆者の氣魄が躍動してゐる。

およそ王土にはらまれて、忠をいたし命を捨つるは、人臣の道なり。必ずこれを身の高名と思ふべきにあらず。然れども後の人をはげまし、その跡をあはれみて賞せらるゝは、君の御政なり。下としてきほひ爭ひ申すべきにはあらぬにや。ましてさせる功なくして、過分の望をいたすこと、みづから危むるはしなれど、前車の轍を見ることは、まことにあ



神皇正統記（白山本）

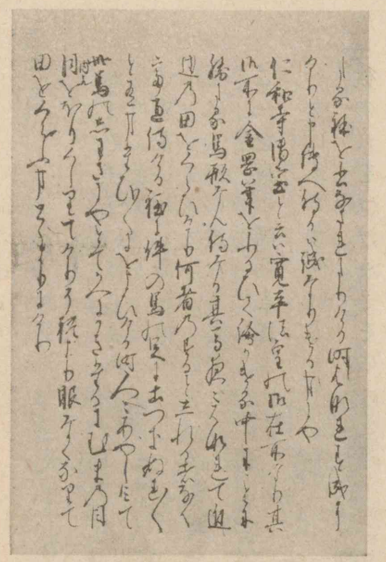
宇治拾遺物語・沙石集等

「古今著聞集」は橘成季の作であり、「古事談」は源顯兼、「寶物集」は平康頼、「發心集」は鴨長明、「沙石集」は無住法師がそれぞれ作者といはれ、他は不明である。

りがたきならひなりけんかし。

（神皇正統記卷六）

「今昔物語」の流を汲んで鎌倉時代にあらはれた説話文學は、「宇治拾遺物語」「十訓抄」「古今著聞集」「古事談」等の世俗説話集と、「寶物集」「撰集抄」「發心集」「沙石集」等の佛教説話集とであつて、これも過去の盛世を顧みることに急にして創作的氣力の枯渇した時代の風潮を反映してゐるものと見なければならない。その中で比較的に文學的價値の高いものは「宇治拾遺物語」「十訓抄」及び「古今著聞集」で、前代の「今昔物語」がたゞ説話を説話として無造作に記してゐるのに對してこれ等の集に見える説話には、小説的



古今著聞集（帝國圖書館本）

「館」は國守の館。

「蟇目」は朴、または桐で作り、中を空にして數箇の孔をあけた鏃。

な技巧が施されその上、教訓的傾向を多分にもたせてあるなほ佛教説話集の「沙石集」も、野趣の漲つた、朴訥愛すべきものである。

今は昔、甲斐國に館の侍なりける者の、夕暮に館を出でて、家ざまに行きける道に、狐の逢ひたりけるを、追ひかけて、蟇目して射ければ、狐の股に射當ててけり。狐射まろばかされて、鳴きわびて、腰を引きつゝ草に入りにけり。この男、蟇目を取りて行くほどに、この狐、腰を引きて先に立ちて行くに、また射んとすれば失せにけり。家、今四五町かと見えて行くほどに、この狐、二町ばかり先立ちて、火をくはへて走りければ「火をくはへて走るは、いかなる事ぞ。」とて、馬をも走らせけれども、家の許に走り寄りて、人になりて火を家に放けてけり。「人のつくるにこそありけれ。」とて、矢を矧げて走らせけれども、つけはてければ、狐になりて、草の中に走り入りて失せにけり。さて、家燒けにけり。かゝるものも忽ちに讐を報ゆるなり。これを聞きてかやうのものをば、構へて打ずまじきなり。

（宇治拾遺物語卷三）

住吉物語

擬古物語の作者はいづれも不明である。

御伽草子

五　擬古物語と御伽草子

戰記物語が鎌倉時代の新興文學として光彩を放つてゐる一方には、同じ時代に平安時代の物語の傳統を逐ひ糟粕を嘗めた「住吉物語」「岩清水物語」等の擬古物語が出た。しかしこれ等は室町時代の御伽草子に移る過渡期の產物であつて、文學的價値の極めて乏しいものである。

室町時代に出た御伽草子は擬古物語の系統を引き後世のお伽噺の源流をなすものである一寸法師・物ぐさ太郎・浦島太郎などの物語が題材とされ、その中に佛教や儒教の思想が可なり濃厚にあらはされてゐるが筋が通らず、前後矛盾してゐるところが少くなく、文章も冗漫蕪雜にして清新味を缺いてゐる。たゞこの時代に作られた他の多くの文學と同じやうに江戸時代の文學の導火線となつてゐるところに興味もあり、また價値もあるのであつて、近世の小說と共通する分子が少くない。

十六夜日記・海道記・東關紀行

昔丹波國に浦島といふものはべりしに、その子に浦島太郎と申して、年のよはひ二十四五の男ありけり。あけくれ海のうろくづを取りて父母を養ひけるが、或日のつれ〴〵に釣をせんとて出でにけり。浦々島々入江々々、至らぬ所もなく釣をし、貝を拾ひ、みるめを刈りなどしけるところに、ゑじまが磯といふ所にて、龜を一つ釣り上げけり。浦島太郎、この龜にいふやう、「汝生あるものの中にも、鶴は千年、龜は萬年とて、命久しきものなり。忽ちここにて命を絕たんこと、いたはしければ助くるなり。常にはこの恩を思ひ出すべし。」とて、この龜をもとの海にかへしけり。

（御伽草子浦島太郎）

六　日記・紀行と隨筆

鎌倉時代の日記・紀行には「十六夜日記」「海道記」「東關紀行」等があ

つた「十六夜日記」は藤原爲家の後室阿佛尼が、その子爲相の所領を回復する訴訟のため、建治三年十月、か弱い女性の身で鎌倉に下つた時の旅日記で、深い母性愛を漂はしてゐる。しかしこの「十六夜日記」は、平安時代の日記文學の傳統の上に立つものであるが、同じく都から鎌倉に下つた時の紀行である「海道記」と「東關紀行」とはいづれもこの時代の新文體である和漢混淆體を用ひ戰記物語の道行文體と共通する華麗明快な趣をもつてゐる。作者は從來「海道記」は源光行「東關紀行」は光行の子親行といはれて來たが、いづれも確かでない。

「海道記」の作者は貞應二年四月、「東關紀行」の作者は仁治三年八月それぞれ京都を立つたのである。

十日、豐川を立ちて、野くれ里くれ、はるぐと過ぐれば峰野の原といふ所あり。日、野の草の露より出でて、若木の枝にのぼらず、雲は峰の松風に晴れて、山の色、天と一つに染めたり。遠望の感情つきがたし。

山の端は露より底にうづもれて野ずゑの草にあくるし

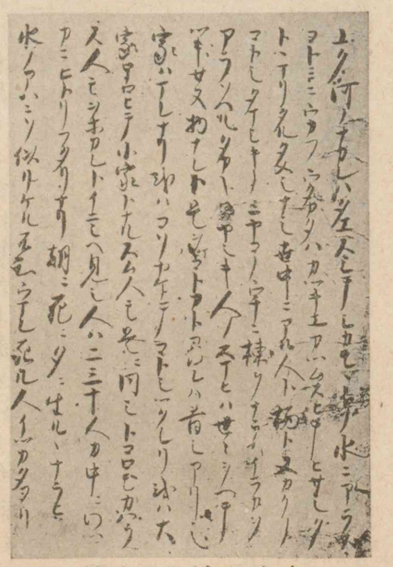
「豐川」は三河國。

方丈記

（海道記）

ののめ

鎌倉時代に於けるすぐれた評論的隨筆は「方丈記」である。鴨長明の作で、前半には主として無常な世相を寫し、後半には作者の境涯や心事を記し、思想は厭世的の色彩をもつて濃厚に彩られてゐるけれども、それは決して徹底的なものではなく、浮世に多分に未練を殘しながらしかも強ひて塵を遮けてみづから高しとしてゐる風が隨所に觀取される。文章は純然たる和漢混淆體をなし、流麗にして人を魅するものがある。



方丈記（大福光寺本）

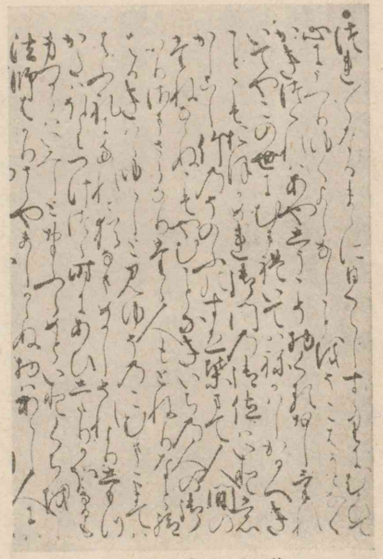
ゆく川の流は絶えずして、しかももとの水にあらず。よどみに浮ぶう

徒然草

たかたは、かつ消え、かつ結びて、久しくとゞまることなし。世の中にある人とすみかと、またかくの如し。玉敷の都のうちに棟を並べ、甍を爭へる、たかきいやしき人のすまひは、世々を經てつきせぬものなれど、これをまことかと尋ぬれば昔ありし家は稀なり。あるは去年破れて今年は造り、あるは大家亡びて小家となる。住む人もこれに同じ。所も變らず人も多かれど、古へ見し人は二三十人がうちに僅かに一人二人なり。あしたに死し、ゆふべに生るゝならひたゞ水の泡にぞ似たりける。

（方丈記）

兼好法師の「徒然草」は吉野朝時代に成つたもので、「枕草子」と共に隨筆文學の絶品として名高い。全篇二百四十餘段から成り、その中には「枕草子」と同じやうに自然の風物、人情の曲折をはじめ、作者の見聞感得したあらゆる事相が、筆にまかせて書きとめられてゐる。その中心をなす思想は、佛教の無常觀に立脚したものであるが、趣味性の豐富にして理解力の深い作者は決してそれに捉はれることなく、無常を說き、悟道を勸める一方では、人間的な惱みにも同情し、王朝の趣味にもあこがれ、現實の慰樂にさへも謳歌の聲を放つてゐるのである。また老莊の教を參酌加味したところも少くない。そしてかくの如き一見矛盾してゐると見える內容から却つて深い眞實性が感受されることは誰しも否めないところであらう。文章は絢爛を求めず、奇巧を衒はず、簡潔にして警拔であり、平淡の中に雅趣が溢れてゐる。



徒然草（正徹本）

神無月の頃、栗栖野といふ所を過ぎて、或山里にたづね入ることはべりしに、遙かなる苔の細道を踏み分けて、心細く住みなしたる庵あり。

「栗栖野」は山城國。

木の葉に埋もるゝ筧のしづくならでは、つゆおとなふものなし。閼伽棚に菊・紅葉など折り散らしたる、さすがに住む人のあればなるべし。かくてもあられけるよと、あはれに見るほどに、かなたの庭に大きなる柑子の木の、枝もたわゝになりたるが、まはりを嚴しく圍ひたりしこそ、少しことさめて、この木なからましかばと覺えしか。（徒然草）

「かくてもあられけるよ」はこんな山の中にもかうして住めるものよの意。

七　謠曲・狂言と舞の本

室町時代の文學のうち、時代の好尚を最も鮮明にあらはしてゐるのは謠曲である。謠曲は能樂の詞章であるがこの能樂こそ、實に我が國に於て生れた劇らしい劇の最初のもので、江戸時代の歌舞伎劇の原型をなしてゐるものである。そしてこの能樂の母胎は、平安時代の初期頃から田樂と共に流行し始め神祭・朝儀の餘興に極めて恰好なものとして演ぜられてゐた猿樂で、それ

田樂はもと農作の勞苦を慰めるために演ぜられたものである。

謠曲

猿樂は支那に於て古く正樂に對して俗樂の稱として用ひられた散樂の轉訛である。

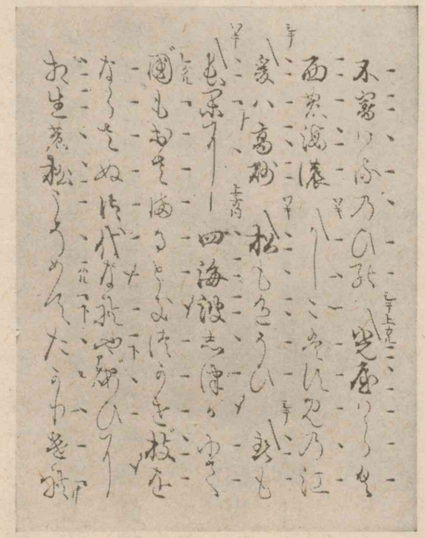
は茶番めいた輕口を交へて人を笑はせる、いはば一種の曲藝の如きものであつた然るに室町時代に入り、大和の春日神社所屬の猿樂の家元觀世家に觀阿彌・世阿彌といふ父子の天才が出で、足利義滿の保護の下にその卓拔な識見と伎倆とをもつて、上代以降の重要な歌舞・音樂を猿樂にとり入れて綜合し、これを眞摯にして純粹な藝術に更生せしめた。それが卽ち能樂であつて、その優美高雅にして嚴肅な內容は、大いに武家に歡迎され、從來、田樂能・猿樂能と呼ばれてゐた能といふ名稱は遂に猿樂の獨占するところとなつたのである。

さて能樂の詞章である謠曲を見ると、地の文と獨語・對話とから成りその題材は神話・傳說・和歌・物語・戰記・史實・巷談等、非常に多方面から取られ、仕組は單式のものもあるけれども大部分は複式で前後二段に變化するところに妙味が發揮される。そして內

能とはもと技藝の意である。

單式能とは一曲の主人公卽ちシテが一度登場したまゝで曲を終るもの、複式能とは最初シテが一旦退場し次いで變つた姿で登場するものをいふ。

容には神道・武士道儒教等の教義や思想が混在し、我が國民に固有な性情もあらはれてゐるが、特に佛教思想が豐富に行きわたつてゐるのは注目に値する。文章は古詩・古歌・古文等を補綴して、絢爛優雅な趣致を釀し、その基調をなしてゐるものは幽玄な風韻で、卽ち靜寂な境地の上に更に優艶な趣を加へ、それに象徵的または浪漫的な色彩を漂はせたものである。また能樂といふ一種の樂劇の詞章である性質上囃子や演技に適應調和するやうに、ひたすら聲調に重きを置いて作られてゐることはいふまでもあるまい。



謠曲（光悅本）

シテは天女、ワキは漁夫白龍。

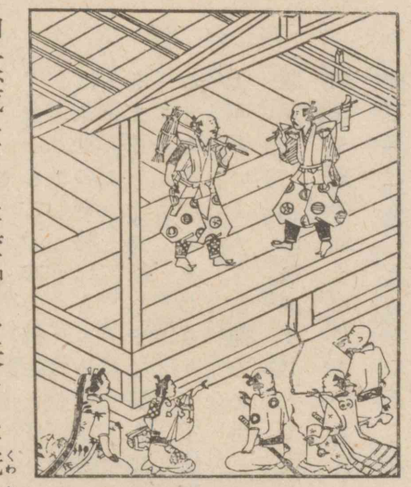
シテ詞「なうその衣はこなたのにて候。何しに召され候ぞ。　ワキ詞「これは拾ひたる衣にて候ほどに、取りて歸り候よ。　シテ詞「それは天人の羽衣とて、たやすく人間に與ふべきものにあらず。もとの如くに置き給へ。　ワキ詞「そもこの衣の御主とは、さては天人にてましますかや。さもあらば、末世の奇特にとゞめおき、國の寶となすべきなり。衣を返すことあるまじ。　シテ詞「悲しやな、羽衣なくては飛行の途も絕え、天上に還らんこともかなふまじ。さりとては返したび給へ。　ワキ謠「この御詞を聞くよりも、いよ〳〵白龍力を得、　詞もとよりこの身は心なき、天の羽衣取隱し、　謠かなふまじとて立ちのけば、　シテ謠「今はさながら天人も、羽なき鳥の如くにて、あがらんとすれば衣なし。　ワキ謠「地にまた住めば下界なり。　シテ謠「とやあらん、かくやあらんと悲しめど、　ワキ謠「白龍衣を返さねば、　シテ謠「力及ばず、　ワキ謠「せんかたも、　地謠「涙の露の玉かづら、かざしの花もしを〳〵と、天人の五衰も、目の前に見えてあさましや。

（謠曲羽衣）

狂言

狂言には、能樂と獨立して演ぜられるし、獨立した狂言とは、能樂の中に混入されてあるひ狂言とがある。

謠曲が眞摯嚴肅な樂劇として、かくの如く長足の發達を遂げた一方、滑稽な古猿樂の面影を傳へて發達したものに狂言がある。狂言は能樂の間に演じ、能樂によつて緊張した氣分を緩和するもので、能樂が古典的にして悲劇的色彩を帶びてゐるのに對し、これは現實的にして世相を諷刺した好個の喜劇となつてゐる。故にその題材も俗間から巧に捉へられて、或は臆病で虚飾家の大名、或は無學淺智な山伏、或はまた狡智に長けた冠者等の面目が遺憾なく寫し出され、用語も全く當時の口語で、民衆的な氣分が濃厚に感ぜられる。その詞章は地の文がなく、獨語と對話とからのみ成つてをり、仕



狂言記刊本挿畫

シテは太郎冠者、アドは主人。別に次郎冠者がゐる。

組は概ね小規模で、すべて單式に仕組まれてゐる。

アド主「太郎冠者を山田へ番に遣はしてござる。定めて淋しうしてゐるでござらう。次郎冠者を見舞に遣はさうと存ずる。やい〳〵、次郎冠者あるか。次郎「これにをります。主「汝は大儀ながら山田へ行て、太郎冠者が伽をしてやれ。次郎「畏まつてござる。主「竹筒もちと持て行け。次郎「心得ました。これはさて迷惑なれども、參らずばなるまい。主命ぢや。是非に及ばぬ。これは暗うて、どこやら知れることでない。呼ばはつてみよう。ほい〳〵、太郎冠者。やい、どこにゐるぞ。シテ太郎「されば、こそ狐が出た。あれは次郎冠者が聲ぢや。よう似せた。おのれ、化かさるゝことではないぞ。まづ眉毛を濡らさう。次郎「ほい〳〵。太郎「ほい〳〵。ここにゐるわ。次郎「どこにゐるぞ。太郎「ここにゐるわ。やあ次郎冠者か。次郎「なかなか。賴うだ人がいひつけられて、伽に來たわ。太郎「ようこそをりやつたれ。さても〳〵よう化けた。そのまゝの次郎冠者々々々々。捕へて縛つてやらう。やい次郎冠者、最前向ふの山から、大きな鹿が出たを、身

舞の本

「鎌倉殿」は源頼朝。

どもが追うたれば、こなたの山へくわら〳〵と逃げたわ。次郎「それは出かした。太郎「どつこへ、やることではないぞ。次郎「これは何とするぞ。太郎「何とするとは、狐め。化かさるゝことではないぞ。次郎「おれは次郎冠者次郎冠者。太郎「何の次郎冠者。おのれ縛つて、この柱にくゝつておいて、狐殿、よいなりの。おのれ、今に皮を剝いでくれうぞ。（狂言狐塚）

謠曲は能樂の詞章であるが、また幸若舞の詞章に舞の本があつた。幸若舞は一に舞舞ともいひ、桃井直詮の創めたもので、直詮の童名を幸若丸といつたから、この名があるといふその盛んに行はれたのは、室町時代の末期から江戸時代にかけてであつて、題材は多く「平家物語」や「義經記」「曾我物語」等から取られ、地の文と詞とから成つてゐることは謠曲と同じであるが、その表現は敍事的・散文的で、謠曲の如き劇的要素に乏しい。

文治元年正月十三日に鎌倉殿、箱根詣でとぞ聞えける。さる間箱根に

「クドキ」は述懷の意を述べる謠ひ方の一種。「箱王」は曾我五郎時致の幼名。

五山の文學

は、鎌倉殿の御參りとて、大衆衣を用意し、兒の衣裳を結構す。クドキその中に箱王殿、衣裳のことを嗜まで、幼稚で離れし父御のこと、今のやうに思はれて、しのびの涙せきあへず。コトバこしの式部を近づけ、いかに候、式部殿。鎌倉殿の御前へ、我は出仕を申すまじ。それをいかにと申すに、祖父伊東の入道殿、謀反人なりとて、御咎めのありしこと、世には隱れも候はず、式部殿。とぞ申しける。式部この由聞くよりも、さも候へ、これほど大衆結構候に、よそながら御見物あれかし、箱王殿。とぞ申しける。さらば見物せん。とて、鎌倉殿の御參りを、今や遲しと待ち給ふ。（舞の本元服曾我）

八　漢文學と吉利支丹文學

室町時代は禪宗の大いに興隆した時代であるから、俊才の士が多く五山に集まり、その支那に渡る者も次第に數を增して來たが、彼等はかの土にあつて、佛學を修める傍ら儒學をも研め、ま

京都の五山は天龍寺・相國寺・建仁寺・東福寺・萬壽寺、鎌倉の五山は建長寺・圓覺寺・壽福寺・淨智寺・淨妙寺。いづれも禪宗の寺院である。

題は「小景」

吉利支丹文學

た詩文をも學んだので、五山は文學の淵叢となり、戰亂のため一般に文事を顧みる暇のなかつた當時の精神界は、殆ど禪僧たちによつて支配されたといつても過言でない。そしてかくの如く五山の文學が興つた基を作つたものは、元から來朝した禪僧寧一山であつて、その門下に虎關・夢窓等が出で、更に夢窓の門下に義堂・絕海等が出た。これ等の禪僧たちの詩文は殆ど和臭のない純支那風のものであるが、就中、義堂の作は五山文學中の白眉と稱され、その集に「空華集」がある。

晚際西風急なり　歸舟席半の檣　水村看れどもいまだ到らず　江樹舞ふこと狂ふが如し

（晚際西風急　歸舟席半檣　水村看未到　江樹舞如狂）（空華集）

なほ室町時代の末期には、南蠻人卽ちヨーロッパ人が我が國に渡來し、始めて西歐の文物がもたらされると共に、吉利支丹宗門も傳へられたが、同宗門內に於ては、傳道教化に資すべき飜譯や創作が盛んに行はれた。そしてそれ等は天正年間、活字印刷機が輸入されると、或はローマ字により、或は邦字によつて印刷頒布されたのであつた。その飜譯乃至創作に當つたのは、日本語に通じた外國人宣教師や、學識ある日本人信徒等であつたらしく、飜譯は直譯風のところは少く、語句が十分にこなれてをり、簡明にして直截である。種類には教義書・修養書・聖徒傳等があり、別に主として外國人宣教師の日本語學習に資した教外の書「伊曾保物語」「平家物語」「太平記」「和漢朗詠集」等もある。このうち「伊曾保」と「平家」とは、當時の口語をもつて書かれ、その文體は狂言に最もよく似通つてゐる。しかしこれ等の文學は、德川幕府の吉利支丹宗門禁制によつて、はかなく滅びてしまひ、後世にはあまり影響を及ぼすところがなかつた。

「伊曾保物語」は「イソップ物語」の飜譯である。

第四章　江戸時代

一　概　觀

時代の範圍と文化の中心

徳川家康が江戸に幕府を開いてから同慶喜が大政を朝廷に奉還するまで凡そ二百六十年間を江戸時代といつてゐる。この時代は太平が永く續いて、文化は一般民衆の間に普及し、前古に比のないほど文運の興隆した時代であつたが、そのうち前半は元祿を中心とする京阪の盛運期であり、後半は文化・文政を中心とする江戸の盛運期であつた。

時代の特色と文學の傾向

この時代には、幕府の政策として士農工商の階級制が行はれてをり、工商は町人と稱され、農と共に武士階級の下にあつたが、太平が續いて彼等の經濟的勢力が增大して來ると、今まで文化から取殘されてゐた彼等の間にも學問・文藝に携はる者が出で、ここに武士階級の文學に對して町人階級の文學、卽ち町人文學の勃興を見るに至つた。しかもこの新興の町人文學は何等傳統に捉はれることなく、あらゆる樣式を思ひのまゝに創造することが出來たから、ひたすら支那乃至王朝の文學の模倣を事として、人事を對象とすることを野卑として却けた武士階級の文學よりもこの時代の特徵を發揮してゐることが遙かに多い。また武士道と儒敎とは、あたかも室町時代に於ける佛敎の如く、江戸時代の精神界を支配したものであつて、町人の間に於てすらも、町人としての義理、町人としての修身・齊家は極めて重んぜられた。そしてかくの如き一般の風潮は、義理と人情との相剋を描いたすぐれた文學を生む一方、强ひて功利的道德を盛りこんだ淺薄な文學をも流行せしめた。しかしこの時代の文學は京阪盛運

期に於ても、江戸盛運期に於ても、要するに洗煉された纖細な趣味生活を基調とした都會文學であるから、概括的にいへば、享樂的な傾向を著しくもち、粹とか通とかが、文學の上でも大きな勢力を占めてゐたのである。

二　浮世草子と黄表紙・讀本類

假名草子

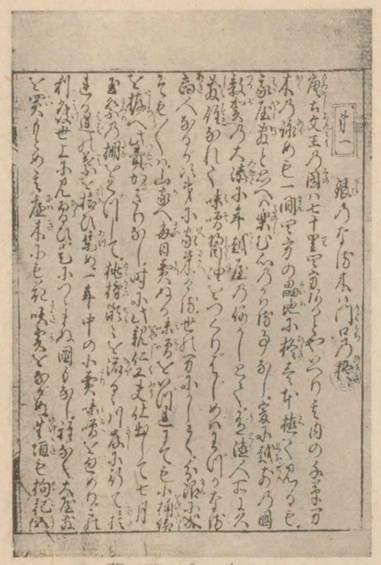
室町時代の御伽草子が江戸時代に入つて一歩を進め、假名草子となつてあらはれた。假名草子は概ね娯樂と教訓とを兼ねた雜話を假名書きにしたもので、如儡子の「可笑記」、山岡元隣の「他我身之上」、鈴木正三の「二人比久尼」、淺井了意の「御伽婢子」「浮世物語」等が知られてゐる。これ等は寛永から延寶頃にかけて盛んに行はれ、古文學の模倣擬作でなければ支那文學の飜案であるが、その中に西洋文學の飜譯である「伊曾保物語」が混つて出てゐるのは

浮世草子

注目に値する。これは室町時代に出た吉利支丹版の「伊曾保物語」とは全然系統を異にする飜譯で、譯者は不明である。

しかし假名草子は、元祿の浮世草子に展開してゆく江戸時代の小説の、いはば序曲に過ぎなかつた。元祿時代は元和偃武からまさに七十年、世は太平に醉うて、文化も大いに發達したが、當時は町人の擡頭期であつたから、特に町人文學が空前の盛觀を呈した。そしてその頃、富の中心であつた大阪が、おのづから町人文學の中心となつたが、浮世草子はその大阪に發生した町人文學の粹であつた。浮世草子とは、浮世卽ち現世のことを記した書物の意であつて、特に享樂を主とした現世謳歌的の内容をもち、井原西鶴の手によつて始めて作られたものである。西鶴はもと俳諧師であつたから、俳諧に於て修得した鋭利奇警な觀察眼と、法格に拘泥しない清新潑剌たる筆とをもつて、浮世草子の中に、或

は町人の享樂生活や金卽心の心事を、或は武士の義理一片に執した變態士道を活寫し、元祿の時世粧は、ここに殘る隈なく暴露されてゐる。その作には、軟派物に「一代男」「五人女等があり、町人物に「日本永代藏」「世間胸算用」等、また武家物に「武道傳來記」「武家義理物語」等がある。なほ西鶴以後の浮世草子の作者には北條團水・月尋堂等があつたが、彼等は單に西鶴の後塵を逐うたまでであつた。



日本永代藏

ここに越前國敦賀の大港に年越屋の何某とて有德人、所に久しく住み慣れて、味噌・醬油を造り、初は纔かなる商人なるが、次第に家榮えけり。世の萬づに賢く、分限になるそも〳〵は、山家へ毎日賣りぬる味噌を、いづれにても小桶俵をこしらへ、この費限りなし。時にこの親仁、工夫仕出して、七月魂祭の棚を崩して、桃・柿、瀨々を流るゝ川岸に行きて、すたれたる蓮の葉を拾ひ集め、一年中の小賣味噌を包めり。この利發、世上に見習ひ、これに包まぬ國もなし。程なく大屋敷を買ひ求め、その庭木にも、花咲き實をながめ、生垣も枸杞・五加木を茂らせ、萩は根引に風車は十八角豆に植ゑかへ、同じ蔓にも取りえのあるものを好めり。海月桶のすたれたるにも蓼穗を植ゑ、目にかゝるほどのこと、一つも愚かなるしわざなし。

（日本永代藏卷六）

「小桶・俵をこしらへ」の下に「これを入れ」といふ語を補つて解す。

「魂祭の棚を崩して」の下に「家々に川に流し」の語を補つて解す。

「枸杞・五加木」は共に藥用などになる。

「風車」は有毒の蔓性植物。

「海月桶」は海月を漬けておく桶。

八文字屋本

八文字屋自笑は八文字屋の主人である。

浮世草子を摸して、やゝ作風を異にしてゐるものに八文字屋本がある。初め京都の書肆八文字屋から出版されたので、この名があり、元祿の末から享保・寶曆頃にかけて續出し、その作者には江島其磧・八文字屋自笑・多田南嶺等があつた。就中、其磧の「世間子息氣質」「世間娘容氣」等は、明和・安永頃に流行を極めた氣質物の祖

赤本・黒本・青本と黄表紙

青本は薄萌葱色の表紙であつたが、後、次第に黄が勝つて來たので黄表紙といはれるやうになつた。

である。しかし八文字屋本には、西鶴の浮世草子に見る如き端的な尖鋭味がなく、たゞ穏和な説明に墮し、人物の性格にも類型的なものが多い。

かくの如く江戸時代もその中期頃までは、文化の中心はなほ京阪を去らなかつたけれども、何といつても政治の中心が江戸にあつたのであるから、文化の中心もまた江戸に遷つて行くのは自然の理であつた殊に八代將軍吉宗が實學を奬勵してからは江戸の文化は大いに向上し、遂に明和・安永の交に文運の東遷を見るに至つたのである。さて、文運の東遷前から江戸にあらはれ、東遷後榮えた純文學は赤本・黒本・青本・黄表紙等であつた。これ等はすべて表紙の色による名稱で、内容は繪を主として、これに詞書を添へたものである。そして赤本はお伽噺を、黒本は怪力豪勇譚を題材とし、青本もまたそれがやゝ複雑化してゐるまでで、

いづれも詞書を添へた子供相手の繪本に過ぎなかつたが、安永四年、戀川春町の黄表紙「金々先生榮花夢」が出るに及んで、その面目を一新し、大人向きのものとなつて、或は政治を諷刺し、或は時事を茶化した如き江戸風の輕い諧謔的な作が續々とあらはれた。その作者には、春町の外に朋誠堂喜三二・芝全交等があつた。

金々先生榮花夢

今は昔、片田舎に金村屋金兵衛といふ者ありけり。生れつき心優にして、浮世の樂しみを盡さんと思へども、至つて貧しくして、心にまかせず。よつてつくづくと思ひつき、繁華の都へ出て奉公を稼ぎ、世に出で、思

ふまゝに浮世の樂しみを極めんと思ひ立ち、まづ江戸の方へと志しけるが、名に高き目黒不動尊は運の神なれば、これへ參詣して、運のほどを祈らんと詣でけるが、はや日も夕方になり、いと空腹になりければ、名代の粟餅を食はんと立寄りけり。

（金々先生榮花夢）

讀本

黄表紙や洒落本は共に片々たる小册子で、黄表紙の如きも要するに繪が主であつたが、これに對し讀本は讀むことを主としたもので、夙く寛延頃からあらはれ、寛政から文化頃に至つては讀書界を風靡した。そしてその全盛期のものはすべて長篇であるが、浮世草子の如く世態・人情を寫した寫實小説ではなく、むしろ作者の道義的觀念を具體化した觀念小説で、題材は和漢の稗史・傳説等から取られ、支那小説の飜案が最も多きを占めてゐる。隨つて讀本には浪漫的な色彩があると共に、國民的の氣魄が全卷に漂ひ、また衒學的な分子も多く、高級な讀者を對象として書

南總里見八犬傳原稿

南總里見八犬傳第八輯卷之一

東都　曲亭主人編次

第七十四回　牛を牢く悔順　落恩錢を辞ふ
　　枕を卸して磯九　殘雪を踏つ

再説大田小文吾悔順の那龍種なる暴牛の突き来るを、勢に猛く當るべうもあらず、七巻の
騒ぐ氣色なく、刈りと反くく左右のまゝ角を避と捕駐う、然とも性ぬ怒牛の奮激
四蹄を壞み踏入まぐる推倒さと角へど小文吾も亦一身の力と極め拒あぐ一歩だも退
らで千曳入石の地中より見れ出く立る如く又烏蔑が奔牛の尾を援留めり徒やと覺
えく勃潮ふ像来ゝ及稀有の壯觀ぞありけれが初め酷く蒐蕃ぐれく辟易さる牛も、土
仞ハ赤き絆の為体を看て再眼を淡くく彼よくとぞうみくを抗足を空ゆ聚皆
四下る聚人もく怕れを近くく拔き汐を呆して齊一目成くく遂に然程る小文吾ハ

かれたものであることが感知される。代表的作者には、前に上田秋成があり、後に山東京傳・曲亭馬琴等がある。秋成の「雨月物語」は神祕玄怪の世界をまざ〳〵と展開させて、人をして鬼氣迫る思あらしめ、京傳の「櫻姫全傳曙草紙」「昔話稲妻表紙」等は場面の變化に富み、人情味の豊かなものがあつて、それ〴〵特異の氣分を湛へてゐるが、讀本界の重鎭とすべき者は馬琴である。馬琴が瑰麗雄偉な筆を揮つた椿説弓張月」「南總里見八犬傳」等は、その構想の雄大にして、場面の展開の變幻極まりないことに於て驚異に値するものがあり、剛健質實・忠勇義烈な國民精神の描出に獨得の長技を發揮してゐる。しかしあまりに勸善懲惡主義に執し過ぎて、人物の性格が善惡共に類型的となり、また必要以上に考證穿鑿に耽り過ぎて、作の興趣を殺いだ憾みがないでもない。

芳流閣上の拾闘の條である。

さればまた、犬飼見八信道は、犯せる罪のあらずして、月來獄舍に繫が

「坂東太郎」は利根川の異名。

「目柴翳す」は身を蔽ひかくすの意。目柴は鳥獣を射るために柴などを折つて身を隱すものをいふ。

合卷

れし、禍は今恩赦の福我が縛の索解けて、人にぞかゝる捕手の役儀、犬塚信乃を搦めよとて、なまじひに擇み出されつ。他の憂を自の面目に、今更用ひられんこと、願はしからずと思へども、推辭て許さるべくもあらぬ、君命重く彌高き、かの樓閣は三層なり。その二層なる檐の上まで、身を霞ませて登りて見れば、足下遠く、雲近く、照る日烈しく、堪へ難き、頃は六月二十一日、昨日も今日も乾蒸の、餘熱をわたる敷瓦は、凸凹隙なく波濤に似て、下には大河滔々たる、こゝ生死の海に朝る、溯洄は名に負ふ坂東太郎、水際の小舟楫緒絶えて、進退既に谷まりし、敵にしあればいかでわれ、繫ぎとめんと顧びの、樹傳ふ如くさら〳〵と、登りはてたる三層の、屋背には目柴翳すよしもなく、迭に透を窺ひつゝ、疾視あうて立つたる形勢、浮圖の上なる鶴の巣を、巨蛇のねらふに似たりけり。

（南總里見八犬傳第四輯卷一）

長篇物の讀本が大いに歡迎された讀書界の風潮は、從來、輕い諷刺諧謔をのみ旨としてゐた黃表紙の內容をも變化させ、遂に

赤本・黑本・青本・黃表紙・合卷を總稱して草雙紙といふ。

滑稽本と人情本

小册子では間に合はなくなつたところから、これを合册にした合卷が出來るやうになつた。合卷は、いはば挿畫の豐富な讀本であるが、その內容は讀本に比すれば遙かに通俗的なもので低級な讀者を對象として書かれてゐる。作者では柳亭種彥が最も有名で、その作「偐紫田舍源氏」は大いにもてはやされた。

滑稽本は滑稽と洒落とに終始する、罪のない笑の文學である。その先驅と認めるべきものは、この時代の初期、寬永年間に出た安樂庵策傳の笑話集「醒睡笑」であるが、後期に入ると滑稽文學が續々とあらはれた。その代表的なものとしては、享和二年に初篇が出た十返舍一九の「東海道中膝栗毛」と、文化六年に第一篇が出た式亭三馬の「諢話浮世風呂」とが擧げられる。なほこの滑稽本と同じ系統に立つものに爲永春水の人情本があるが、口語をそのまゝ用ひた會話に生彩が見られるのみで、文學的價値の頗る乏

しいものである。

三　淨瑠璃と脚本

古淨瑠璃

小野お通は織田信長の侍女とも淀君の侍女ともいはれた。「淨瑠璃物語」にはまた「淨瑠璃十二段草子」の名もある。

淨瑠璃の起原は明らかに知ることが出來ないけれども、凡そ室町時代の末期から起つたものらしく、小野お通の作といはれる「淨瑠璃物語」が、現存する淨瑠璃の最古の作であつて、牛若丸が奥州へ下る途中、三河國矢矧の淨瑠璃姫に會ふ説話を十二段に綴つたものである。そして初には盲法師などがこれに節をつけ、單に扇拍子で語つたり、琵琶に合はせて語つたりしてゐたのであるが、永祿年間、琉球から三味線の傳來があつて後、慶長の頃からは三味線に合はせて語り、また後には操人形に掛けることになり、ここに始めて淨瑠璃・三味線・操人形の三者が相提携した一種の樂劇が完成したのであつた。この淨瑠璃も、謠曲と同じく地の文と獨語・對話とから成り語物としての性質上、聲調に重きを置かれてゐることはいふまでもないが、しかし初期のものは御伽草子風の極めて單純なもので、萬治・寛文の頃、江戸人の好尚に投じて流行した金平淨瑠璃の如きも、たゞ殺伐にして荒唐無稽な豪勇譚を脚色したものに過ぎなかつた。

金平（公平）は坂田公時の子で、金平淨瑠璃はこの金平を主人公としてゐるものである。

近松の淨瑠璃

然るに貞享の頃、大阪に竹本義太夫が出て、從來行はれてゐた淨瑠璃節の諸流を綜合し、その長短を取捨折衷して新に義太夫節を創めた。そして淨瑠璃作者として夙くその名の聞えてゐた近松門左衞門が、これと提携して新作を出すに及んで淨瑠璃は一期を劃し爾來急激な發達を遂げて、優秀な戲曲として不朽の價値を生ずるに至つた。實に近松の淨瑠璃は西鶴の浮世草子と共に大阪に發生し、絢爛たる元祿文學の華となつたもので、時代物と世話物とに分れてゐるが、時代物が古淨瑠璃の傳統上に立

つものであるのに反し、世話物は全く近松の獨創に成り、傑作もまたこの方に多い。即ち世話物は當時の市井の卑近な出來事に取材して、寛容公平な人生觀をもつてこれを醇化し詩化し、更に義理と人情との葛藤を配して、人生の窮極の目的は畢竟安心立命にあることを暗示してゐるのであつて、溫かい愛の藝術家近松の風格は、ここに殘る隈なくあらはれてゐる。しかも結構脚色は巧妙を極め、描寫も精緻で、世態人情の機微を穿ち、詞藻が豐麗であると共に才氣もまた横溢し、奔放自在の筆を揮つた天來の詩曲は、まさに古今獨歩の特技を示してゐる。その作には、時代物に、出世

國性爺合戰

景清」「國性爺合戰」「曾我會稽山」等があり、また世話物に「冥途の飛脚」「博多小女郎波枕」「天の網島」等がある。

「なう〳〵姫宮樣。お身には怪我もなかつたか。舟はそのまゝそこにか。」と、よろぼひ寄つて「この體では、船中のお供はならぬ。また敵が寄せ來ればもうどうもかなはぬ。潮にまかせ、いづくまでも落ち給へ。沖へ舟の出るまでは、この女が陸にひかへた。敵何萬騎寄せたりとも、命限り腕限り。さりながら主從二度の對面は、御緣と命ばかりぞや。隨分御無事で、御無事で。南無諸天諸佛、別して八大龍神。萬乘の君の姫宮の御舟を守護し給へや。」と、船梁取つて押出せば、折しも引汐の名殘を何と栴檀女、涙しをるゝ汐風に、龍神納受の沖つ風。沖を遙かに流れ行く。「あら心やすや嬉しや。よしこの上は生きのびても我が身一つ、死んでも誰を友千鳥。生死の海は渡れども夫の行方、子の行方、君が行方はおぼつか波の、うき世の海を越えかねし、渡りかねしといはばいへ、この一心のはやて舟。仁義の櫓櫂、武勇の楫は、折つても折れぬ沖つ波、寄せくる

明の大司馬吳三桂の妻柳歌君が、思宗烈皇帝の妹栴檀皇女を遁れしめる條である。

関の聲か。」とて、劍にすがつてたぢ〳〵。よろ〳〵よろぼひ寄る方の、磯山おろし松の風、亂れし髪を搔上げて、あたりを睨んで立つたりし、和漢女の手本紙。筆にも寫し傳へけり。

（國性爺合戰第一）

近松と同時代に活躍した淨瑠璃作者には、「鎌倉三代記」を作つた紀海音があるが、その後、淨瑠璃界はます〳〵盛んになつて、竹田出雲・近松半二等が輩出し、いづれも才藻の點では近松に及ばないけれども、趣向の變化に富み、舞臺效果の多い作を出した。即ち出雲には「菅原傳授手習鑑」「義經千本櫻」「假名手本忠臣藏」等の作があり、半二には「本朝二十四孝」「傾城阿波鳴門」「妹背山婦女庭訓」等の作がある。

近松以後の淨瑠璃

「手習鑑」以下いづれも三四人の合作である。

しかし文運の東遷後は淨瑠璃はあまり振はず、これに代つて歌舞伎が發達した。歌舞伎は、戲謔の意の「かぶく」といふ語を體言化したもので、慶長年間、出雲の巫女お國が創めたといはれ、初は

歌舞伎の脚本

女子ばかりの集團舞踊であつたが、それが男女混淆となり、後には女子の俳優の嚴禁された結果、男子の女形が發達する一方、物眞似を交へるやうになつて、追々演劇の體を具へるに至つたものである。けれども淨瑠璃の盛んに行はれてゐる間は、歌舞伎の脚本には見るべきものはなかつたが、淨瑠璃が衰へるにつれて、脚本のすぐれたものが漸くあらはれて來た。寶曆から安永頃の作者である並木正三の「三十石艪始」、その門下である並木五瓶の「金門五山桐」等がそれである。しかしこれ等は京阪の作者の手に成るものであるが、文化・文政頃に七代目市川團十郎が出て以來は、歌舞伎は江戸に榮え、名優の輩出、舞臺機構の進歩につれ、一大民衆娛樂として發達し、民衆藝術の集大成となり、江戸にも多くの脚本作者が出た。即ちこの前後に江戸で活躍した作者は四世鶴屋南北・古河默阿彌等で、前者には「東海道四谷怪談」等の作があ

この集團舞踊をかぶき踊といつた。

四世南北は文化・文政期、默阿彌は天保から明治にかけて活躍した。

り、後者には「三人吉三」「村井長庵」等の作がある。

四　和歌・狂歌と謠物

初期の歌壇

室町時代に於て沈滯し、連歌にその勢力を奪はれた和歌は、辛うじて細川幽齋によつてその命脈を繫がれた。幽齋は二條家の正系を承け繼ぎ、これを堂上家や武士の間に傳へたが、またその門下である松永貞徳によつて地下にも傳はつた。しかし當時の歌風は大體に於て傳統の繼承であり、たゞ纔かに木下長嘯子の歌に傳統を破らうとする曙光がほの見えたに過ぎなかつた。

元祿期の歌壇

夕されば雲吹きみだる山風に一聲すごく雁なきわたる

（木下長嘯子）

然るに元祿時代に入ると、時代の趨勢に促されて革新運動が起され、歌壇も面目を一新するに至つたが、その基調をなしてゐ

國學興隆期の歌壇

るのは、和歌の自由檢討と民衆化とであつた。そしてこの潮流に棹さした歌人は、下河邊長流・僧契沖・戸田茂睡等である。

せば布の胸あひがたきすきまより身にしむけふの秋の初風

（下河邊長流）

初瀨のや里のうなゐに宿とへば霞める梅の立枝をぞさす

（僧　契　沖）

民衆化して自由檢討の域に入つた歌壇は、あたかも國學が勃興し、復古思想が盛んになつた機運に際會したので、活氣が横溢し、歌人が雲の如く輩出して多くの分流を生じ、それ〴〵特色ある歌を詠んだ。そのうち主なものは、雄渾蒼古な風調を鼓吹する賀茂眞淵・楫取魚彦・田安宗武等の萬葉派、「古今」「新古今」を折衷して穩健清雅な風調を持する加藤千蔭・村田春海等の江戸派、洗煉の極致を理想とする荷田在滿・本居宣長等の新古今派、眞情を率直

に歌ふことを旨とし、技巧を極力排した小澤蘆庵の一派などである。

をつくばも遠つあしほも霞むなりねこし山こし春や來ぬらん　（賀茂眞淵）

墨田川蓑きて下す筏士にかすむあしたの雨をこそ知れ　（加藤千蔭）

網代木にいさよふ波も立ちこめて霧におとする宇治の川づら　（荷田在滿）

粟田山ふもとの粟生いろづきて薄霧なびき秋風ぞ吹く　（小澤蘆庵）

「あしほ」（葦穂）は常陸國筑波山の北にある山。

「粟田山」は京都の東方にある連山。

これ等の諸歌人に續いてあらはれた香川景樹は、蘆庵の説を祖述して眞情を率直に歌ふべきことを唱へると同時に、更に歌意と聲調とを合致せしめるべきことを強調し、桂園派を起して歌壇を風靡し、その門下から熊谷直好・木下幸文・八田知紀等の名手を出した。なほこの外、越後の僧良寛、福井の橘曙覽備前の平賀元義、福岡の大隈言道、また女流の野村望東尼・太田垣蓮月等、すぐれた歌人が相次いであらはれ、幕末の歌壇を賑はした。

桂園派と幕末の歌壇

富士のねを木の間〳〵にかへりみて松のかげふむ浮島が原　（香川景樹）

月よみの光を待ちてかへりませ山路は栗のいがの多きに　（僧良寛）

親泣けば子さへ泣くなり世の中のせんすべなさも何も知らずて　（大隈言道）

おり立ちて朝菜洗へば賀茂川の岸の柳にうぐひすの鳴く　（太田垣蓮月）

狂歌

和歌の形式をかりて滑稽諧謔を弄するものに狂歌がある。狂歌の淵源は遠く「萬葉集」まで溯ることが出來るけれども、それが文學の一形式として盛んに行はれるやうになつたのは安永・天

明の頃からで、その中には、古來の和歌の想をもぢつて、これを滑稽化したものもあれば、また時勢を諷刺した皮肉なものもあるが、いづれも一般の輕佻な風潮を反映して機智縱横、輕妙洒脫を極めてゐる。作者には鯛屋貞柳・唐衣橘洲・四方赤良・朱樂菅江・鹿都部眞顏・宿屋飯盛等がある。

俗謠

菜もなき膳にあはれは知られけり鴫燒茄子の秋の夕ぐれ　（唐衣橘洲）

さわらびが握拳を振りあげて山の横つらはる風ぞふく　（四方赤良）

三味線の傳來は、謠物の發達をも大いに促し、江戸時代には小歌をはじめ、いろ〳〵の俗謠が流行したが、それ等を集めたものも「隆達小歌集」「松の葉」等數多く出た。

梅は匂よ木立はいらぬ　人は心よ姿はいらぬ　（隆達小歌集）

名所さま〳〵多けれど　吹上の濱は和歌の浦　さあ天神玉津島
布引の松山いく千代々々と　和歌山の松　お詣りあれの紀三井寺
（松の葉）

五　俳諧と川柳

貞門の俳諧
貞門の俳諧はまた古風ともいはれる。

山崎宗鑑・荒木田守武等の創めた俳諧連歌は、江戸時代の初に松永貞德が出てから非常な勢で興隆した。前述の如く貞德は二條派の和歌を細川幽齋に學んだのであるが、彼の本領はむしろ俳諧連歌の方にあり、歌學から得たその豐富な古文學上の知識をもつて、俳諧連歌の法式を新に作り、用語の上にをかしみを求めて、一派を開いた。その門に集まつた松江重賴・北村季吟等を貞門の俳人といふ。なほこの頃から單に俳諧といへば俳諧連歌を指すこととなつた。

鳳凰も出でよのどけきとりの年　貞徳
一僕とぼく〳〵ありく花見かな　季吟

しかし貞門の俳諧は要するに幼稚な駄洒落に過ぎず、しかも新に作られた法式は、その煩瑣なことに於て、結局以前の連歌の法式と大差がなかつたから、ここにまた俳諧を法式から解放する運動が起された。そしてこの運動に主として當つたのは西山宗因で、彼は輕妙な滑稽と放膽な句法とによる一新派を樹立し、これを談林派と稱した。かくて宗因の門には、後に浮世草子作者となつた井原西鶴をはじめ多くの俳人が雲集し、貞門の俳諧を壓して、延寶の末頃には俳壇は談林の風靡するところとなつた。

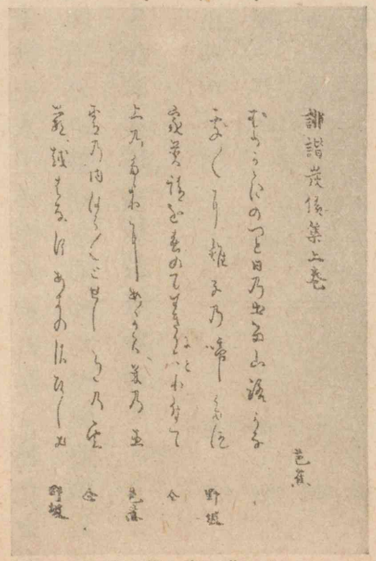
花むしろ一見せばやと存じ候　宗因
長持に春ぞくれゆく更衣　西鶴

かくの如く隆盛を極めた談林の俳諧も、その末流になると、徒

談林の俳諧
談林はまた檀林とも書く。

蕉風の俳諧

に佶屈難解で、獨りよがりの謎めいたものになり、纔かに小西來山・上島鬼貫の二人が出て、飄逸淡泊な俳風を起したけれども、俳壇を革新するだけの力はなかつた。この時に當つてあらはれたのが松尾芭蕉である。芭蕉は初め北村季吟の門に入り、次いで談林に遊んだが、そのいづれにも滿足せず、自然を諦觀し禪に參じて、遂に獨自の俳境を開き、貞門・談林の徒が遊戯視した俳諧を根柢から革めて、眞摯にして幽寂高雅な俳諧道を樹立した。これを蕉風といひ、かくして始めて俳諧は詩歌と同格となつたのである。芭蕉は殆どその一生を旅に送り、天地自然と同化す



俳諧炭俵集

蕉風はまた正風とも書く。

ることをもつて念願としてゐたので、蕉風の根本は風雅にあつたといはなければならない。門下には、輕妙潤達な句を作つた榎本其角、溫雅靜平な風を持した服部嵐雪をはじめ、向井去來・内藤丈草・各務支考・森川許六等、俊秀な人士が多く、それ〴〵特色を發揮して一世の視聽を集め、俳諧の絶頂期を形づくつた。その集には「冬の日」「春の日」「曠野」「ひさご」「猿蓑」「炭俵」「續猿蓑」等がある。

「冬の日」以下を總稱して七部集といふ。

野坡は志田氏。

梅が香にのつと日の出る山路かな　芭蕉
ところ〴〵に雉子の啼きたつ　野坡
家普請を春の手すきに取りつきて　同
上のたよりにあがる米の直　蕉
宵のうちはら〳〵とせし月の雲　同
藪ごし話す秋のさびしき　坡

（下略）（炭俵上卷）

以下發句。

閑さや岩にしみ入る蟬の聲　芭蕉
鐘ひとつ賣れぬ日はなし江戸の春　其角
はせ釣や水村山郭酒旗の風　嵐雪
鉢たゝき來ぬ夜となれば朧なり　去來
水底を見て來た顔の小鴨かな　丈草
牛叱る聲に鳴立つ夕べかな　支考
涼風や青田の上の雲の影　許六

天明の俳壇

其角の江戸座、嵐雪の雪門、支考の美濃派等が芭蕉の歿後出來た主な分派であるが、このうち美濃派の系統を引く女流俳人に加賀の千代（明和・安永頃の人）があつた。

芭蕉の門下は、芭蕉が生きてゐる間こそ統制されてゐたが、一朝その死にあふと、互に異を立てて爭ひ、風調も次第に墮落した。かく芭蕉の精神が失はれて來ると、反動の機運が漸く熟し、まづ明和の頃に炭太祇が出で、續いて安永・天明の交に與謝蕪村があらはれて、俳壇に新調がもたらされた。太祇は主として人事を吟じて、洒脫な趣を見せたのであつたが、天明調を創めた蕪村は自

然・人事を客觀的に寫生し、これに優美華麗な畫趣をとり入れて、印象の頗る鮮明な句を作り、その門からは高井几董が出た。なほ當時、蕪村と共に名を知られた俳人には、大島蓼太・三浦樗良・加藤曉臺・高桑闌更・加舍白雄等があつた。

「ふらこゝ」はぶらんこ。

ふらこゝの會釋こぼるゝや高みより　太祇

鳥羽殿へ五六騎いそぐ野分かな　蕪村

やはらかに人分けゆくや勝角力　几董

更くる夜や炭もて炭をくだく音　蓼太

天明以後の俳壇

天明に新調が出て後、俳諧は再び衰へて清新の氣を失ひ、たゞ文化・文政頃、信濃に小林一茶があらはれて、飄逸な趣のうちに切實な人間味を盛つた句を作つたのが注意されるくらゐのものであつた。

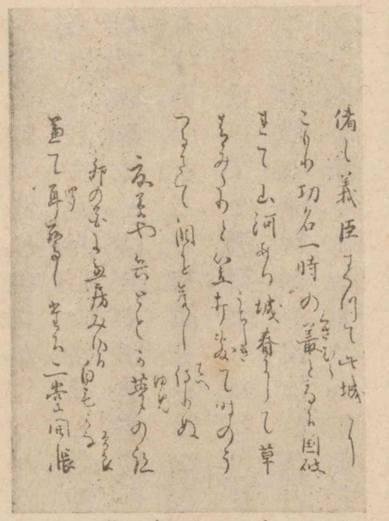
梟よのほゝんどころか年の暮　一茶

俳文

「百魚譜」の一節。

「崑山」は崑崙山の略で、名玉を産する。

俳諧獨得の觀察と表現手法とを散文にとり入れたものが俳文である。そしてこの俳文もまた芭蕉の手によつて大成されたのであつて、旅に親しんだ彼は、俳文によつて「甲子吟行」「卯辰紀行」「奥の細道」等、多くの紀行を書き、そのいづれにも閑寂の趣が漲つてゐる。芭蕉の門下の支考・許六等もまた俳文にすぐれてゐた。後、天明期になつては横井也有が最も著名で、その文集「鶉衣」は、やゝ遊戯に流れてはゐるが、和漢の故事・成句を引用して纖細巧緻を極め、圓轉滑脱の妙味がある。



奥の細道

鰯といふものの味はひ、ことにすぐれたれども、崑山のもとに玉を礫

にするとか、多きが故に賤しまるる。たとへ骸は田畠のこやしとなるとも、頭は門を守りて、天下の鬼を防ぐ。その功鰐・鯨も及ぶべからず。

（鶉衣）

狂文

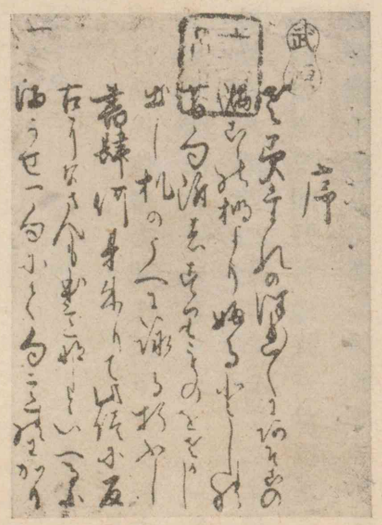
川柳

「輕いことかな〳〵」を前句「草庵の文庫から出す紙碁盤」を附句といふ。

俳諧師の間に俳文が作られた如く、狂歌師の間には狂文が作られた。狂文が卑俗な滑稽と諧謔と諷刺と洒落とを主としたものであることは、全く狂歌と變らず、その遊戯的な點に於ては、也有の俳文などと共通するところが少くない。

狂歌・狂文を流行せしめた寶暦・明和頃の江戸の風潮は、またここに川柳の流行をも招致した。川柳は俳諧の前句附から出たものである。前句附とはたとへば「輕いことかな〳〵」といふ句に、「草庵の文庫から出す紙碁盤」と附ける如きをいふのでこれは元祿の「たから船」といふ書に見えてゐるものであるが、その後次第にこれが盛んに行はれるやうになるにつれ、附句だけで獨立した

意味をもつものが多くなつて來た。そして明和二年に吳陵軒可有が當時、前句附の點者として最も名高かつた柄井川柳の點した前句附のうち、獨立して意味の通ずる附句を集めて「誹風柳多留」初篇を出したが、後には附句は完全に前句を離れて、獨立した一つの文學となり、遂に川柳の點した前句附、即ち川柳點が、この文學形式の總名となるに至つた。この川柳は、最も鋭角的にして、最も皮肉な文學であつて、その滑稽突梯は人の頤を解かしめると同時に、その辛辣な諷刺は、世態・人情の弱點・缺陷を衝いて餘すところがない。



誹風柳多留序

いいとこへ來たと背高つかはれる
渡守ひと棹戻す知つた人
清盛の醫者は裸で脈をとり

（誹風柳多留）

六　隨筆と紀行

江戸幕府を開いた德川家康は、兵馬倥偬の間に天下を支配する權勢を得たのであるけれども、學問に趣味をもち、しば〳〵各方面の學者を招いて知識を廣め、また治道の上から一般にも學問を奬勵し、その後も綱吉・吉宗の如き學問好きの將軍が出たから、江戸時代には、すぐれた學者が踵を接してあらはれ、學界もまた空前の盛觀を呈した。その中には、貝原益軒・新井白石・室鳩巣・湯淺常山の如く、儒學者にして國文をよくし、和漢混淆文をもつて隨筆乃至史論風の書を著したものもあるが、國學者にも賀茂眞

隨筆

益軒の「十訓」、白石の「讀史餘論」「藩翰譜」「折焚柴の紀」、鳩巣の「駿臺雜話」、常山の「常山紀談」等は有名である。

淵・本居宣長等文才に富んだものが出で、宣長と同じく眞淵の門下であつた加藤千蔭・村田春海等の如きは、學者としてよりもむしろ文章家として傑出してゐた。そして彼等國學者の手に成つた作は、すべて王朝時代の國文を標準とする、優柔流麗にして蒼古典雅な趣致を帶びた隨筆小品で、雅文または擬古文と呼ばれ、その後も伴蒿蹊・清水濱臣・松平定信・中島廣足・藤井高尙等があらはれて、この方面にすぐれた作品を殘した。

眞淵の「賀茂翁家集」、宣長の「玉かつま」、千蔭の「うけらが花」、春海の「琴後集」、定信の「花月草紙」等は有名である。

葉月二十日あまり、秋のけはひのなつかしくて、例の隅田川のほとり、石濱の庵に行きて宿りぬ。有明の月のにほひも、霧立ちわたる曉のさまも、所がら世に似ぬものから、ここは雨のそぼ降る日なん殊にあはれは深かりける。もとより萱ふける庵なれば、音だになくて、軒のしづくの三つ四つ落ちそむるより、籬の萩の下葉の色づきたるが、ほろほろと散るもあはれなり。水のおもては動くともなくて、鏡の如くなる

「隅田川のほとりなる石濱の庵にて雨の中に作れる文」の一節。

紀行

に、雲の濃きうすきうつろひて、かつ浮びかつ消ゆる水沫にこそ、雨のけはひはしるかりけれ。みをの一すぢは、さしひく汐にもまじらで、とはに縹の色に流れいにて、沖に出づめり。これや水上の秩父の山の眞清水の落ち來るならん。

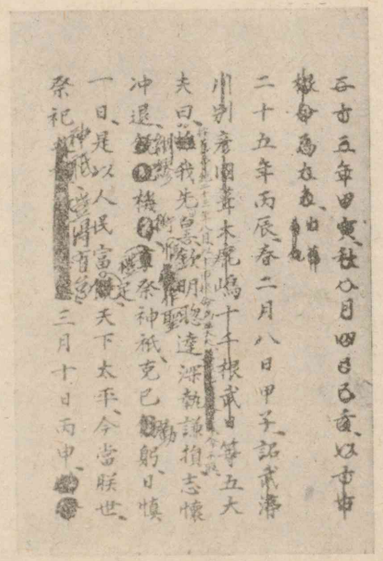
（うけらが花卷七）

前述の松尾芭蕉の俳文「甲子吟行」「卯辰紀行」「奥の細道」等も紀行であるが、なほこの時代の紀行の有名なものには、賀茂眞淵の「岡部日記」をはじめ、本居宣長の「菅笠日記」、橘南谿の「東遊記」「西遊記」等がある。

漢文學

七　漢文學と國學

室町時代に五山の禪僧等によつて維持された漢詩漢文は、江戸時代に入り、儒學が隆盛になつて來るにつれ、これをよくするものが輩出し、非常な流行を來した。就中、慶長頃の林羅山・享保頃の石川丈山、寛政頃の柴野栗山・菅茶山、文化・文政頃の梁川星巖・頼山陽、幕末の佐藤一齋・齋藤拙堂等は名家で、これ等の人々の詩文集は、いづれも大いに愛讀されたが、特に頼山陽が、武家を中心として源平以降の歴史を敍し、これに史論を加へた「日本外史」は、徳川光圀が學者を集めて編せしめた「大日本史」と共に、勤皇論を鼓舞する上に與つて力が多かつた。



大日本史原稿

題は「芳野懐古」。南朝とは吉野朝のことである。

今來古往跡茫々　石馬聲なく抔土荒る　春は櫻花に入りて滿山白く　南朝の天子御魂香ばし

（今來古往跡茫々　石馬無聲抔土荒　春入櫻花滿山白　南朝天子御

魂香）　（梁川星巖）

外史氏曰く、余しば〳〵攝・播の間を往來し、いはゆる櫻井驛といふものを訪ひ、これを山崎路に得たり。一小村のみ。過ぐる者或はその驛址たるを省せず。蓋し足利・織・豐數氏を經て、世故變移し、道里驛程、隨ひて輒ち改まりしのみ。余ここに於て、低回して去ること能はず。顧みて金剛山の雲際に嶷立せるを望み、公が義を擧げし秋、及びその子孫據りて以て王室を扞護せしを想見す。公が行在に詣り、天子に對ふるを觀るに、曰く、「臣にして未だ死せずんば、賊の滅びざるを患ひたまはざれ。」と。それ一兵衞尉を以てして、しかも居然として天下の重きを以てみづから任ず。豈値遇に感激し、身を以て國に許せるにあらずや。

（外史氏曰、余數往來攝・播間、訪所謂櫻井驛者、得之山崎路一小村耳。過者或不省其爲驛址。蓋經足利・織・豐數氏、世故變移、道里驛程、隨輒改耳。余於是低回不能去。顧望金剛山嶷立雲際、想見公擧義之秋、及其子孫據以扞護王室也。觀公詣行在對天子、曰、臣而未死、賊不患不滅。夫以一兵衞尉而居然以天下之重自任。豈非感激値遇、以身許國哉。　（日本外史卷五）

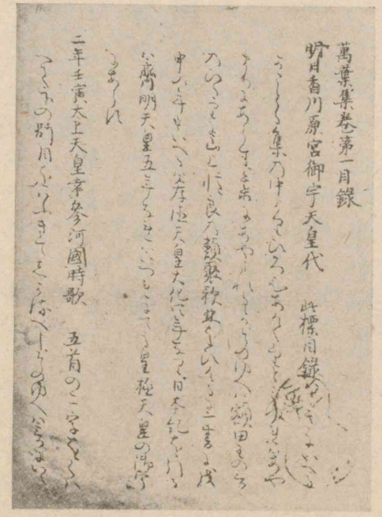
國學

儒教や佛教は我が國に傳來してから次第に盛んに行はれるやうになつたが、それと共に日本化されて、我が國民精神の涵養に資したことも少くなかつた。しかし一面に於ては、外來の文物・思潮を崇拜する餘り、ともすれば國家的・國民的の自覺を缺いて、漢意・佛意を重んずるやうな弊を生じたのみならず、また物質を本位とし、俗惡な現實を謳歌する風習なども起つて來た。これ等の弊を矯めて、我が國民の守るべき正しい道を實現するために、我が上代の純粹な文化を闡明し、それを復興せしめようとして起つたのが國學であつた。隨つて國學者は、素朴純眞な上代にあこがれ、古典の中にひそむ我が國固有の純風・美俗、正大公明な日本精神を强調しようとして、專ら古典の研究に力を盡した。勿論古典の研究は前時代からあつたけれども、この時代になつてそ

季吟の著「源氏物語湖月抄」「枕草子春曙抄」「流長の著「萬葉集管見」「僧契沖の著「萬葉集代匠記」「萬葉集春滿の著「萬葉集伊勢物語案抄」「萬葉集俗語童子問」「眞淵の著「萬葉考」「冠辭考」「古言辭長の著「古事記傳」「源氏物語玉の小櫛」等は有名である。なほ塙保己一が我が國古今の書を集輯合刻した「群書類從」も、國學界に大きな恩惠を與へた。

の面目を一新し、前人未踏の天地の開拓に手を下すやうになつたのである。

即ち元祿期以前に北村季吟が出て國文學の註釋に先鞭をつけたが、元祿期には下河邊長流・僧契沖等があらはれ、「萬葉集」の研究に從ひ、大きな業績を擧げた。次いで荷田春滿は熱烈な國家的觀念に卽し、古典によつて我が國固有の道を明らかにしようと努め、國學校建設の事を計畫した。そしてこの春滿の門下から出た賀茂眞淵は、「萬葉集」を中心とする古典の註釋的研究を基礎とし、國民本然の情意に立脚する大道を提示しようとしたのであつて、眞


萬葉集巻第一目錄
吉野宮川原宮御宇天皇代
二年壬寅太上天皇幸參河國時歌

萬葉集代匠記原稿

春庭は宣長の長子、大平は宣長の養子、内遠は大平の養子である。

淵の手によつて始めて國學發展の第一階梯を實現することが出來たのである。やがて眞淵の門から本居宣長が出るに及んで、國學體系は立派に組織立てられたが、宣長は「古事記」の研究を根幹として、上代國民の「まごころ」から出た神ながらの道を說いたのであつた。

宣長の歿後、本居氏の家學を繼承した春庭・大平・内遠及びその門下は、文學・語學などの文獻的研究を主とし、一方、平田篤胤は宣長の古道思想を繼承し、これに哲學的・神學的成分を加へ、宗教的熱情をもつてその宣揚に努めた。かくして國學の流は二流に分れて進展を續け、大いに國民的自覺を促し、たま〳〵水戸學派をはじめ各地の志士たちの鼓吹により、澎湃として漲り起つた尊皇愛國の機運と相應じて、遂に明治維新の改革をもたらすべき原動力となるに至つたのである。

「直毘靈」は本居宣長の著で、皇道の本義を明らかにし、神ながらの道のあらましを說いたもの。

皇大御國は、かけまくも畏き神御祖天照大御神の、御生れませる大御國にして、萬づの國に勝れたる所以は、まづここにいちじるし。國といふ國に、この大御神の大御德かゝぶらぬ國なし。大御神、大御手に天つ璽を捧げ持たして、「御代々々に御しるしと傳はり來つる三種の神寶はこれぞ。萬千秋の長秋に、吾が御子のしろしめさん國なり。」と、ことよさし賜へりしまに〳〵、天津日嗣高御座の、天地の共、動かぬことは、はやくここに定まりつ。

（直毘靈）

ふみわけよやまとにはあらぬ唐鳥のあとを見るのみ人の道かは

（荷田春滿）

たふときやすめらみことは神ながら神を祭らすけふの新嘗

（賀茂眞淵）

皇神の道な忘れそうつし身の世のなりはひはよし繁くとも

（平田篤胤）

時代の特色と文學の傾向

第五章　明治大正時代

一　概觀

明治維新は文字通り我が國未曾有の大變革であつた。王政は古へに復り、封建制度は根柢から崩壞し、海外の文化は潮の如くこの島帝國に流れこみ、過去の文化が破壞されると共に、新しい文化が續々と建設され、文學も全く面目を一新した。卽ち舊幕時代の嚴しい階級制が廢されて、四民平等となつた結果は、あらゆる方面から多數の作家を出すこととなり、印刷術の急激な進步は、學問の普及と相俟つて、讀者の範圍を無限に廣め、文運をいやが上に振興せしめたのである。また絕えず外國文學に刺激され、その影響を受けるところから、文學の內容も著しく深化し、その

形式も多趣多樣となつた一方、思潮の上に於ても外國と歩調を合はせるやうになつたが、もとより國民性の相違は儼として存在してゐるのであるから、外來の思潮もおのづから日本化されてゆくことはいふまでもない。

なほ明治時代以後は、自由明快な言文一致體卽ち口語體の文章が小說・評論等に用ひられ、後には詩歌の如き韻文までもこの體によるものが生じた。かくの如く口語體が盛んに用ひられるやうになると共に、寫實的精神と個性色を發揮する精神とが、文學のすべての分野にあらはれたが、この二つの精神こそ、明治時代以後に於ける文學の最も注意すべき特色であるといはなければならない。

二　小說

混沌時代の文學

魯文の代表作は「西洋道中膝栗毛」であり、龍溪には「經國美談」、「東海散士には「佳人之奇遇」、鐵腸には「雪中梅」「花間鶯」の作があり、鳴鶴には「繫思談」（リットン作）の飜譯があつた。

新文學の發生

「書生氣質」も十八年に出た。

明治時代も、維新の大業が成つた當座は、專ら物質文化の建設に忙しく、精神文化の方は殆ど顧みられなかつたので、文學も何等新しい進展をなさなかつた。まさに明治文學の混沌時代といふべく、纔かに京傳・馬琴・一九・三馬等の如き江戸時代の戲作者の餘唾を嘗めた假名垣魯文等の滑稽小說と、當時の一般的風潮によつて政治熱に浮され、自己の理想を小說に託して表現した矢野龍溪・東海散士・末廣鐵腸等の政治小說、乃至藤田鳴鶴等の飜譯政治小說が出たばかりで、後者には些か新時代の文學らしい色彩があつたものの、それも文學として決して高く評價することの出來ないものであつた。

然るにこの混沌たる文界にあつて、坪內逍遙は明治十八年に「小說神髓」を著し、眞の文學の意義、創作の法則等を明らかにすると共に、その所論をみづから具體化した「當世書生氣質」を書いた

「浮雲」は二十年に出た。

が、更に二葉亭四迷がこれを具體化した「浮雲」を出すに及んで、近代的な寫實小説の基礎が始めて確立された。特に「浮雲」は清新な言文一致體の文章で書かれてをり、心理描寫は精緻を極め、景情は眼前に躍動し、後に出た自然主義文學と一脈相通ずるものがあつて、前代の戯作者の手に成る小説が勸善懲惡の方便となつてゐるのとは、その根本に於て大きな相違があつた。

當世書生氣質

文三は父親の存生中より、家計の困難に心づかぬではないが、何といつてもまだ幼少のこと、いつまでもそれでゐられるやうな心地がされて、親思ひの心から「今に坊があゝして、かうして。」と、年齡にはませたことをいひだしては、兩親に袂を絞らせたことはあつても、またどこともなくたわいないところもあつて、波に漂ふ浮草のうか〳〵として月日を重ねたが、父の死後頼りのない母親の辛苦心勞を見るにつけ聞くにつけ、子供心にも心細くもまた悲しく、始めて浮世の鹽が身にしみて、夢の覺めたやうな心地。これからは給仕なりともして、母親の手足にはならずとも、せめて我が口だけはと思ふ由をも母に告げて、相談をしてゐると、捨てる神あれば助くる神ありで、文三だけは東京にゐる叔父の許へ引取られることになり、泣きの涙で靜岡を發足して、叔父を頼つて上京したは明治十一年、文三が十五になつた春のことなどとか。

（浮雲第二回）

しかし「浮雲」は、當時の文壇の程度や一般の風潮などに比してあまりに進み過ぎてゐた。今まで戯作風の小説にのみ接してゐた讀書社會には、この心理描寫が主となつてゐる近代的な小説が甚だ飽き足らないものに感ぜられたらしい。そしてこれがた

硯友社

小波は二十四年に「こがね丸」を書いてから、おぼろ伽作家に轉向した。

めに、ほゞ同時代に起つた、戯作的傾向を多分にもつ硯友社一派の文學が、文壇に勢力を張ることとなつたのである。硯友社は尾崎紅葉・山田美妙齋・石橋思案等によつて明治十八年に結成され、初め機關雜誌として「我樂多文庫」を出してゐたが、後、巖谷小波・川上眉山・江見水蔭・大橋乙羽・廣津柳浪等が馳せ加はり、更に紅葉の門下から泉鏡花・小栗風葉等が出るに及び、その勢力は文壇を風靡するに至つた。硯友社一派の文學は、要するに江戸つ兒風の通人ぶりを發揮したもので、藝術を遊戯視し、人生の批判などは

我樂多文庫挿畫

「伽羅枕」は二十三年、「多情多恨」は二十九年、「金色夜叉」は三十年以後、晩年に書かれ、作者の死によつて未完のまゝ殘された。

「武藏野」は二十年に出たが、美妙齋の作では硯友社脱退後二十二年に「胡蝶」が發表された。第一の傑作である。なほ彼は二葉亭と共に言文一致體の小説の創始者であつた。

全く沒却して、ひたすら文章上の工夫にのみ熱中し、これを樂しんだのであつた。故に眞面目に人生を考察し批判した二葉亭の文學を「人生のための藝術」といへば、硯友社一派の文學は「藝術のための藝術」といへよう。そしてこの一派の中心となつたものは、いふまでもなく尾崎紅葉であつて、「伽羅枕」等初期の作は、艶麗芳醇にして輕妙な西鶴張の文章によつて、多く女性の情緒を浪漫的に寫したものであるが、その後期の作「多情多恨」「金色夜叉」等になると、さすがに寫實的傾向が濃厚になつてゐる。なほ山田美妙齋の材を歴史に取つた抒情味の豐かな作「武藏野」もまた、硯友社の文學のうち代表的なものであるが、彼はその後、同社を去つて雜誌「都の花」に據つた。

まことによくこそ我は來つれ！　胡ぞ來るの甚だ遲かりし。山の麗しといふも、壤の堆きものゝみ、川の暢しといふも、水の逝くに過ぎざる

を、牢として拔くべからざる我が半生の痼疾は、いかで壤と水との醫すべきものならんと、齒牙にも掛けず侮りたりし己れこそ、まづ侮らるべき愚かのものならずや。看よ〳〵、木々の綠も、浮べる雲も、秀づる峰も、流るゝ溪も、峙つ巖も、吹き來る風も、日の光も、鷄の鳴く音も、空の色も、皆おのづから浮世のものならで、我はここに憂を忘れ、悲を忘れ、苦を忘れ、勞を忘れて、身はかの雲と輕く、心は水と淡し。希はくは今よりかくの如くして我が生を了らんかな。

（金色夜叉第三十三章）

露伴と一葉

明治二十年代の文壇は、硯友社一派の文學によつて占められてゐたとはいつても、もとより同派以外に立つものが全然なかつたのではない。特に幸田露伴の如きは、紅葉と對角線の上に立ち、紅葉と並び稱されたのであつた。露伴も西鶴に私淑し、その筆意を學んだことは紅葉と同じであるが、作の中心生命に至つては根本的に相反してゐる。卽ち紅葉が浪漫的とはいつても、大體に於て寫實を基礎としてゐるのと反對に、露伴は全く空想から出發し、紅葉は主として殉情的な女性を描いてゐるが、露伴は飽くまで豪快な意氣を有する男性を寫し、文章に於てもまた、前者が艶麗であるのに對して、後者は雄勁を極め、莊重嚴肅な氣分が漲つてゐる。露伴の代表的な作は「風流佛」「五重塔」「風流微塵藏」等であらう。また當時、天才的女流作家として輝かしい光芒を放つたのは樋口一葉で、やはり西鶴張の生彩ある筆致により、いひ知れぬ深い哀愁を湛へた「たけくらべ」「十三夜」等の傑作を、その短い生涯の間にいくつか文壇に投じた。

「風流佛」は二十二年、「五重塔」は二十四年、「風流微塵藏」は二十六年に出た。

「たけくらべ」「十三夜」はいづれも二十八年に出た。

飜譯小說

飜譯小說は明治文壇の混沌時代に夙くも出たことは前述の通りであるが、新文學の發生後は大いに進んで、二葉亭はロシア文學を、森鷗外はドイツ文學を、森田思軒は英佛文學をそれ〳〵飜譯して、我が文壇に刺激を與へ、新人の崛起を促した。特に鷗外

「美奈和集」は明治二十五年に出た。

觀念小說と深刻小說

「うらおもて」「夜行巡査」は共に二十八年に出た。

鏡花は後には「高野聖」（三十三年）の如き幻怪趣味の作を多く書くやうになつた。

の飜譯及び創作を集めた「美奈和集」は文壇に寄與するところが多かつた。

硯友社の文學の流を汲む川上眉山・泉鏡花等は、その後、小說によつて、人生に對する或觀念を具體化し、これを讀者の頭腦に浸潤せしめようとする試みを創めたが、かくの如き小說を世に觀念小說と呼んでゐる。たとへば個人的の罪惡も、その根本を探れば、畢竟社會が然らしめたのであつて、罪は個人になく、むしろ社會にあると說く如きで、眉山の「うらおもて」、鏡花の「夜行巡査」等はその代表作といつてよい。そしてこの觀念小說のもつ

美奈和集

家庭小說

自然主義の文學

悲慘味を一層深刻にしたものが廣津柳浪の深刻小說であるが、しかし深刻小說はたゞに悲慘味が多いばかりでなく、觀念小說に比すれば遙かに寫實性に富み、心理描寫の精細なことは、當時他に類のないものであつた。

さて、日清戰役も終つて三十年代に入ると、文學と一般社會とが接近しようとする傾向が急に著しくなつて來たが、この風潮に應じてあらはれたのが、いはゆる家庭小說で、德富蘆花の「不如歸」「思ひ出の記」「黑潮」、菊池幽芳の「己が罪」等が三十一二年頃から續續とあらはれ、いづれも洛陽の紙價を高めた。就中「不如歸」は、日清戰役を背景として或上流家庭の悲劇を描き、最も世に歡迎されたものである。

けれどもこれ等の家庭小說は、家庭道德をたゞ感傷的に强調したものに過ぎなかつたが、三十三年頃に至つて小杉天外があ

「春」も「生」も共に四十一年に出た。

らはれ、フランスの小説に則つて、あるがまゝの人生の相を、少しも作者の私意を加へずに再現すべきことを提唱し、始めて自然主義的寫實性をもつ小説を發表した。しかし天外の作には、なほ作者の私意が拔けきつてゐなかつたが、日露戰役を契機として文壇は大きな飛躍を遂げ、島崎藤村・田山花袋等が出で、自然主義文學の全盛時代を現在せしめた。藤村の「春」、花袋の「生」の如きは實に自然主義的寫實性に徹した作といふことが出來よう。尤も國木田獨歩の如きは、夙く三十四五年の頃に「牛肉と馬鈴薯」「運命論者」等、自然主義的な觀照をほしいまゝにした作を書いたが、これ等は當時にあつては默殺されてしまつた形で、その眞價が認められるやうになつたのは、やはり藤村・花袋等が文壇に出てから後のことであつた。そしてこの自然主義は、單に文學界のみならず、社會の各方面に非常な影響を及ぼしたが、この派の作家たち

餘裕派と耽美派

は、いかなる人生の瑣事と雖も、これを如實に再現するならば、それによつておのづから人生の意義を髣髴せしめることが出來るといふ信條の下に、自己の體驗の赤裸々な暴露をも敢へてし、ひたすら人生の眞を描かうと努めたのであつた。前に擧げた外に、この派の作家としては、なほ德田秋聲・正宗白鳥・岩野泡鳴等が擧げられる。

自然主義はかくの如く文壇を席卷したのであるが、この時代に於てもまた、これと全然傾向を異にした作を出して、別箇の讀書社會から大いに迎へられてゐた作家があつた。卽ち夏目漱石や永井荷風・谷崎潤一郎等がそれである。漱石は三十八年に「吾輩ハ猫デアル」を書いて以來、自然主義の文學が、あまりに重苦しい現實に執し過ぎ、あまりに餘裕がなさ過ぎるのに對し、みづから則天去私の境地に住して、餘裕のある文學を續々と發表し、現實

「坊つちやん」「草枕」は三十九年、「虞美人草」は四十年、「門」は四十三年、「明暗」は大正五年に出たが、作者の死によつて未完のまゝ残された。

なほ四十三年に漱石の紹介によつて發表された長塚節の小説「土」は農民文學の先驅であつた。

から一歩も出ることのない自然主義の文學に冷笑を送つた。彼のさういふ境地を最も鮮かに示してゐるのは「草枕」であるが、「坊つちやん」「虞美人草」にしても、「門」「明暗」等にしても、皆どこかに餘裕があり、そしてそこに一縷の光明を見ることが出來る。また永井荷風は初は自然主義的な作風を持してゐたが、四十二三年の頃から專ら、耽美的な色彩の濃厚な作を出すやうになり、谷崎潤一郎も同じ頃、官能の美を生々しく描寫した多くの作を出して、耽美派の名を得た。

吾輩ハ猫デアル

夕暮の机に向ふ。障子も襖もあけ放つ。宿の人は多くもあらぬ上に、家は割合に廣い。余が住む部屋は、多くもあらぬ人の、人らしくふるまふ境を幾曲りの廊下に隔てたれば、物の音さへ思索の煩にはならぬ。今日は一入靜かである。主人も、娘も、下女も、下男も知らぬ間に我を殘して、立退いたかと思はれる。立退いたとすれば、たゞの所へ立退きはせぬ。霞の國か、雲の國かであらう。或は雲と水が自然に近づいて、舵をとるさへ懶き海の上を、いつ流れたとも心づかぬ間に、白い帆が雲とも水とも見分け難き境に漂ひ來て、はては帆みづからが、いづこに己れを雲と水より差別すべきかを苦しむあたりへ――そんな遙かな所へ立退いたと思はれる。それでなければ、卒然と春の中に消え失せて、これまでの四大が、今頃は目に見えぬ靈氣となつて、廣い天地の間に、顯微鏡の力を藉るとも、些の名殘をとゞめぬやうになつたのであらう。或は雲雀に化して、菜の花の黄を鳴き盡したる後、夕暮深き紫のたなびくほとりへ行つたかも知れぬ。または永き日をかつ長くする虻のつとめを果したる後、蘚に凝る甘き露を吸ひ損ねて、落椿の下に

伏せられながら、世を香ばしく眠つてゐるかも知れぬ。とにかく靜かなものだ。

（草枕）

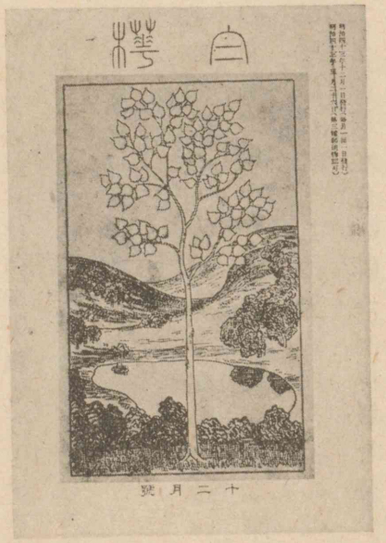
白樺派

「白樺」は四十三年四月に創刊された。その同人はすべて學習院出身者である。

餘裕派や耽美派の文學が、一部の讀書社會に迎へられてゐたとはいへ、自然主義の根强い勢力はやはり文壇を支配してゐたのであるが、時の推移はそれをもいつしか衰運に向はせずにはおかなかつた。しかも自然主義の作家たちは、あるがまゝの人生を描かうとして、醜惡・陰慘・倦怠といふやうな厭ふべきもののみを見出しこれを飽くことなく描きつゞけたのであるから、やがて彼等自身も行き詰つて來た。そしてこの自然主義の衰運に乘じて擡頭し、明治の末から大正の初にかけて文壇の中心勢力となつたものは、雜誌「白樺」に據つた人道主義の一派である。この派の作家たちには武者小路實篤・志賀直哉・有島武郎・長與善郎・里見弴等があり彼等は自然主義の作家たちが、人生の暗黑面を暴露

「お目出たき人」は四十三年、「世間知らず」は四十五年、「宣言」は大正四年、「盲目の川」は同三年に出た。

することのみに終つたのに對し、積極的に人生から善と美と光明とを求め、これを作の上にあらはさうとしたのであつた。故に彼等は、生きがひのある人生を肯定し、輝かしい理想を前途に描いて、これに邁進したが、その代表作には、武者小路實篤の「お目出たき人」「世間知らず」等をはじめ、有島武郎の「宣言」、長與善郎の「盲目の川」等がある。



白樺

一體自分は廣義の教育家にならうと思つてゐるのだ。さうして破壞された殿堂のかはりに、新しき殿堂をたてたく思つてゐる。自分は現代の人の頭で罵倒し、心臟でのぞんでゐるものを搜し出して、人々に敎へたいと思つてゐる。自

分はこの重荷のために絶えず心を勞してゐる。しかし自分は弱い人間である。さうして才能のない人間である。天にあこがれながら、賴るものなく地面をのたくつてゐる蔦のやうな人間である。賴れるものにぶつかれば、何でも賴らうとする人間である。何か今に賴るものを得るだらうと思つてゐる。この點で自分は樂天家である。

（お目出たき人）

新現實主義

白樺派の人道主義の文學に續いて起つたものは、新現實主義の文學であつた。この主義による作家は、いはば自然主義の寫實的手法に加へるに、嚴肅な人生の批判、或は人間性の省察をもつてし、各個性色の鮮かな作風を持してゐたのであつて、芥川龍之介・菊池寛・久米正雄・佐藤春夫等、また白樺派から出た志賀直哉・里見弴等が主なものであつた。實に大正時代の中期以後は、これ等の作家の目覺しく活躍した時代で、作もおびたゞしい數に上つ

「鼻」は五年、「枯野抄」「忠直卿行狀記」は七年、「和解」は六年、「暗夜行路」は十年に出た。

「内供」は内供奉僧の略で、卽ち内道場（宮中で佛事を修する所）に供奉した僧をいふ。

「沙彌」は剃髮受戒したばかりの僧をいふ。

たが、就中、芥川龍之介の「鼻」「枯野抄」、菊池寛の「忠直卿行狀記」、佐藤春夫の「田園の憂鬱」、志賀直哉の「和解」「暗夜行路」等は傑作の名が高かつた。

禪智内供の鼻といへば、池の尾で知らない者はない。長さは五六寸あつて、上唇の上から顎の下までさがつてゐる。形は元も先も同じやうに太い。いはば、細長い腸詰のやうなものが、ぶらりと顏の眞中からぶらさがつてゐるのである。五十歲を越えた内供は、沙彌の昔から内道場供奉の職に陞つた今日まで、内心では始終この鼻を苦に病んで來た。勿論表面では、今でもさほど氣にならないやうな顏をしてすましてゐる。これは專念に當來の淨土を渴仰すべき僧侶の身で、鼻の心配をするのが惡いと思つたからばかりではない。それよりむしろ、自分で鼻を氣にしてゐるといふことを、人に知られるのが嫌だつたからである。内供は日常の談話の中に、鼻といふ語が出て來るのを何よりも惧れてゐた。内供が鼻を持てあました理由は二つある。――一つは

實際的に、鼻の長いのが不便だつたからである。第一、飯を食ふ時にも獨りでは食へない。獨りで食へば、鼻の先が鋺の中の飯へとゞいてしまふ。そこで內供は弟子の一人を膳の向ふへ坐らせて、飯を食ふ間中廣さ一寸、長さ二尺ばかりの板で、鼻を持ち上げてゐてもらふことにした。しかしかうして飯を食ふといふことは、持ち上げてゐる弟子にとつても、持ち上げられてゐる內供にとつても、決して容易なことではない。一度この弟子の代りをした中童子が、嚏をした拍子に手がふるへて、鼻を粥の中へ落した話は、當時京都まで喧傳された。——けれどもこれは內供にとつて、決して鼻を苦に病んだ主な理由ではない。內供は實にこの鼻によつて傷つけられる自尊心のために苦しんだのである

（鼻）

活歷と史劇

三　戲　曲

明治文學の混沌時代に於ては、戲曲もいまだ新しい進展を見せず、江戶時代の傳統を逐うた古河默阿彌の歌舞伎劇等が一般に行はれてゐたのであるが、この間にあつて、九代目市川團十郎は、夙く明治七年頃から荒唐無稽な歌舞伎劇を排し、古典的考證を根據にして、史實そのまゝを舞臺に活現しようとする試みを始めた。活歷と呼ばれるものが卽ちこれであつて、當時の學者・高官等の支持を受け、世に大いに行はれた。そしてこの活歷に刺激されて、寫實的な史劇を書き始めたのが依田學海・福地櫻痴等であるが、次いで二十六年に坪內逍遙が、史劇は要するに歷史的事實をかりて、人生の眞相を表現すべきものであることを高唱し、みづから「桐一葉」「沓手鳥孤城落月」等を書いて、これを實際的に示すに至つて、始めて戲曲の革新がその緖に就いたといふことが出來る。

また逍遙は既に十六年の頃にシェイクスピアの「ジュリアス・

活歷の名は、假名垣魯文がつけたのであつて、活きた歷史の意に外ならない。學海の代表作は「吉野拾遺」「名歌譽」「二十年」「櫻痴の代表作は「春日局」「二十四年」である。なほ櫻痴の流を汲む戲曲家に岡本綺堂がある。「桐一葉」は二十七年、「沓手鳥孤城落月」は三十年に出た。

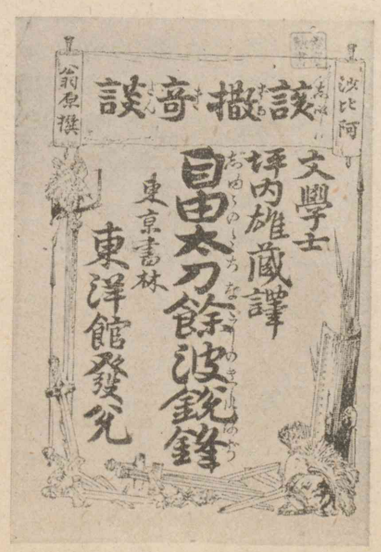
飜譯劇と新派劇

シーザー」を譯した「自由太刀餘波鋭鋒」を出してゐるが、森鷗外も二十年代になつてレッシングの「エミリア・ガロティ」を譯した「折薔薇」をはじめ、歐洲の戲曲を多く飜譯して、劇界を刺激することに努め、三十年代に入ると、「不如歸」や「金色夜叉」等の、いはゆる新派劇と共に飜譯劇は頻々と上演されたのであつた。

樂劇と近代劇

文藝協會は大正二年に解散したが、その前後に島村抱月等は別に藝術座を組織した。

國劇刷新の必要を高調し、樂劇を主唱したのもやはり逍遙で、彼は三十七年に「新曲浦島」を、三十八年には「新曲赫映姫」を公にしたが、三十九年に至つては、その實際運動として文藝協會を組織した。しかも一方に於ては、島村抱月・中村吉藏等がイ



自由太刀餘波鋭鋒

近代劇は社會の事相を取扱つてゐるので社會劇ともいふ。

その後の戲曲界

プセン等の近代劇の飜譯に從ひ、また小山内薫等は市川左團次と提携して自由劇場を起し、近代劇の上演を試みるなど、自然主義運動は劇界にも及んだのであつた。

築地小劇場は大正十三年に出來た。

淺香社

近代劇が我が國に移植されて後、戲曲界は急に活氣を呈して來て、眞山青果・長田秀雄・武者小路實篤・菊池寛・山本有三等、俊秀な作家が競つて戲曲の創作に從事し、その分野も、映畫劇・兒童劇・舞踊・ページェント・ラヂオドラマにまで擴るに至つた。なほ新劇團體では、小山内薫等の築地小劇場が、最も劇界に盡すところが多かつた。

四　短歌と俳句

明治時代の新しい短歌は、まづ落合直文の短歌革新から始まる。その以前は、香川景樹の桂園派の流を汲む高崎正風・税所敦子

竹柏會
後に竹柏會の機關雜誌となつた「心の花」は三十一年に出た。

根岸短歌會

等の堂上派の歌人が歌壇を代表してゐたのであるが、直文は二十六年に淺香社を組織し、その門下の與謝野鐵幹・鹽井雨江・久保猪之吉・服部躬治・金子薫園・尾上柴舟等を指導して、短歌の革新に當らしめ、明治の歌壇に始めて清新な調をもたらした。

霜やけのちひさき手して蜜柑むく我が子しのばゆ風の寒きに
（落合直文）

落合直文よりやゝおくれて、新舊兩派の歌を折衷して獨得の歌風を創めたのは佐佐木信綱であつた。そして信綱の主宰した竹柏會からは大塚楠緒子・川田順・石榑千亦・木下利玄等が出た。

幼きはをさなきどちのものがたり葡萄のかげに月かたぶきぬ
（佐佐木信綱）

正岡子規は二十年代には專ら俳句の革新に當つてゐたが、三十年代に入つては歌界の革新にも當り、眞摯質朴な萬葉調を推

新詩社

窪田空穗も初め「明星」に歌を載せてゐた。啄木の歌は「何となく明日はよき事あるごとく思ふ心を叱りて眠る」といふ如きである。

稱し、その門下である香取秀眞・岡麓等によつて、三十一年に子規を中心とする根岸短歌會が創立された。なほ子規の短歌方面の門下には伊藤左千夫・蕨眞・長塚節等がゐた。

瓶にさす藤の花ぶさみじかければ疊の上にとゞかざりけり
（正岡子規）

落合直文の淺香社から出た與謝野鐵幹はみづから男性の歌と稱する豪健な歌を詠んで、歌界革新の急先鋒となつてゐたが、三十三年には、その主宰する新詩社から機關雜誌「明星」を出し、その妻晶子もまた傳統を破つた情熱的な歌風をもつて、歌壇の驚異の的となつた。新詩社の同人としては高村光太郎・平野萬里・吉井勇・北原白秋・茅野蕭々・茅野雅子・山川登美子・石川啄木等があつたが、このうち啄木は後に、金子薫園の門から出た土岐哀果と共に、切實な生活苦を詠じて、特色ある歌風をなした。

野に生ふる草にものをいはせばや涙もあらん歌もあるらん
（與謝野鐵幹）

清水へ祇園をよぎる櫻月夜こよひ逢ふ人みなうつくしき
（與謝野晶子）

尾上柴舟の一派　いかづち會は三十一年に組織された。

同じく淺香社から出た尾上柴舟は、一時、久保猪之吉・服部躬治等と、いかづち會を組織してゐたこともあつたが、新詩社の全盛時代になつても作歌を廢せず、圓熟した穩健な歌風を持して獨自の道を進み、その門からは若山牧水・前田夕暮等を出した。

つけすてし野火のけむりのあか〳〵と見えゆく頃ぞ山はかなしき
（尾上柴舟）

アララギ派　「馬酔木」は三十六年、「アカネ」は四十一年に出た。

根岸短歌會は、子規の歿後、始めて機關雜誌「馬酔木」を出し、次いで「アカネ」を出したが、新詩社の勢力に壓せられて、歌壇からは全く默殺されてゐた。然るに四十一年、蕨眞の手により「アカネ」とは別箇に「アララギ」が出され、伊藤左千夫を中心として、齋藤茂吉・古泉千樫等が目覺しく活躍するやうになつて、その歌風が漸く世人から注目された。左千夫は大正二年に歿したが、その後は島木赤彥が中心となつて活動を續けたので、アララギ派の勢力は年年に增大し、遂にその歌風が天下を風靡するに至つた。この派の歌人としては、以上擧げた外に中村憲吉・土屋文明・今井邦子等がゐる。

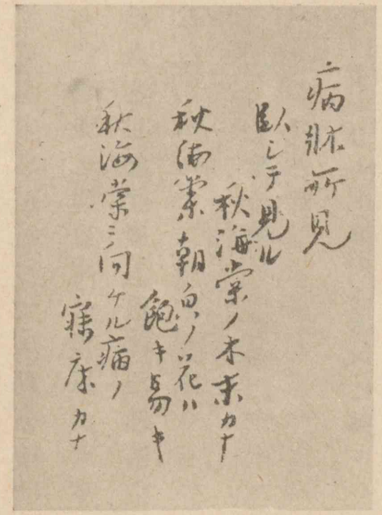
日本派とホトトギス派

ゆづり葉の葉ひろ青葉に雨そゝぎ榮ゆるみどり庭に足らへり
（伊藤左千夫）

ある日わが庭のくるみに囀りし小雀來らず亙えかへりつゝ
（島木赤彥）

次に明治時代の俳句は、正岡子規の革新運動から始まる。その以前は、歌界が堂上歌人によつて支配されてゐた如く、俳句界も

また江戸時代の傳統に立つ宗匠たちによつて支配され、いはゆる月並な句が横行してゐたのであるが、子規は二十五六年の交、新聞「日本」の紙上に矢つぎ早に俳話・俳論を發表し、月並調の打破に努める一方、蕪村の客觀的・繪畫的な傾向を推稱し、俳句の上に寫生道を樹立した。かくして子規の許には、内藤鳴雪・高濱虚子・河東碧梧桐等、日本派の名をもつて呼ばれる多くの同志が集まつたが、三十年に伊豫の松山に於て柳原極堂の創刊した俳誌「ホトトギス」が、三十一年に東京に移され、虚子の手によつて續刊されるやうになつてからは、俳句界は殆ど子規に統一されたといつても過



正岡子規筆蹟

筑波會と秋聲會

言ではなからう。それから數年ならずして子規は歿したけれども、その後も「ホトトギス」は虚子によつて守りつゞけられ、村上鬼城・飯田蛇笏・原石鼎等、多くのすぐれた俳人を出した。「ホトトギス」に據つたこれ等の俳人を、世にホトトギス派の俳人といつてゐる。

春雨や傘さして見る繪草紙屋　子規
雷鳴るや松明らかに濱廂　虚子

日本派が漸く盛運に向はうとする時に當り、二十七年には、大野洒竹・佐々醒雪・笹川臨風・沼波瓊音等によつて筑波會が組織され、二十八年には、角田竹冷・尾崎紅葉・岡野知十・巖谷小波等によつて秋聲會が組織された。このうち前者は、新派俳句勃興の機運に促されて起つたものであるが、後者は單に日本派に對抗して起つたといふに過ぎず、後には、一時日本派と合流してゐた伊藤松

「秋の聲」は二十九年、「卯杖」は三十六年に出た。

宇や、筑波會の大野酒竹等も馳せ加はり、別に統一された主義・主張といふものはもたなかつた。秋聲會の機關雜誌には、初め「秋の聲」、後に「卯杖」がある。

立秋の大鐘つくや痩法師　酒竹
下谷一番伊達の薄着の夜寒かな　醒雪
松遠み夕日春く沖膾　竹冷
草市の一夜露けき都かな　松宇

新傾向句

「層雲」は明治四十四年に出た。

前にも述べた如く、虚子はとにかく子規の繼承者として、「ホトトギス」を守りつゞけて今日に至つてゐるが、河東碧梧桐は、明治の末期になつて、いはゆる新傾向句を提唱し、十七字詩形・季題といふ俳句の二大約束を破壞し、完全に「ホトトギス」と絶緣した。また荻原井泉水も同じ頃、俳誌「層雲」を出して新傾向句を提唱し、その後多くの同志を得た。

新體詩の發生

雄鷄鬪ふとさかの榮えを黍の下葉に　碧梧桐
更けて鐘にひた寄る月ありけり　井泉水

五　詩

明治時代の新體詩は、十五年に「新體詩抄」が出て、その口火が切られた。「新體詩抄」は外山正一・矢田部良吉・井上哲次郎の合著で、テニスン・ロングフェロー等の譯詩も收められてゐるが、また自作の詩もあり、形式はすべて七五調をなしてゐる。しかしそれは形式に新味はあつたが、想の表現の上では、いまだ粗笨を免れなかつた。

グレーの「墳上感懷の詩」の一節。

山々かすみいりあひの　鐘はなりつゝ野の牛は
徐に歩み歸りゆく　耕す人もうちつかれ
やうやく去りて余ひとり　たそがれ時に殘りけり　（新體詩抄）

新體詩の完成

「若菜集」は三十年、「一葉舟」「夏草」は三十一年、「落梅集」は三十四年に出た。

十九年に至つて、山田美妙齋は尾崎紅葉・丸岡九華と共に「新體詞選」を編し、二十一年には落合直文が、井上哲次郎の漢詩を譯した「孝女白菊の歌」を發表して、形式も次第に齊整され、想もまた洗煉されて來た。次いで二十二年に森鷗外等の譯詩「於母影」が出ると、新體詩の内容は大いに進展を見たが、二十六年から北村透谷が雜誌「文學界」に據つて、人生のための藝術を力强く主張し、情熱の溢れる如き詩を作り、透谷の歿後、その遺業を繼いで島崎藤村が詩壇に立つに及んで、始めて新體詩は内容・形式共に完成された。藤村には「若菜集」「一葉舟」「夏草」「落梅集」

若菜集

「天地有情」は三十二年、「曉鐘」は三十四年に出た。

「小諸なる古城のほとり」の一節。

象徴詩

等の詩集があり、そのいづれにも青春の若々しい感情が漲り、優美な聲調に富んでゐる。また藤村と同じ時代に詩壇に活躍した詩人に土井晚翠がある。晚翠は藤村が抒情詩人であるのに對し、敍事詩人としての傾向が著しく、「天地有情」「曉鐘」等の詩集に見えるその詩の格調は、雄渾を極めてゐる。この外にも、鹽井雨江・武島羽衣・大町桂月・與謝野鐵幹等の諸詩人が、同じ時代にあらはれた。

小諸なる古城のほとり　雲白く遊子悲しむ
綠なす蘗蔓は萌えず　若草も藉くによしなし
しろがねの衾の岡邊　日に溶けて淡雪流る
（落梅集）

藤村・晚翠の後を承けて詩壇に並び立つたのは、薄田泣菫と蒲原有明とである。泣菫は複雜な情緒の世界を歌つて、古典的な趣を見せたが、やゝおくれて詩壇に出た有明は、情緒の世界を一層深く掘り下げて、幽玄微妙な象徴詩を始めて我が詩壇にもたら

「暮笛集」は三十二年、「ゆく春」は三十四年、「白羊宮」は三十九年、「草わかば」は三十五年、「春鳥集」は三十八年に出た。

「家根の草」の一節。

自由詩

した。そしてこれより象徴詩が詩界の中心となつたのであつて、泣菫の詩も、その後期のものは象徴詩風の分子が少くない。詩集には、泣菫に「暮笛集」「ゆく春」「白羊宮」等があり、有明に「草わかば」「春鳥集」等がある。なほ三十八年に出た上田敏の譯詩集「海潮音」も象徴詩の隆盛を致すに與つて力が多かつた。

家根の草ひでりに乾き　項垂れもだし萎えて
燒けさかる甍の波に　つゆもなき葉をしゆるがす

家根の草かくて乾くか　夏はこれなかばのみやこ——
かの瓦照りてたはぶれ　この甍燃えてほゝゑむ　（春鳥集）

しかし時勢の推移すると共に、やがてこの隆盛を極めた定型詩も衰退し、詩界に一期を劃する時が來た。即ち四十年に自由詩運動が起り、川路柳虹が、河井酔茗の主宰する雜誌「詩人」に始めて

混沌時代の評論界

定型を破つた自由詩「塵溜」を發表して以來、相馬御風・三木露風・北原白秋等が相次いでこれを試み、遂に自由詩は詩界を風靡するに至つた。かくして明治・大正の交には柳澤健・西條八十・野口米次郎・佐藤惣之助・室生犀星・野口雨情等の諸詩人があらはれ、童謡から民謡の世界をも開拓して、優に國民詩形としての完成を見せたのである。

六　評　論

明治文化の混沌時代にあつて、歐米の實利主義の思想を唱道したのは福澤諭吉であり、精神主義・理想主義の思想を唱道したのは中村正直であつた。前者は明治以前に既に慶應義塾を開いた教育家で、その著には「西洋事情」「學問ノスヽメ」等があり後者もまた明治初年に同人社を設立して、英語を教授した教育界の先

「西國立志編」はスマイルス、「自由之理」はミルの原著。

二十年代の評論界

「國民之友」は二十年、「國民新聞」は二十三年に出た。

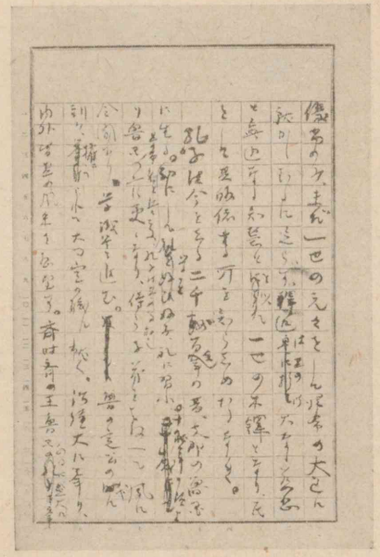
「日本人」は二十一年、「日本」は二十二年に出た。

覺で、その譯著に「西國立志編」「自由之理」等がある。更に同時代の新聞界を見ると、「江湖新聞」の福地櫻痴、「朝野新聞」の成島柳北、「曙新聞」の末廣鐵腸等が、各論陣を張つて相對してゐた。

次いで二十年代に入つては、德富蘇峰・竹越三叉・山路愛山等が雜誌「國民之友」及び「國民新聞」に據つて、民衆的歐化主義を唱へる一方、三宅雪嶺・志賀矧川・井上圓了・福本日南・陸羯南等が雜誌「日本人」及び新聞「日本」に據つて、國粹保存主義を唱へるなど、評論界は活氣が漲つてゐた。また文學評論は、十八年に出た坪內逍遙の「小說神髓」を最初とすべきであらうが、二十年代には逍遙が引續いて文學評論の筆を執つた外、森鷗外のドイツ近代の美學を根據とする文學・美術論、大西操山・上田敏の詩歌論、正岡子規の俳句論、與謝野鐵幹の短歌論、北村透谷等「文學界」同人の理想主義的な人生論等が出で、この方面もなか〳〵賑やかであつた。

自然主義時代の評論界

日清戰役後、三十年代の劈頭に當つて高山樗牛は日本主義を提唱したが、その後、彼はニイチェの說を祖述して美的生活論を唱へ、自然主義文學の勃興を促した。やがて日露戰役が起り、戰後、自然主義は文學界を風靡するに至つたのであるが、この當時にあつて混亂紛糾を極めてゐた自然主義に理論的體系を與へたのは島村抱月・長谷川天溪・岩野泡鳴等であり、その傳播に努めたのは片上天弦・相馬御風・中村星湖等であつた。しかしその一面には、森鷗外・後藤宙外等の如く自然主義を非難する立場に立つ者もあり、生田長江等の如く折衷主義を持する者もあつ



高山樗牛原稿

「歌よみに與ふる書」は三十一年、「病間錄」は三十八年に出た。

その後の評論界

た。なほ三十年代の初期に正岡子規が「歌よみに與ふる書」を書いて、萬葉調を推稱したことと、後期に綱島梁川が「病間錄」等を發表して、宗教的信念を說いたこととは注目に値する。

その後、白樺派の擡頭から新現實主義の文學に至るまでの評論界に活躍した人々には、武者小路實篤・阿部次郎・和辻哲郎・吉江喬松・厨川白村・正宗白鳥等があつた。

第六章　現代

昭和時代卽ち現代の文學は、あらゆる分野にわたつて、あらゆる新しい活動が試みられてをり、一概にいふことは出來ないが、小說界はほゞ純粹藝術派と大衆文學派とに二分されてゐる。そしてこのうち藝術的に高く評價されるべきは、いふまでもなく純粹藝術派の文學であるが、しかし大がかりな規模と複雜な機構とに興味の中心を置いてゐる大衆文學は、時代物に、現代物に、それ〳〵優秀な作家が輩出したので、その勢力が殆ど全小說界を壓し、その藝術性に於ても、現在では純粹藝術派の文學に肉薄するものが少くない。また戲曲界・短歌界・俳句界・評論界の方面も皆一樣に進展の跡が著しく、最も傳統を重んずる短歌の如きも、現在ではその定型が破られ、生き〳〵とした現實感を端的直截

に短歌性の中に具象化しようとする運動さへ起つてゐる。

要するに昭和の文學は、既に第一期の黎明期を終へて、次の飛躍に移らうとしてゐるのであるが、ここに注目すべきは、かの滿洲事變を契機として、日本的なものに對する渇仰が、文學界にも非常な勢をもつて興つてゐることである卽ち滿洲事變後、我が國は國際的に獨自の活路を開拓することとなり、それにつれて國家的・國民的の自覺が强調され、我が國體觀念を明徵にし、すべての物事を日本的に正しく認識し、建設するといふことが最も重要視されるやうになつたから、今や文學界に於ても、劃期的な一大革新が行はれるべき機運がもたらされようとしてゐるのである。

國文學史 新制版 終

國文學史年表

*印を附したものは成立年代の不明なもの。

時代	御代數	天皇	年號	紀元	作者（年歟）	歌謠	神話・傳說	祝詞・宣命	その他	備考
大和時代	12	景行	四三	七七三	日本武尊	（記紀の歌謠）	（神話）（傳說）	（祝詞）		漢學傳來（九四五） 佛教傳來（一三二） 憲法十七條（一六四） 大寶律令（一七一） 平城遷都（一三〇）
	39	弘文	一	一三三	弘文天皇					
	40	天武	一四	一三四六	大津皇子					
	41	持統	二	一三四八	額田王？					
	42	文武	二	一三五八	高市黑人？					
	43	元明	和銅 三	一三七〇	柿本人麻呂？		古事記 播磨風土記* 日本書紀			
	44	元正	靈龜 元	一三七五			常陸風土記*			
			養老 四	一三八〇						
			五	一三八一						
	45	聖武	神龜 五	一三八五	太安萬侶			（宣命）		
			七	一三八七	大伴坂上郎女					
			天平 三	一三九一	大伴旅人					
			四	一三九二	高橋蟲麻呂？					
			五	一三九五	山上憶良？		出雲風土記			
			七	一三九七	舍人親王					
			九	一三九九	藤原宇合					
	46	孝謙	天平勝寶 一九	一四〇七	山部赤人？					
			二	一四〇	石上乙麻呂					懷風藻
			三	一四一						
	47	淳仁	天平寶字 三	一四一九		萬葉集*				國分寺設置（一四〇一）

時代	御代數 天皇	年號	紀元	作者（年歿）	歌謠	物語・說話	日記・隨筆	その他	備考
平安時代	50 桓武	延曆 四	一四五五	大伴家持	（神樂歌）				平安奠都（一四五四）
		一六	一四五七						
	52 嵯峨	弘仁 五	一四七四		（催馬樂）	竹取物語	續日本紀	凌雲集	
		九	一四七八					文華秀麗集	
	53 淳和	天長 四	一四八二				日本靈異記*	經國集	勸學院設置（一四八一）
		七	一四八七						
	54 仁明	承和 二	一四九〇	岑守・安世				性靈集*	
		七	一四九五	空海			日本後紀		
	55 文德	仁壽 二	一五〇〇						
	56 清和	貞觀 一一	一五一一	小野篁			續日本後紀		
		一一	一五三九	都良香					
	57 陽成	元慶 三	一五四〇	在原業平			文德實錄		
		四	一五四〇	遍昭					
	59 宇多	寬平 二	一五五〇						
	60 醍醐	延喜 元	一五六一					三代實錄	
		三	一五六三	菅原道眞					
		四	一五六四						
		一一	一五六五	紀友則		伊勢物語*			
		五	一五八一	凡河內躬恆	古今集（朗詠）				
	61 朱雀	承平 五	一五九五				土佐日記		
		五	一五九五	壬生忠岑					
		天慶 二	一五九九						天慶の亂平定（一六〇一）
		九	一六〇六	紀貫之					
	62 村上	天曆 五	一六一一		後撰集				
		一〇	一六一六			大和物語*			
		天德 元	一六一七	大江朝綱					天德の歌合（一六二〇）
	64 圓融	永觀 元	一六四三	源順		宇津保物語	蜻蛉日記		

時代	御代數 天皇	年號	紀元	作者（年歿）	歌謠	物語・說話	日記・隨筆	その他	備考
平安時代	66 一條	寬和 二	一四八六	曾禰好忠					
		正曆 元	一四九〇	清原元輔					
		二	一四九一	大中臣能宣	（今樣）				
		長德 三	一四九七	慶滋保胤					
		長保 三	一五〇一		拾遺集*				
		寬弘 頃							
	67 三條	長和 元	一六一二						
		五	一六一六	大江匡衡					
	68 後一條	長元 頃		紫式部	和漢朗詠集				
				清少納言					
	69 後朱雀	長曆 頃							
		長久 二	一七〇一	藤原公任					
	70 後冷泉	永承 頃		能因					
		康平 頃		和泉式部					
				赤染衞門					
	72 白河	承曆 元	一七一七	源隆國		源氏物語	落窪物語		
	73 堀河	應德 三	一七八六						
		承德 元	一七八七	源經信	後拾遺集				
	74 鳥羽	天永 二	一七一一	大江匡房					
		天治 元	一七八四						
	75 崇德	大治 四	一七八九	源俊賴	金葉集	榮華物語			
		康治 元	一八〇二	藤原基俊		大鏡			
	76 近衞	仁平 元	一八一一		詞花集				
					梁塵祕抄				
	79 六條	仁安 頃				堤中納言物語			
						狹衣物語			
	80 高倉	嘉應 二	一八三〇			濱松中納言物語			
						今昔物語			
	82 後鳥羽	文治 四	一八四八		千載集		枕草子	扶桑集	
							和泉式部日記		
							紫式部日記		
		建久 元	一八五〇	西行	山家集*	今鏡			
							更級日記		
							讃岐典侍日記		
								本朝文粹	道長攝政となる（一六七六）
								新撰髓腦	
								（田樂）	前九年の役平定（一七二）
									記錄所設置（一七二九）
									院政の始（一七四六）
									後三年の役平定（一七四七）
									保元の亂（一八一六）
									平治の亂（一八一九）
									平家亡ぶ（一八四五）

時代	御代數	天皇	年號	紀元	作者（年歟）	歌謠	物語・說話	日記・隨筆	その他	備考
鎌倉時代	83	土御門	建仁 元	一八六一	式子內親王					
			二	一八六二	寂蓮					
			元久 元	一八六四	藤原俊成					
			二	一八六五						
	84	順德	建永 元	一八六六	藤原良經	新古今集			（猿樂）	鎌倉幕府成立（一八五二）
			建曆 二	一八七二						
			建保 元	一八七三	鴨長明					
			四	一八七六	藤原有家					
			承久 元	一八七九	源實朝	金槐集				
	86	後堀河	嘉祿 元	一八八〇					愚管抄	承久の變（一八八一）
			二	一八八五	慈鎭		古事談＊			
			安貞 元	一八八七	源通具		住吉物語＊			
			文曆 元	一八九四			發心集＊			
	87	四條	嘉禎 三	一八九七	藤原家隆	新勅撰集				
			仁治 二	一九〇一	藤原定家					
			建長 三	一九一二		續後撰集	宇治拾遺物語＊			貞永式目制定（一八九二）
			四	一九一三			平家物語＊			
							平治物語＊			
							保元物語＊			
	89	後深草				（宴曲）	十訓抄	東關紀行		
							古今著聞集			
							源平盛衰記＊			文永の役（一九二四）
	90	龜山	文永 三	一九二六		續古今集				
			六	一九一四						
	91	後宇多	弘安 元	一九二八		續拾遺集	沙石集			弘安の役（一九四一）
			六	一九四三	阿佛尼			十六夜日記＊		
	94	後二條	嘉元 元	一九六三		新後撰集				
			延慶 三	一九七〇		夫木抄				
	95	花園	正和 元	一九七二	無住	玉葉集				
	96	後醍醐	元應 二	一九八〇		續千載集				元弘の變（一九九一）
			嘉曆 元	一九八六		續後拾遺集				
			元德 頃							
			建武 頃							

時代	御代數	天皇	年號	紀元	作者（年歟）	歌謠	物語・說話	日記・隨筆	その他	備考
鎌倉時代	97	後村上	延元 四	一九九九	虎關	風雅集	神皇正統記			建武中興（一九九四）
			正平 元	二〇〇六	吉田兼好					
			五	二〇一〇	夢窓					
			六	二〇一一	北畠親房					
			九	二〇一四	淨辨	菟玖波集	曾我物語＊			
			一一	二〇一六	救濟？	新千載集				
			一四	二〇一九		新拾遺集				
			一九	二〇二四	慶雲？		太平記＊			
			二二	二〇二七	頓阿		增鏡＊			
	98	長慶	文中 元	二〇三三	小島法師	新葉集	義經記＊		（五山文學）	
			三	二〇三四		新後拾遺集				
	99	後龜山	弘和 元	二〇四一						
			三	二〇四三	觀阿彌					
			元中 元	二〇四四	宗良親王					
			二	二〇四五	義堂・二條良基					
	102	後花園	永享 一一	二〇四八		新續古今集	（御伽草子）			
			嘉吉 三	二〇九九	世阿彌					
	103	後土御門	文明 一二	二〇一三	桃井直詮					
			長享 二	二〇四〇		水無瀨三吟百韻				
			明應 四	二〇四八		新撰菟玖波集				
	104	後柏原	文龜 二	二〇五五	宗祇					
			永正 一一	二〇七四		犬筑波集				
			一五	二〇七八		閑吟集				
	105	後奈良	大永 七	二〇八七	肖柏				（謠曲）	
			天文 元	二〇九二	宗長					
			九	二〇〇〇		獨吟千句				
			一八	二〇〇九	荒木田守武				空華集	
			二二	二〇一三	山崎宗鑑				（狂言）	
			二三	二〇二三			天草版伊曾保物語			
	107	後陽成	文祿 二						（錐の本）	應仁の亂起る（一四六七）
										吉利支丹宗傳來（一五〇九）
										秀吉關白となる（一五四五）
										文祿の役（一五五二）
										慶長の役（一五九七）

時代	天皇（代數）	年號	紀元	作者（年歴）	歌謠	小說	戲曲	その他	備考
江戸時代	107 後陽成	慶長一五	二六〇	細川幽齋					
		寛永一九	二三〇二	安樂庵策傳		可笑記			
	109 明正	承應二	二三一三	松永貞德					
	110 後光明	明暦元	二三一五	正三・如儡子		浮世物語			
	111 後西	萬治三	二三六〇			御伽婢子			
	112 靈元	寛文六	二三六六						
		一二	二三六二	丈山・元隣					
		天和二	二三四二	西山宗因					
		貞享三	二三四六	下河邊長流	春の日	一代男			
	113 東山	元祿元	二三四八			五人女			
		三	二三五〇	淺井了意		武家義理物語・日本永代藏			
		四	二三五一		ひさご				
		一四	二三六一	井原西鶴	猿蓑集				
		一五	二三六二	丈草・去來					
		寶永元	二三六四	北村季吟					
		二	二三六五	其角・嵐雪					
		四	二三六七		炭俵集				
	114 中御門	正德四	二三七四	益軒・義太夫					
		五	二三七五	森川許六					
		享保三	二三七八						
		九	二三八四	近松門左衞門					
	115 櫻町	元文元	二三九六	其磧・春滿					
		三	二三九八	上島鬼貫					
		寛保二	二四〇一	紀海音					

時代	天皇（代數）	年號	紀元	作者（年歴）	歌謠	小說	戲曲	その他	備考
江戸時代	116 桃園	延享三	二四〇六						
		寛延元	二四〇八	荷田在滿					
		寶暦元	二四一一	竹田出雲					
		六	二四一六						
	117 後櫻町	明和五	二四二八	賀茂眞淵		雨月物語			
		六	二四二九						
	118 後桃園	安永四	二四三五	宗武・太祇					
		八	二四三一						
		天明三	二四四三	千代		金々先生榮華夢			
	119 光格	五	二四四五	也有・蕪村・半二					
		寛政元	二四四九	春町・几董					
		二	二四五〇	柄井川柳					
		享和元	二四六一	蘆庵・宣長					
		二	二四六二						
		文化三	二四六六	伴蒿蹊					
		五	二四六八	五瓶・千蔭		東海道中膝栗毛			
		六	二四六九	上田秋成		椿說弓張月・賀茂翁家集			
		一一	二四七四			諢話浮世風呂			
		一二	二四七五	鹿都部眞顏		南總里見八犬傳			
		一三	二四七六	山東京傳		修紫田舍源氏			
	120 仁孝	文政五	二四八二	式亭三馬					
		六	二四八三	四方赤良			菅原傳授手習鑑		
		一〇	二四八七	茶山・一茶			假名手本忠臣藏		
		一二	二四八九	定信・南北					
		天保二	二四九一	良寛・一九					
		三	二四九二	頼山陽			傾城阿波鳴門	(川柳)	
		一三	二五〇二	種彦・篤胤					
		一四	二五〇三	景樹・春水			妹背山婦女庭訓		
		嘉永元	二五〇八	曲亭馬琴					
	121 孝明	萬延元	二五二〇						三人吉三
							國性爺合戰		
							鎌倉三代記・曾我會稽山・博多小女郎波枕		
								古事記傳	
									鵜衣
								(心學)	
									日本外史
									外國船打攘令を發す (二四八五)
									大鹽の亂 (二四九七)
									米船浦賀に來る (二五〇六)
									櫻田門外の變 (二五二〇)

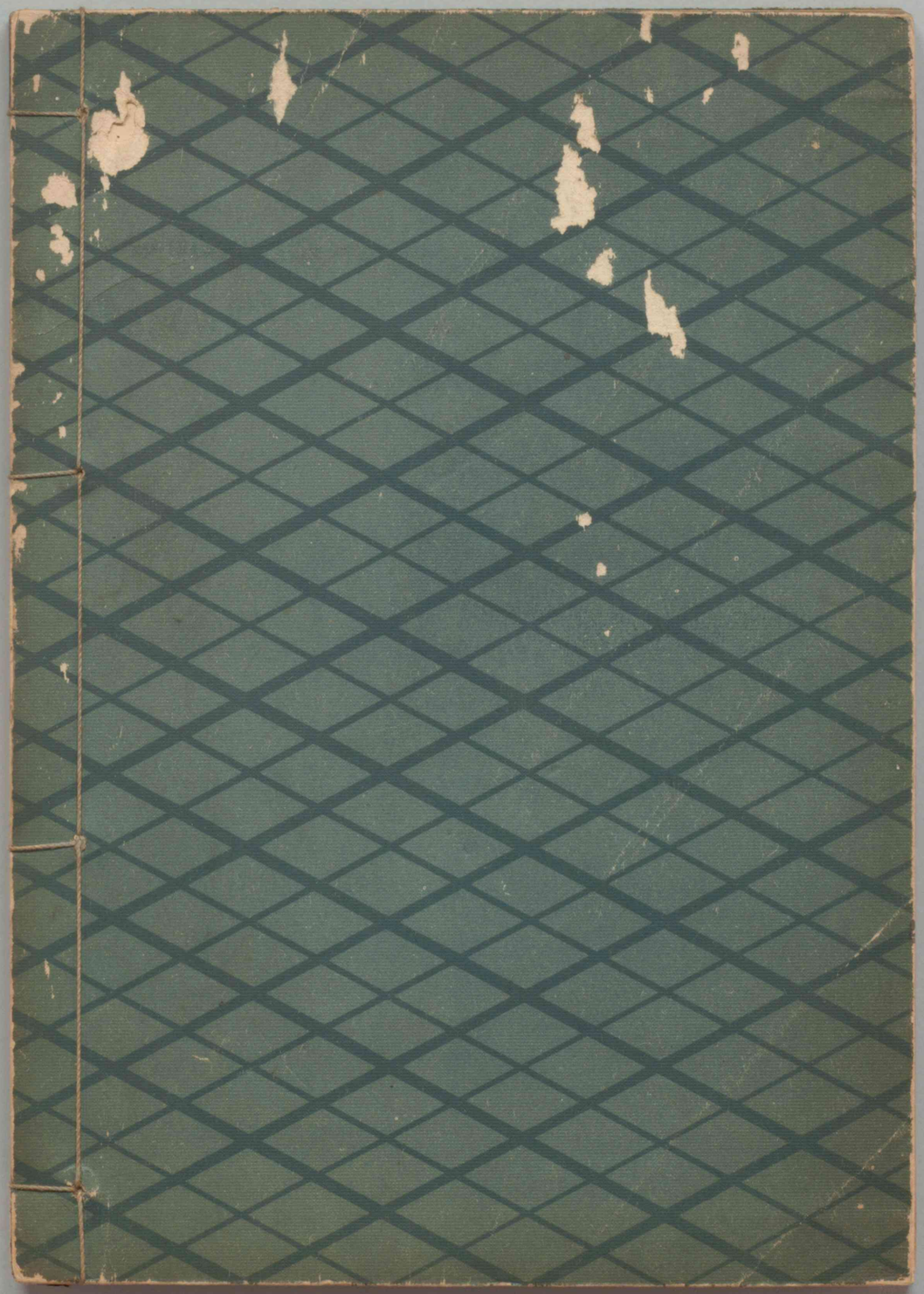
時代	天皇（御代數）	年號	紀元	作者（年歿）	歌謠	小說	戲曲	その他	備考
明治	122 明治	明治元	二五二八	言道・曙覽					大政奉還（二五二七）
		四	二五三一					西國立志編	五箇條の御誓文（二五二八）
		五	二五三二					學問ノスヽメ	
		一五	二五四二						東京奠都（二五二九）
		一七	二五四四	成島柳北	新體詩抄	自由太刀 餘波鋭鋒			廢藩置縣（二五三一）
		一八	二五四五			當世書生氣質			學制頒布（二五三二）
		二〇	二五四七			武藏野・浮雲	吉野拾遺名歌譽	小說神髓	
		二一	二五四八		孝女白菊の歌	風流佛・胡蝶			憲法發布（二五四九）
		二二	二五四九		於母影	五重塔	春日局		
		二四	二五五一	中村正直		風流微塵藏	桐一葉		
		二六	二五五三	古河默阿彌					日清戰爭起る（二五五四）
		二七	二五五四	透谷・魯文	水沫集	たけくらべ・うらおもて・十三夜			
		二八	二五五五						
		二九	二五五六	鐵腸・一葉					
		三〇	二五五七	森田思軒	若菜集	多情多恨			
		三一	二五五八		夏草・一葉舟	金色夜叉	查手鳥孤城落月		
		三二	二五五九	矢田部良吉	天地有情・暮笛集	不如歸			
		三三	二五六〇	正一・操山		己が罪			
		三四	二五六一	諭吉・乙羽	ゆく春・落梅集	思出の記			
		三五	二五六二	子規・樗牛	草わかば	牛肉と馬鈴薯			
		三六	二五六三	紅葉・直文		運命論者			
		三七	二五六四				新曲浦島		日露戰爭起る（二五六四）
		三八	二五六五	福地櫻痴	海潮音・春鳥集	吾輩ハ猫デアル			
		三九	二五六六	梁川・羯南	白羊宮	草枕・坊ちゃん	新曲赫映姬	歌よみに與ふる書	
		四〇	二五六七			虞美人草		病間錄	

時代	天皇	年號	紀元	作者	歌謠	小說	戲曲	その他	備考
明治	123 大正	大正元	二五七三	眉山・獨歩					
		四	二五七五	正風・啄木					
		四二	二五六九	四迷・學海					
		四三	二五七〇	美妙齋・楠緒子					
		二	二五七三	左千夫・雨江					
		四	二五七五	長塚節					
		五	二五七六	敏・漱石					
		六	二五七七	愛山・醒雪					
		七	二五七八	島村抱月					
		九	二五八〇	岩野泡鳴					
		一〇	二五八一	福本日南					
		一一	二五八二	鴎外・東海散士					
		一二	二五八三	武郎・白村					
		一四	二五八五	利玄・桂月					
	124 今上	昭和元	二五八六	風葉・鳴雪・赤彥					
		二	二五八七	蘆花・龍之介・千樫・瓊音					
		三	二五八八	柳浪・薫・牧水・天弦		春・生			
		五	二五九〇	田山花袋		お目出たき人・土			
		六	二五九一	矢野龍溪		世間知らず			
		七	二五九二	岡野知十		宣言			
		八	二五九三	巖谷小波		明暗・鼻			
		九	二五九四	水蔭・憲吉		和解			
		一〇	二五九五	逍遙・與謝野寛		忠直卿行狀記・田園の憂鬱・枯野抄			韓國併合（二五七〇）
		一二	二五九七	河東碧梧桐		暗夜行路			世界大戰起る（二五七四）
									關東大震災（二五八三）
									滿洲事變（二五九一）
									國際聯盟脫退（二五九三）
									支那事變勃發（二五九七）

昭和十二年八月二十五日印刷
昭和十二年八月二十八日發行
昭和十三年二月二十二日訂正再版印刷
昭和十三年二月二十五日訂正再版發行

國文學史新制版
定價金六拾錢

編者　東京市世田谷區世田谷一丁目九七八番地　高木武
發行者　東京市神田區神保町一丁目三番地　合資會社　冨山房
代表者　東京市神田區錦町三丁目十一番地　坂本嘉治馬
印刷所　精興社

發行所　東京市神田區神保町一丁目三番地　合資會社　冨山房
電話神田二、一七一—二、一七八番
振替貯金口座東京五〇一番

野本製